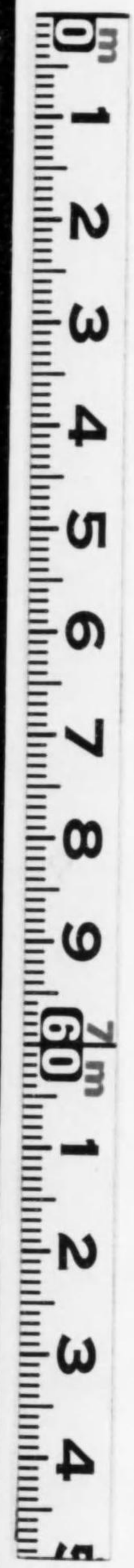


913.36-F67ウ



1200500757303

913.36
F07



始



913.36
F67

27 522
下



文化叢書第一卷
藤田徳太郎著

の構成



序

萬葉集と並んで、わが國の最大、最高の古典である源氏物語は、國民の教養や精神生活を通して、いつまでもその新しい生命が保たれなければならない。さうして、文藝の興隆した時代には、常に源氏物語が新しく生き返つて來るのである。江戸時代で云へば、西鶴や種彦を通して、源氏物語は立派に當代に生きてゐる。かくてこそ不朽の古典といふ事が出来る。

現代も亦、その時期であるべきであらう。此の物語は、いかなる批評にも超越して、嚴然とその雄姿を、われらの前に現してゐるのである。

ただ、言語や社會生活の變化が、古典に直接に觸れる事を妨げる場合も少くない。此所に種の研究が必要となり、様々の方法で、古典を現代に生かす事が考へられて來るのである。

此の書は、源氏物語を、その内容、及び一般の社會生活の背景の、兩方面から、遠く時代を隔てた現代人にも、作品の全貌や本質が理解せられるやうに考へて、書いたものである。必ずしも原作を面白く書きかへると云ふ企圖のもとに書いたのではない。本文は、先づ物語の梗概を、必要な限り、大小の事件や人物關係等に觸れて記し、ついで、その理解を與へるやうな注意や批評を加へて、作品の解釋としたのである。更に、註記においては、當時の風俗習慣や、物語の研究の手引にもなるやうな事に及んで、當代の生活の全面的な説明にかへた。これらの全部を通して、此の物語が種々の角度から眺められ、相當忠實な紹介をなし得たものと考へるのである。

2

ただ、源氏物語の眞實の讀解は、結局原作そのものに觸れなければ、いつまでも到達出来るものではない。その一階梯として、此の解説が役立てば、著者として、甚だ満足に覺えるのである。

本書の原稿は、十數年前に成り、學生生活を終つた後の、最初の仕事として、可成り努力をした思ひ出の深いものである。今それに、新に多くの筆削を加へ、面目を改めて、世の中に出る事となつたのは、自分にとつて、甚だ嬉しい事と思ふ。

殊に、その間に著しく社會の狀勢の變つて來た今日、本書が此の古典の理解と普及と、更にわが國の文藝の價値の闡明とに、いさゝかでもその役目を果す事が出来るなら、古典學者としての著者の面目これに過ぎるものはない。

昭和十四年九月

藤田徳太郎

3

目次

源氏物語の構成……………三

正篇 源氏時代

前紀 源氏君の前半生——二條院時代

第一期 少年期——戀愛の生活

一 桐	壺	……………	一七
二 帚	木	……………	二六
三 空	蟬	……………	三六

第二期 青年期—失意の生活

四	夕顔	四
五	若紫	五
六	末摘花	六
七	紅葉賀	七
八	花宴	八
九	葵	九
十	榊	十
十一	花散里	十一
十二	須磨	十二
十三	明石	十三
十四	滯標	十四

第三期 壯年期—榮華の生活

後紀 源氏君の後半生—六條院時代

第四期 中年期—幸福な生活

十五	蓬生	十五
十六	關屋	十六
十七	繪合	十七
十八	松風	十八
十九	薄雲	十九
二十	朝顔	二十
二十一	少女	二十一
二十二	玉鬘	二十二
二十三	初音	二十三
二十四	胡蝶	二十四
二十五	螢	二十五

二十六	常	夏	二八	
二十七	篝	火	二八	
二十八	野	分	二八	
二十九	行	幸	二九	
三十	藤	椅	二九	
三十一	楨	柱	二〇〇	
三十二	梅	枝	二〇〇	
三十三	藤	末	葉	二〇四
第五期 晩年期—不幸な生活					
三十四	若	菜	(上)	二〇八
三十五	若	菜	(下)	二〇〇
三十六	柏	木	二〇七	
三十七	横	笛	二〇五	

續篇 薰君時代

前紀 少年期—薰君と匂宮の話

源氏時代より薰君時代

三十八	鈴	虫	二五九
三十九	夕	霧	二六三
四十	御	法	二七一
四十一	幻	隱	二五五
○	雲	隱	二八〇

中紀 青年期—宇治姫君の話

四十二	匂	宮	二九二
四十三	紅	梅	二九七
四十四	竹	河	三〇一

宇治十帖の一

四十五 橋

姫

三〇

四十六 椎

本

三九

四十七 總

角

三四

四十八 早

蕨

三四

後紀 壯年期—浮舟君の話

宇治十帖の二

四十九 宿

木

三六

五十 東

屋

三九

五十一 浮

舟

三七

五十二 蜻

蛉

三五

五十三 手

習

三〇

五十四 夢

の浮橋

三七

源氏物語の構成

源氏物語の構成

源氏物語が紫式部によつて作られた作品である事は疑ふ事が出来ない。但し、全部が紫式部の作であるか、或は、後の方は別人によつて、紫式部の作に続け書かれたものではないか、などといふ考もあるが、その點は確かではない。此所では、全部を同一人の作、即ち、紫式部によつて創作せられたものとして説く事にした。

前の方が紫式部の作なる事は、紫式部日記に見える所によつても明かであるが、後の方は紫式部の作かどうか明證があるわけではない。併し、初の方だけを紫式部の作であるとすれば、若い源氏君の淫蕩なと思はれる生活の部分だけを紫式部が書き、後の方の、しかも此の物語においては、むしろ傑作であると考へられる部分が、紫式部の作でないとすれば、紫式部を、わが國文學史上の、代表的文豪として、第一流の作家に推す事は遠慮しなければならなくなる。

私はさういふ大膽な推定をする事が出来ないので、全部を紫式部の作と考へて、これを論じる事としたのである。

此の作品が、卷の順序に従つて、初から順々に書き進めて行かれたものかどうか、必ずしも確かではない。古來の傳説では、八月十五夜の月の美しさに魅せられて、紫式部は、石山寺で、先づ須磨明石の卷から書き始めたので、須磨の卷には「今宵は十五夜なりけり」といふ文句があるのであると云ふ。これに従へば、須磨明石の卷が最初に書かれた事になるが、勿論、此の傳説は信じられない。併し、それにしても、作者の感興によつては、必ずしも全部を卷の順の通りに書き進める事なく、ある興趣を感じた内容によつて、前の卷よりも後の卷を先に書き、後、その前の卷を書き足したといふやうな事もあるであらう。最初の桐壺の卷と帚木の卷にしても、桐壺の卷を受けるものとして、帚木の卷の冒頭の文章は、あまりに前の卷と關係がないから、桐壺の卷は、後に書き足されたのではないかといふやうな疑さへ起るのである。

紫式部は、此の作品をいつ頃書いたのであらうか。紫式部が、寛弘五年（一六六八年）八月から、同七年（一六七〇年）五月までの事を記した紫式部日記には、源氏物語の事が出てゐる

ので、その頃に、此の作品が出来てゐた事は確かである。併し、それは必ずしも此の作品が全部完成してゐたと云ふ證據にはならない。却つて、紫式部日記には、此の物語の始の方の事しか見えないから、當時は、源氏物語の前の部分のみが出来てゐたのであつて、その後に至り完成したものであるといふ事も考へられる。

紫式部は長保三年（一六六一年）四月に夫に死に別れて、以後寡婦の生活を續けた。此の時代に筆を執り始めたか、或は、寛弘二、三年頃の十二月に、宮中に仕へた後に至つて、作り始めたものか、確かではない。とにかく、寛弘五年頃には、前の方が出来て居り、その後數年間に後の方を完成したとして、前後約十年くらゐの歳月を費して、此の物語が出来上つたのではなからうかと想像せられるのである。

紫式部は、いかにして此の物語を執筆しようと思ひ立つたのであらうか。古來の傳説では、大齋院選子内親王（村上天皇十宮）が、一條天皇の中宮、上東門院彰子に、何かめづらしい物語はないかと尋ねられたので、上東門院が、仕へてゐる女官の紫式部に命じて作らせられたのが、此の物語であると云ふ。かくて、式部は、よい作品を得る爲めに、石山寺に祈願を籠めて、

八月十五夜に始めて筆を執つたと云ふのであるが、此の傳説も亦、信じられないのである。むしろ、その著作の動機は、作者自身の内面的理由に存するであらう。

その一は、夫藤原宣孝に死別した作者の寂寥の念にあつたらう。これは古くより考へられてゐた事である。その二は、作者が見聞した社會、特に宮廷社會の種々相が、作者の創作慾を刺戟した所によるものがあらう。源氏君の須磨への配流を以つて、高位高官の人々の左遷の實例に、その准據を求めようとした事は、これ又、古來行はれてゐた説である。殊に、その配流せられた人々が藤原氏以外の出身であり、多くが、藤原氏によつて、さういふ結果に落し入れられたものである事を見る時、さうして、就中、藤原氏と源氏、或は、藤原氏の内部においても、現に、同胞の間からにある、藤原道隆と道長との露骨な勢力争ひを、紫式部が眼の前に見せられた時、此の醜い事實が、その心を動かさないはずがない。此の物語の中に、源氏君の左遷や、藤原氏と源氏との争ひ、或は、左大臣家と右大臣家との確執が描かれてゐるのも、當時の宮廷社會の事實が、作者をして黙する能はざらしめるものがあつたからであらう。

此の物語は、決して、實際の事件を取り入れたものではない。登場人物も、そこに描かれて

ゐる事からも、大抵は作者の架空より出てゐるものである。それは、作者が理想的人物として、胸中にあこがれの情を抱いてゐる、ある幻の人物を點出したのであるが、しかも、實際生存して居られた高貴の方々の中に、その人物を直接に求める事が出来るやうなものではない。それ故、古來、准據を、實在の人物や歴史の中に求めようとした考へ方は誤まつてゐる。

併し又、そこに描き出された世相なり社會生活なりの現實面に觸れてゐる點や、登場人物の性格や行動の活き／＼とした描寫などからしても、これらが全く作者の腦中から出た架空の事からや人物ばかりであると云つてしまふのも、實際の創作心理に觸れた觀察ではない。作者は、確かに腦中に何か思ひ浮べる事がありながら、それを土臺として、それに多くの准飾や想化を加へつつ、此の物語を組み立てて行き、筆を進めて行つたものであらう。さういふ事がらや人物の中には、作者の身近に見聞したのも多かつたであらう。作者のお仕へした方、目上の人、それから、夫、父母、友人、さういふ人々の中に、これを求める事も必ずしも不可能ではないであらう。作者の友人の中には、筑紫に赴いてゐた婦人もある。さういふ所から、此の物語の玉鬘に関する九州の話の材料を得て來たと考へる事も、必ずしも不可能ではあるまい。

此の物語は、必ずしも紫式部が生きてゐた當代の社會を舞臺にしてゐるのではなく、むしろそれよりも稍以前の時代を、物語の世界としてゐるかの如く考へられる。それにもかゝらず、此の作品に描かれてゐる社會を、紫式部の時代のものとして考へる事は、決して不當ではない。假に、時代を、舊時に取つたとしても、そこに活寫された世相や社會面といふものは、どうしても現代的とならざるを得なかつたのである。

此の物語は、前半と後半とに分れる。即ち源氏君を中心とする時代と、薫君を中心とする時代とである。前者を四十一帖、全體の約三分の二を占めるとすれば、後者は、その後に續く十三帖、三分の一の分量を占める事となる。さうして、源氏君を中心とする時代は、源氏君の一生の生活を描かうとしたのであるから、自然、源氏君の年齢によつて、これを大體五期に分つて考へる事が出来る。又、薫君を中心とする部分は、前の如く、薫君の生涯を描かうとしたのではなく、むしろ、薫君、匂宮と浮舟との間に醸し出される戀のいきさつを物語らうとしたのであるから、これは、薫君の年齢の推移によつて區分する事は、適當してゐないが、やはり、その年齢による變化といふ事は考へられるのであるから、假に、源氏君の時代の如く、年齢に

よつて分つとともに、なほ、その内容を示す標識によつて、全體の組織を分解して見ると、次の如くなるであらう。

正篇 源氏時代

前紀 源氏君の前半生——二條院時代

第一期 少年期——戀愛の生活

一 桐壺より九葵まで (誕生より二十三歳まで)

第二期 青年期——失意の生活

一 〇榊より一四漆標まで (二十三歳より二十八歳まで)

第三期 壯年期——榮華の生活

一 五蓬生より二一少女まで (二十八歳より三十四五歳まで)

後紀 源氏君の後半生——六條院時代

第四期 中年期——幸福な生活

一 二玉鬘より三三藤末葉まで (三十四五歳より三十九歳まで)

第五期 晩年期——不幸な生活

三四若菜上より四一幻まで (三十九歳より五十二歳まで)

續篇 薫君時代

前期 少年期——薫君と匂宮の話

四二匂宮より四四竹河まで (十四歳より二十〔三四〕歳まで)

中期 青年期——宇治姫君の話

四五橋姫より四八早蕨まで (二十歳より二十四歳まで)

後期 壯年期——浮舟君の話

四九宿木より五四夢の浮橋まで (二十四歳より二十八歳まで)

源氏君の方は、年齢の推移が大體整然となつてゐるが、薫君の方は、年齢と巻との關係が甚だ混亂してゐるのは、此の兩者において、話の目的を異にしてゐるからである。

これを女性の側から見ると、源氏君の時代を通じての女主人公は紫上であると思はれるが、大體において、各巻の中で活躍する女性は異なるのであつて、これは、理想的人物たる源氏君

の一生を彩る女性として、單一の人物を女主人公としたのでは、變化がないから、種々にその人物を變へて行つたものであらう。従つて、薫君の時代の如く、その話の目的が前と異なるものにおいては、女性の點出の方法も亦、違つて來るのである。かくて、女性の側を主として、此の物語の組織を考へると、次の如くなるであらう。

正篇 源氏時代

序

1 桐 壺——源氏君生立

總論 2 帚 木——雨夜の品定

3 空 蟬——空蟬1

4 夕 顔——夕顔

5 若 紫——紫上1

6 末 摘花——末摘花1

7 紅 葉賀——源典侍

8 花 宴——臙月夜内侍1

第一期

續篇 薰君時代

序 42句 宮 薰君生立

後紀

第五期

41 幻 源氏君薨去

40 御 法 紫上2

39 夕 霧 落葉宮

38 鈴 虫 女三宮

34 若菜上

33 藤末葉 雲井雁2

32 梅枝 明石姫君

31 檜柱 檜柱上1

第四期

30 藤栲 玉鬘1

22 玉鬘

前紀

第二期

9 葵 葵上

10 桐 六條御息所 朧月夜内侍2

11 花散里 花散里

12 須磨 (ナシ)

13 明石 明石上1

14 滯標 明石上1

15 蓬生 末摘花2

16 關屋 空蟬2

17 繪合 秋好中宮

18 松風 明石上2

19 薄雲 薄雲女院

20 朝顔 朝顔 雲井雁1

21 少女 六條院完成

第三期

	前期	43 紅	梅	楨柱上 2
		44 竹	河	玉鬘 2
	中期	45 橋	姫	
		48 早	藤	宇治姫君
	後期	49 宿	木	
		54 夢の浮橋		浮舟

大體右の如くなる。かやうに、此の物語の組織、構想を考へた上で、その内容につき、説き進めて行く事にする。

なほ、此の物語は、源氏の物語といふのが、正しい云ひ方であるが、又、一に光源氏の物語とも云はれた。或は又、紫の物語とも云つたものがある。後代には、源語、紫文、紫語、紫史（これは、史記を馬史といふのに依つた名稱）などと異名を呼んだものもある。

正篇 源氏時代

前紀 源氏君の前半生——二條院時代

第一期 少年期——戀愛の生活

一 桐 壺 (誕生より十二歳迄)

一名 壺前栽 前栽 輝く日の宮

昔或る帝の御時、大勢の女御更衣の中に、桐壺の更衣といふ方があつた。身分は餘り高くなかつたが、容姿が優れてゐたので、帝の御寵愛を受けて、玉のやうな男御子をお生みになつた。それが爲め、他の女御方の嫉妬を得たが、就中右大臣の姫君で、他の人々よりも先きに帝の御傍に参り、今は東宮の御母として重んじられてゐる弘徽殿女御は、身分の低い、新参の此の更衣が寵愛せられるのを妬み、殊に東宮の御位を、此の皇子の御爲めに奪はれないかと思つて、心中も甚だ穩かでなかつた。それで種々の迫害が桐壺の更衣に加へられた。

更衣は辛勞が積り積つて病氣となり、お里に下つて暫く休養する事となつたが、既に重態となつてゐたので、療養も叶はずあの世へ旅だつてしまつた。時に忘れ形身の御子は三歳であらせられた。

後に残つた更衣の母の嘆きは云ふまでもなく、帝も深いお悲しみに閉ぢられ給ひ、秋の露茂き壺前裁の盛りを眺めつゝ、更衣の母の上を思ひ遣られては、女官を更衣のお里へお遣はしになつて、一人残された母をお慰めあそばされたりせられた。その母君も御子六歳の年になくなつた。翌年は七つになつたので、書始めの式が行はれた。

その頃、高麗から優れた相人が渡來したので、帝は密かに御子をその宿に遣はして、將來の運命を占はせになると、相人は

「國の親となりて、帝王の上無き位に登るべき相おはします人の、其方にて見れば亂れ憂ふる事や有らむ。公の固めとなりて天の下を助くる方にて見れば、又其の相違ふべし」(國の親として、天子の榮位にお登りになる人相がお有りになる方ですが、天子になられたら、國家に亂が起るやうな事があるかも知れません。國家の柱石たる大臣となつて、政治をお助けす

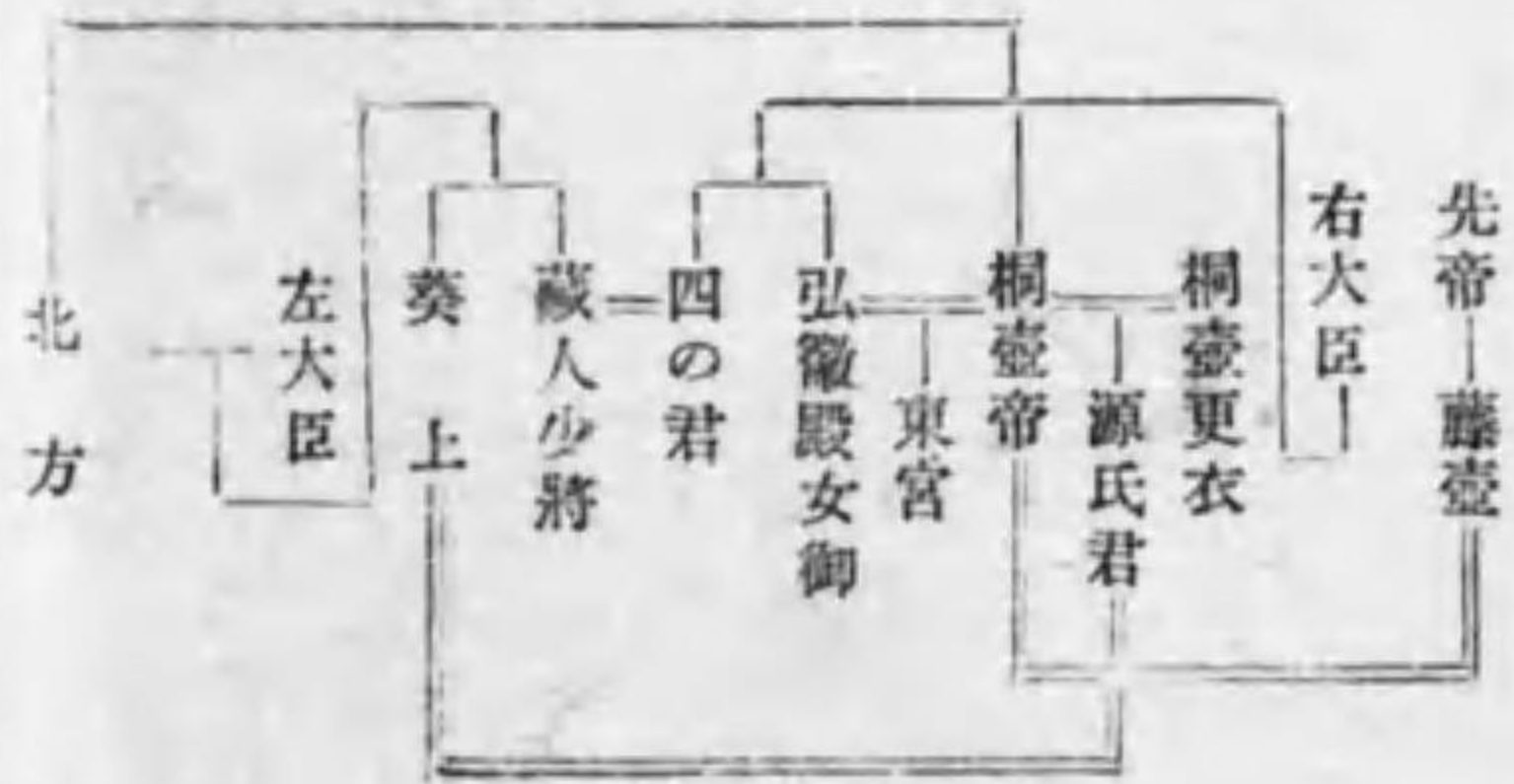
る事になれば、又その御運は違つて來るでせう。)

と判じたので、帝もその言に従はれて、御子を諸臣に下して、源氏の君と申す事になつた。

年月は過ぎても、帝の御心はお慰みになる時もなく、亡き更衣の事を憶つては鬱々として居られたので、女官の典侍が、先帝の四番目の姫宮は、桐壺の更衣に甚だよく似て居られて、美しい方であるから、此の姫宮をお召しになつたらいゝでせうとお勧め申上げた。帝もそれを聞かれて大いに喜ばれ早速お召し出しになつた。姫宮の御母に當られる、先帝の後の宮などは、弘徽殿女御の嫉妬を恐れて氣が進まなかつたが、その後の宮も間もなくなつて後、兄君に當る兵部卿官なども、帝の御申越しに同意せられたので、遂に姫宮は宮中に參られる事になつた。

此の方を得られて、帝の御心は再び春に復つたやうな御様子で、藤壺と申して御寵愛此の上もなかつた。源氏君も成長するに従つて、學藝は類ひなく上達し、殊に容貌は譬へるものもないやうに美しいので、世の人は光君と申し上げ、藤壺をも輝く日の宮とお呼びして、並び稱せられてゐたが、弘徽殿女御はまた此の藤壺とも御仲が悪かつた。

源氏君は亡き母の事を戀ひ慕つてゐたが、藤壺がその母上によく似て居られると言ふ事をきいて、藤壺の御顔を眺めては、それをせめてもの心遣りとしてゐた。十二年に元服(二十)の式をあげて、その時引入(引)の役をした左大臣の姫君、源氏君よりは四ツ年上の婦人(婦)と結婚した。この方は、弘徽殿女御が、以前から自分のお生み申し上げた東宮の女御にと、懇望してゐたのに、源氏君が婿となつてしまつたので、右大臣の方では甚だ快く思はなかつた。左大臣の北方(北方)、即ち源氏君の夫人の母上は、帝(帝)と御同腹の御妹で、左大臣の勢威は並ぶものもない程である。左大臣には子供が多かつたが、就中、葵上(葵)とは同腹の兄にあたる、藏人(藏)の少將は立派な方なので、右大臣と左大臣は餘り仲がよくなかつたが、右大臣は此の人を他家の婿とするに忍びず、遂に藏人の少將を自分の娘の四(四)の君の婿として、結婚させた。かくして左大臣右大臣兩家とも立派な婿を得たので、喜びに包まれてゐたが源氏君は何故か、その夫人を嫌つて、藤壺のやうな方を妻に持ちた



いと思つてゐた。併し、今は幼い時と違つて、藤壺の御顔を見る事すら自由には出来なかつた。源氏君の宮中の御部屋は、母更衣の居られた桐壺と定められ、更衣御附の女房達は源氏君に仕へる事となり、又更衣のお里の邸は改築して二條院と稱せられ、源氏の邸宅となつた。源氏君は、此の立派な邸宅に、藤壺のやうな、理想の婦人と同棲したら、何んなに嬉しい事かとも思つた。此の君を光君といふのは、かの高麗人が名づけたのだといふ事である。

○

此の卷は一篇の發端である。源氏君の生立を叙したもので、源氏君の生涯を描く爲めには必ずなければならぬが、源氏君の成長は、あわたゞしい年月の経過と共に、忽ち十二歳に達して、その間に詳しい描寫もなく、源氏君の幼年時代の生活には何等見るべきものがないので、此の點に於いて大して重要な卷ではない。しかも源氏君が繼母にあたる藤壺を戀するに至る所以を説いて、幼くして別れた母を慕ふ餘り、その母に似てゐると言はれた藤壺を戀ふるやうになつた過程が叙せられてゐる所は、後の物語の發展に大關係を有し、且つ源氏君の心理狀態を解するの重要な契點となる。思ふに、斯様な心理發展は極めて自然で、不倫であるといふ道

學的解釋をするよりも、寧ろ作者の人間性を深く観てゐる洞察力に感ぜしめられるのである。又、源氏君の生涯の運命に對する豫言がこゝに述べられてゐるのも、後の説話の發展に大なる關係があつて、看過する事が出来ない。此の初に運命的な豫言を與へて、内容の構成にある暗示を與へる方法は、源氏物語以前では、宇津保物語などが、やはり同様の構想になつてゐる。さういふ他の作品から暗示を得たのかも知れない。その他、右大臣左大臣兩家の確執の端なども描かれてゐて、これも物語の發展に重要な關係がある。

初の桐壺帝がなき更衣を慕はれる所は、しんみりとした悲哀の情緒がよく描き出されてゐて、古來名文として有名な箇所である。此の段が白樂天の長恨歌の詩に感じて書かれたものである事は否めない。但し、それは長恨歌を模倣したといふ意味でなく、これに共鳴感激して作者が筆を取つたのである。長恨歌が、平安時代の文學界に與へた影響の大なる事は、今云ふまでもあるまい。

終の方には頭中將の名も一寸見える。これ以後、頭中將は殆ど毎卷に顔を出して、源氏のワキ役となり、重要な役目を演ずる。此の二人を相對的に出して、主人公を益々光輝あらしめ、

且つ主人公一人が活躍する單純さを避けて、複雑味を増してゐるのは、作者の構想の凡ならざる所、かういふ手法は、女性の場合にも、紫上に對する明石上といふやうに對立的に出して居り、後にも、柏木と夕霧君、薫と匂宮といふやうに、相對的に人物を點出したのは、殊にその顯著な例である。

(一) 此の卷の名を取つて桐壺の帝と申す。

(二) 帝の御寢に侍する女官。更衣は女御より一段低い。女御の中より選ばれて中宮(皇后)となる。

(三) 淑景舎とも言ふ。女御更衣達の住まつてゐる後宮の一。而して女御更衣の名はその居る宮殿の名で呼ばれた。卷の名もここから出てゐる。

(四) 右大臣の長女。古い註釋書には此の人物をば「悪后」とも言つてゐる。源氏君を苦しめた腹黒の女性であるからである。

(五) 卷の一名の出所。壺は庭。前栽は庭の前方の草むら。壺前栽を略して此の卷の名を單に前栽の卷とも言ふ。

(六) 三歳より普通は七八歳にて行ふ。博士をして孝經(孝經以外の書)時として用ふ)を讀ましめ、

これを聴聞する式。讀書始めともいふ。これが男子修學の始めとなる。即ち入學式のやうなものである。

(七) 人相見。

(八) 運が開けてよくなるとの意。此の言葉が後の源氏君の一生の豫言となるのである。

(九) 皇子にして臣下に降下する時に賜はる姓は大抵源氏である。故に此の君も源氏の姓を賜はつて源氏の君と呼ぶ事になつた。

(一〇) 何時の帝で桐壺帝と如何なる關係になるのか明らかでない。

(一一) 飛香舎ひせうしゃとも言ふ。女御方の居る後宮の一。ここに住まつてゐたのでかく名付く。

(一二) 卷の一名の出所。此の一名は源氏秘義抄にも出てゐて、室町時代以前より行はれた説である。

(一三) 男子が成年となる儀式。童髪を短く切つて髻を結び、成年の姿となり、頭に冠をかうむる。又童服を大人の服に着代へる。加冠の役目をする人を引入(ヒキイレ)とも云ひ、最も重き役となす。又理髪の役目をする人もある。大抵十一歳より十五歳の間に行はれる。(十歳未満の事もある)。これを初冠(ウイカウブリ)ともいふ。

(一四) 葵上と呼ぶ。此の方が源氏君の正妻である。

(一五) 大宮と稱す。

(一六) 當時は正妻の他に妾が多く、子供の母が澤山ゐて、子供はそれぞれの母によつて育てられたか

ら、異腹の兄弟はうとうとしく同腹の兄弟は親密である。奈良時代以前には異腹の兄妹の戀さへ許容されてゐた。故に同腹といふ事が大切となる。

(一七) 此の物語を讀む上には普通頭中將と呼ばれてゐる人。

(一八) 四番目の姫君といふ意。男の子は長男を太郎、次男以下を次郎三郎といふやうに呼び、女の子は三の君四の君といふやうに呼ぶ。

(一九) 未だ女尊の風があつて、夫が妻の所に通ひ、夫が妻を引取つて同棲しても嫁に取るとは云はず婿になると云つた。これは妻の里方が夫の一身上に種々の勢力を持つたからである。それと同時に古代の家族制度の風習の名残りでもある。

(二〇) 當時成年の男女が話をする時には、男は縁側で女は座敷の内で、簾垂を隔て更に几帳を隔てて對するのが普通である。故に男が女の顔を見る事はなかなか出来なかつた。

(二一) 古來此の解釋に苦しんで不義を現して正しきを教へる諷諭の爲めだといふ儒教的解釋や(明星抄、源氏外傳、紫家七論等)、世の無常を讀者に感じさせる爲めだといふ佛教的解釋や(湖月抄所引或抄)、莊子の寓言によるとか、物のあはれ説や色々な意見があつた。

二 帶 木 (十七歳夏の事)

光源氏君と名はよいが、好色のよからぬ噂が多いのに、その秘密をあばき立てて、語り傳へるとは口の悪い人達だ。

さて、源氏君が未だ中將で居られた時分の事、五月雨の絶え間なく降る頃に、源氏君の部屋へ頭中將が遊びに来た。頭中將は源氏君の夫人葵上の兄君で、源氏君とは無二の遊び友達である。その中將が、源氏君の御厨子の中に、女が寄越した艶書を見付けた事から、話は自然と女の善し悪しの噂話に落ちて来た。頭中將は言つた。

「人の品高く生れぬれば、人にもてかしづかれて、隠るる事も多く、自然にそのけはひこよなかるべし。中の品になむ、人の心々おのがしゝ立てたるおもむきも見えて、分るべき事かたぐひ多かるべき。下のきざみといふ際になれば、ことに耳立たずかし」(上流社會に生れた女は、人からもてはやされるので、缺點も大抵隠れてしまつて、自然に其の様子が甚だ立

派となるのでせう。中流社會の女こそ、その精神やそれ／＼の個性が現れて、いろ／＼な點でよしあしの差別のつけられる所が多いでせう。下層社會の女に至つては別に耳にもとまりません。)

源氏君は、それでは上流社會から零落した者や、下層階級から成り上つた者などは、その三つの階級の何れに屬するのかなどと議論してゐる所に、左馬頭や藤式部丞の如き女好きの連中が集つて来たので、一層賑かとなつて話は益々はずんだ。

左馬頭は論じて云ふ。「大工が道具を造るにも、流行の品物を面白く造り出す事は易しいが、定まつた製法のある晴の御道具を立派に造る事は甚だ難しい。又畫家が繪を描く時にも、想像上の風景や、猛獸や、鬼神等を、人目を驚かさやうに書く事は何でもないが、人目に近い庭先の景色等を、人の注意を引くやうに書くのは難しい。それと同じく、派手な流行を追ふ、人目につき易く作つてゐる女は一向に頼にはならない。風彩よりも心の眞實な女の方が宜しい」と云つて、自分の女に關する經驗談を語つた。

左馬頭が若い時分、嫉妬深い女と關係してその女を懲してやる爲めに、そんなに邪推を廻す

やうなら、私はお前と關係を絶つと脅した所、女は怒つて自分の指に食ひついたので、それに懲りて、以後此の女の所に行かなくなつた。次に又自分の行き通つてゐた女は學問才藝があつたが、或る秋の晩、此の女が一人の貴族と琴笛の合奏をやつてゐるのを見て、關係を絶つてしまつたと昔の話をすると、頭中將も、自分の關係してゐた女は物優しい性質で、子供まで設けた仲であつたが、妻がそれを知つて、ひどい事を女の所に言つてやつて脅したものだから、氣の弱いその女は怖れて、それに丁度自分も暫く遠ざかつてゐた際なので、到頭何處かに姿を隠してしまつた。その後子供に逢ひたいと思つて、内々女の行方を探してゐるのだと話した。藤式部丞も亦負けずに、自分が大學の學生であつた時、ある博士の娘で、非常に學識のある女と關係したが、ある晩訪れて見ると、その女は、風邪をひいたので、蒜を食つてゐるから今晚は逢ふ事が出来ないと言つた。如何にも蒜の臭氣がふん／＼として耐らないので、逃げ歸つたなどとそれ／＼經驗談を話した。源氏君はこれらの話を聞くにつけても、藤式部の事が戀しく思はれてならなかつた。

かくて一夜を語り明かした翌日、源氏君は方違の爲めに、源氏君の家來の紀伊守が住んでゐ

る中川のほとりの家へ行つた。折から、紀伊守の父伊豫介の後妻で、未だ年若な空蟬も此の家に來合せてゐた。源氏君は此の家の人々こそ、かの頭中將の話した、中の品に當るのであらうと心が動いた。その夜、女房達が源氏君の噂をして、源氏君が式部卿官の姫君に朝顔の花を贈つた話などをしてゐるのを、源氏君は忍び聞きながら、人々の寢靜まるのを待つた。その中、夜が更けてあたりも靜かになつたので、源氏君は不意に空蟬の寢所に忍び込んで、遂に一夜の契をかはしたのであつた。

翌日、源氏君は左大臣の邸へ歸つてからも、空蟬の事が忘れられず、空蟬の弟なる小君を手元に引き取つて、これを使ひとして音信を通じようとしたが、空蟬は源氏君の言葉に従はないので、思ひ餘つて再び紀伊守の家に出かけた。前の夜に懲りた空蟬は、今度は用心して、何うしても源氏君に會はないので、源氏君は悶々の情を歌に託して、小君をして空蟬の部屋へ持つて行かせた。

二七はよき
帚木の心を知らで菫原の道にあやなく惑ひぬるかな

(帚木は信濃の菫原にあつて、遠くから見れば形はあるが、近くによればその形を見失ふ

と言ひ傳へてゐる木、その木を空蟬に譬へた。自分はつれないそなたの心とは知らずして、かやうにお傍まで尋ねて来たが、一向姿をお見せにならないので、途方に暮れてゐるのです。）

併し、空蟬からは一首の返歌を得たのみで、遂に思ひを遂げる事は出来なかつた。その返歌は、かやうに記してあつた。

數ならぬ伏屋ふしやに生ふる名の憂さにあるにもあらず消ゆるくせ常木

（かやうな賤しい家に居る私と、貴い御身分のあなたとの間に、浮名をたてられるのは心苦しい事ですから、居るにも居られず逃げ隠れてお會ひしないのです。）

○

源氏一篇の實質的發端として此の卷を推すべきである。此の卷で、作者は頭中將や左馬頭等を通じて、その女性觀を述べてゐる。中流階級の、世間から離れた片山里に住んでゐるやうな女の中に、理想的な女性を見出す事が出来ると言つた。そしてその理想的女性は、やがて後になつて、此の物語の女主人公紫上として現れて来る。

心の眞實な女が理想的な女性であると云ふ左馬頭の議論は、亦作者の思想を代辯するものであつて、かういふ考へ方が「紫式部日記」の中にも度々見えてゐる事は、安藤爲章の「紫家七論」でも論じて居る通りである。嫉妬深い「指食の女」、浮氣な「木枯の女」、女としての慎みに缺けた「蒜食の女」等は單なる挿話にすぎないが、説話としても面白く、女の性格も可成りよく出て、短くはあるが篇中の有名な話となつてゐる。而して、作者はこれらの女性には全く好意を持つてゐない。何れも男から捨てられてしまふ。後に出て来る末摘花の如く、容貌は醜くても、時代遅れであつても、心の眞實な女は遂に救はれる。さういふ所に作者の考へ方、女性に對する好みが出てゐると云つてよからう。

これらの他にも、女性の種々相が論じられてゐるが、それらのあらゆる性格の女性を、作者は、次の卷から讀者の眼前に如實に描寫して、展開せしめようとしてゐる。此の卷は以下の卷の總序でもあり、概論でもあり、又結論でもある。

多くの女性を論じた中、頭中將も自分の經驗談として、夕顔と呼ばれる女の事を語つた。その何でもないやうな挿話が、後になつて一つの物語を展開して来るのは、此の作者の常套手段

である。極齋院の事を女房の噂話として一寸出して、此の人物が後に一箇の地位を占めて来るのも亦同じ作者の手法である。

なほ、冒頭の文句は殊に有名で、作者が小説を事實めかさうとして、特にかういふ書出し方をした所に興味がある。

殊に、此の冒頭の數句は、源氏君の性格を、作者が最初に説明した句として注意すべきである。それによれば、源氏君は種々の浮名を流すけれども、實は交野の少將にも笑はれるやうな野暮な男で、浮氣な色事などは大嫌ひな性質である。たゞ時として、我にもあらず女に迷つて、あらぬ戀を深く思ひつめる事があるだけで、その爲めに、爲すべからざる振舞も交るのだと、かやうに書いてゐる。これによつても、作者の、作中の人物に對する態度もどうかゞはれ、源氏君の性格が、元來眞面目な人として描かれてゐる事も明かである。たゞ時として、意馬心猿の狂ふ事があるといふのは、血の氣の多い青年として、やむを得ない所であらう。かういふ所にも、人間味に富んだ人物を描かうとする作者の心持が現れてゐる。以下の源氏君の行爲も、此のあらぬ戀といふ所から解すべきであらうが、時として、全くの浮氣男のやうに思はれる箇所

も交つてゐる。併し、大體において、作者が源氏君の性格を描き出さうとした意圖は失敗でないといふはれる。源氏君は中年に至つて、青年時代の客氣を失ふとともに、その誠實心だけが残つて、あらぬ戀に理性を失ふといふ所はなくなつてゐる。此所にも、作者の人間をよく見てゐること、その内面描寫の巧みさに驚かされるのである。要するに、此の所は、源氏君の性格に關する語として、以下所々に見える、同様の説明の文句とともに、注意せられるべきものであらう。

(一) かういふ主観的な書き出しは、此の作者の一つの書き方である。それで後の物語でも、大抵此の筆法を眞似て、かういふ書き出しをしたものが多い。下にも度々出て来る。

(二) 前の卷では藏人の少將と出てゐた人物で、此の卷では昇進して頭中將となつた。頭とは藏人の頭。此の藏人の頭と近衛府の中將を兼ねてゐる人を頭中將といふ。但し頭は必ず中將か又は辨官から兼ねる事になつてゐた。こゝはこの職務にある人の事なので、實名はわからぬ。此の官は後に段々昇進してゆく。

(三) 道具を置く棚。今の茶箆筒の如きもの。

(四) 指食の女と名付ける

(五) 此の時、此の女がその男に向つて、「木枯に吹き合はすめる笛の音を引(彈)き留むべき言(琴)の葉ぞなき」といふ歌を詠んだので、木枯の女と呼ばれてゐる。

(六) 夕顔と呼ぶ。

(七) 女の子。玉鬘と呼ぶ。又頭中將が此の子を撫子に譬へて歌をよんだので、撫子の君とも言ふ。何れも實名ではない。又此の人の童名を瑠璃君と言つたらしく、玉鬘の巻には右近と言ふ女房の言葉の中に「藤原の瑠璃君」と出てゐる。頭中將は藤原氏なのでかく言つた。これは實名である。

(八) 大學寮の略。昔式部省に屬し經學曆算を教授してゐた所。これに對して地方にあるものを國學といふ。こゝで經學を受けるものが學生で、教へる先生は博士である。

(九) 蒜食の女と呼ばれてゐる。

(一〇) 蒜(にんにく)は身體が温まるので當時風邪の藥とされてゐた。

(一一) 是迄を雨夜の品定といふ。雨夜の品定とは、作者が夕顔の巻でさう云つてゐる。

(一二) 當時の迷信。行くべき方角が悪い場合には、一時他の方角の家に泊つて後、目的の方向に向ふ。此の凶の方角を外す事を方違といふ。

(一三) 中川は、京極川の事。賀茂川は東、桂川は西、京極川はその中央で中川である。河海抄以下の

諸抄に説いてゐる。併し、一説には、東賀茂川、西堀川、今の寺町を中川と云ふとある。空蟬の夫伊豫介の住居もやはり中川であつた。

(一四) 實名でなく、後に出す歌によつてかりにつけた名。又作者は、空蟬の事を帯木とも、關屋の巻で呼んでゐる。即ち次の帯木の歌によつて、しか稱したのであらう。

(一五) 桐壺の帝の御弟。

(一六) 槿と名づく、詳しくは朝顔の巻に出づ。

(一七) 此の歌によつて此の巻の名がつけられた。

(一八) 「枕草子」や「落窪物語」にその名に見える古き物語小説。その主人公で、好色家で且つ才貌絶倫のよしに見える。光源氏君の先継とも見られる人物で、此の物語は、當時最も有名な宮廷人の愛讀書であつた。

三 空 蟬 (十七歳夏の事)

その後、源氏君は猶空蟬に逢ひたいと心を碎いてゐる折から、紀伊守も任國へ下つたので、よい機會であると、小君とともに女許りの中川の家に向つた。

源氏君が格子の隙間から中の家をのぞくと、空蟬の部屋には紀伊守の妹の軒端萩が來合せてゐて、二人で碁を打つてゐる所であつた。空蟬は決して美しい容貌ではなかつたが、そのしとやかな様子に心がひかれた。軒端萩はよく肥へて愛嬌のある顔容であるが、だらしない下品な所が空蟬よりも少し劣つてゐるやうに思はれた。

その中、人々が寢靜まつたので、源氏君は小君に導かれて、空蟬の部屋に忍び込む事が出来た。併し、空蟬は既に源氏君の這入つて來るのを知つて、自分が寢てゐる體に着物を脱ぎ棄てて、そと外へ出て行つた後であつた。源氏君は其とも知らず、空蟬の傍に寢てゐた軒端萩を、空蟬と思つて添寢をしたが、人違ひである事に氣がついて、女も呆れ、源氏君も氣の毒に思つ

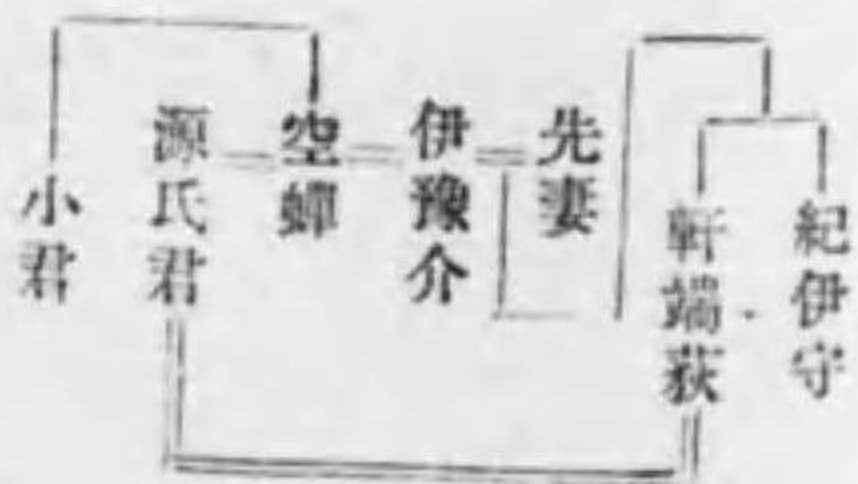
た。併し人違ひであるといふ譯にも行かないので、かね／＼思ひをかけてゐたなどとうまく言ひ慰めておいて、源氏君は、空蟬の脱ぎすてた小袿を、せめてもの形見として、二條院へ持ち歸つた後までも、空蟬の頑な心が怨めしく思はれて、一首の歌を疊紙に書きつけた。

空蟬の身をかへてける木の下になほ人がらの懐しきかな

(空蟬とは單に蟬の事。着物を脱ぎすてた事を蟬の脱げ殻に譬へて、身をかへてけると言つた。空蟬が着物を脱ぎすてて姿を隠したその仕打ちは怨めしいが、やはりその人がらが懐かしく思はれる。)

その後小君は、此の疊紙を持つて、姉の空蟬の所へ行つたところ、空蟬は、小君の無分別な事をたしなめたが、さすがに、源氏君の書いた筆跡には、なつかしさうに見入つてゐた。軒端萩は、源氏君から後朝の文の來ない事を、悲しく思つた。

空蟬も、今更源氏君の事を思つても、どうにもならぬわが身の上を寂しく思つて、源氏君から來た疊紙の端の方に、



空蟬の羽に置く露の木隠れて忍びくゞに濡るる袖かな

(蟬の羽に置く露が、木の間に隠れて見えないうやうに、私も人知れず涙に袖を濡らして泣いてゐるのです。)

と書いて、心をあきらめたのであつた。

○

作者はこゝに一人の貞節な女性を描いてゐる。源氏物語全巻を通じて、源氏君の誘惑に打ち勝つた女は、此の空蟬と後の権齋院あさかほさしのみんの二人だけである。他に、藤壺があるが、これは又、此の二人の場合とは事情が違つてゐる。而して、権は餘りに冷い感じがするが、空蟬はその容貌も大して美しくなく、源氏君にも心がひかれて、十分思慕の情をもつてゐるけれども、源氏君とは身分も違ふし、殊に夫のある身の上であるからと考へた結果、一度は如何にもならぬ場合に置かれた爲め許したとしても、二度とは源氏君に逢はなかつた。そこに、一種の温い人間性に富んだ、分別盛りの婦人を見る事が出来る。理性的な婦人は冷い感じがするのであるが、空蟬には少しも冷い感じがしない。種々なる女性の中、その一方の性格を代表してゐる婦人である。

(一) これも假名であつて、夕顔の巻に源氏君が此の女を軒端萩に譬へて歌を作つたからかく呼ぶ。

(二) 唐衣の代りに着物の上に着る打掛の如きもの。女の略式の禮服。

(三) 懐中紙。鼻紙。略して單に疊うとも云ふ。

(四) 此の歌から巻の名が出で、女の名も出た。

(五) 當時男が女の所に忍び通つて歸つて來た時には、翌朝に必ず後朝の文を女の許に遣さなければならぬ。女の方からもそれに對する返書がある。男が此の後朝の文を女にやらないか、または正午以後に遅れるのは、男が女に對して愛情をもつてゐないといふ證據になるので、當時の女に取つては甚だ侮蔑を受けた事となる。

四夕 顔 (十七歳の夏より十月迄の事)

その頃、源氏君は六條なる前坊の御息所の所に忍び通つてゐたが、その六條御息所の所へ行
くついでに、途中の五條に住んで居る乳母の大貳が、病氣が重くて尼になつたといふ事をき
たので、見舞に立ち寄つた。乳母の子で、源氏君の親しい家來なる惟光が門をあける間、隣の
垣根に、夕顔の花の咲いてゐる家の中をさしのぞいて、御隨身に、あの花を一房折つて來てく
れと云つたので、御隨身が庭先きに入つて行くと、家の中から子供が出て來て、その花は此の
扇の上において差し上げたがよいでせうと云つて、一つの扇を渡した。

その中、門があいたので、源氏君は、部屋に入つて、大貳の乳母を親切に慰め、種々の話を
して、惟光に隣の家の女の事を聞くと、惟光は例のうるさい御心と思つたが、隣家は揚名介で
あつた人の持家で、男は田舎へ下り、妻の姉妹が女官であつて、時々遊びに來るやうであるが、
よくは事情を知らぬと答へた。それで源氏君は、歸りがけに、かの扇をひろげて見ると、中に

は美しい文字で、次のやうな歌が書いてあつた。

心あてにそれかとぞ見る白露の光添へたる花の夕顔

(夕顔の花に白露の光つてゐるやうに、光り輝く美しいお顔の持ち主は、多分あの名高い
源氏様でせう。)

やがて源氏君は乳母の所を辭し去つたが、それから後、此の家の前を通る度に心がひかれる
のであつた。

その頃、伊豫介が上洛して、妻の空蟬を伴ひ、國へ下る事になつたと聞くと、源氏君は又そ
の方に心が移つて、小君を責めてもう一度逢ふ事を望んだが、空蟬はすつかり源氏君の事を思
ひ切つてゐた。それで源氏君は、六條御息所の所を訪ねる事も怠りがちで、時には、御息所に
仕へてゐる女房の、中將のおもといふなまめかしい女に、せめてもの氣晴れに、戯れかかる
やうな事もあつた。

惟光は、かねがね源氏君の言ひ付けて、隣家の様子を探つてゐたのであつたが、ある時、立
派な車が此の家の前を通つた所、女房達が大騒ぎで、口々に頭中將様のお車だとさゝやいて、

隙間からのぞいて見てゐたと、惟光が源氏君に報じた。源氏君はそれをきいて、では、もしやあの雨夜の晩にきいた頭中將の思ひ人ではないかと思はれたので、もつとよく探るやうに惟光に云ひつけた。

やがて、惟光は、その家の女房に言ひ寄つて、戀仲となり、その手蔓で、源氏君をも此の家に導くやうにしようと、種々才覺を廻らした結果、遂に源氏君はその家の女主人と忍び逢ふ仲となつた。此の女——夕顔と呼ぶ——は、

「柔やはらかに大どきて、深く重き方は後れて、ひたぶるに若びたるものから、世よを未だ知らぬにもあらず、いとやむごとなきには有るまじ。」(優しくこそしなない性質で、奥ゆかしく重しい所は少く、如何にも若々しくはあるが、未だ男を知らないやうでもなく、もう戀の経験はあるらしい。大してよい身分の者では無ささうだ。)

寧ろあの頭中將が輕蔑してゐた下の品しなの女かも知れないと思つたが、源氏君はなほ心がひかれて、お互ひに身の素性も、名前も明さずに、逢つてゐた。

八月十五夜、空には清い月が此の五條邊の小家がちなるあばら家を照らして、板屋根の隙間

から月の光が洩れてくる。曉方になると、近所の者は朝早くから起きて、商賣の暇な事を嘆いて聲高に話してゐるのが隣家から聞え、稻舂かちすの音も枕元に響く、すべてが源氏君にとつては見聞みきこした事もない有様であつた。その朝、源氏君は、夕顔と二人だけでもつと打解けた話をしたいと思つて、女を誘つて、夕顔と女房の右近だけを車に乗せ、程近くの何がしの院といふ別荘に連れ込んだ。長い間手入も加へずに、荒れるに任せておいた此の邸の様子は、甚だ物凄くまた淋しく感じられた。併し二人は、十六日一日を、こゝで楽しく過したが、その夜源氏君は、夢に怪こしい女が夕顔の枕元に近寄ると見て、眠りから覺めた。見ると、あたりは森閑として、燈火も消えてゐる。右近を起すと、これも怖しさうに慄へてゐるのみで、役には立たぬ。漸くの事に、此の院の留守居をしてゐるものもつて來た燈火で、夕顔の様子を見ると、あの夢の中で見た女の幻が、夕顔の枕上にふと現れて消えた。源氏君は怪しく思つて、夕顔の傍らに添ひ臥しながら、その身體を揺り動かして見たが、既に身體は冷えきつて、息はとくに絶え果ててゐる様子である。源氏君は驚いてその死骸を抱き上げ、右近も泣き悲しんだが、何とも致し方がないので、二人は死骸の傍で氣味の悪い一夜を明かした。

翌朝惟光が来たので、委細を話してその後始末を相談すると、幸ひ、惟光が以前懇意であつた女房が、今東山の邊で尼になつてゐるので、その庵室に死骸を持つて行く事にして、席に包んで、車に乗せ、右近と共に東山に運んだ。十七日一日は、蘇生するかも知れぬと思つて、そのまゝでおいたが、絶望ときまつたので、十八日茶毘に付する事とした。その前夜、もう一度夕顔の死骸なりとも見たいと思つて、源氏君は馬に乗つて東山に出かけたが、その歸りがけ、堤の邊で落馬して、歸つて來ると、急に苦しみ出して、その後廿日餘り重い病氣を患つて寝つてしまつた。

九月廿日頃に、その病氣も本復したので、源氏君は夕顔に仕へてゐた女房の右近を手元に引き取つて、その素性を尋ねたゞした所、それはかね／＼源氏君が察してゐた通り、かの頭中將が雨夜の晩に話した所の、子まで設けた女なのであつた。父は三位中將で、兩親に早く死に別れ、頭中將が未だ少將であつた時分に、通ひ始めて、その關係は三年ほど續いたが、去年の秋頃、夕顔は、頭中將の妻四の君の脅迫を怖れて、一昨年生れた女の子とともに、此の西の京の五條邊に住んでゐる乳母の家に姿を隠したの

玉壹

頭中將

三位
夕顔

源氏君

である。此の話を聞いて、源氏君はその忘れ形見の子供を引き取りたいと思つたりした。夕顔は今年十九になるとも右近は語つた。一方、五條の家に残つてゐた女房達は、夕顔及び右近の行方を尋ねたが、遂にわからなかつた。

その頃、かの空蟬は、源氏君が病氣であると聞いて、見舞の手紙を書いてやつた。源氏君も病み上りの震へる手で返事を書いた。それから又、軒端萩が藏人の少將といふ婿を貰つたと聞いて、源氏君は次のやうな歌を萩の葉(二)に附けて、女に遣はした。

ほのかにも軒端(三)の萩を結ばずば露のかごとを何に懸けまし

(あの晩に、はかない契を結ばないのであつたなら、今あなたが婿を貰つたからといつても、少しも怨み言を言ひかけるわけではないのだが。)

その中、夕顔の四十九日が廻つて來たので、ひそかに比叡の法華堂でその法會を行つて、源氏君も追憶の情に堪へなかつた。

夕顔とのはかない別れを悲しんでゐる源氏君は、また空蟬とも別れなければならなくなつた。空蟬は夫に伴はれて、いよ／＼伊豫の國へ行く事になつたのである。十月朔日頃に、出發する

といふ事なので、源氏君は櫛や扇などを贈り、また源氏君が持ち歸つたかの小袿をも返してやつた。

○

帚木の巻で頭中將の話した女が此の巻の女主人公となつてゐる。それは素直で弱々しい、如何にも日陰に寂しく咲く夕顔の花が象徴してゐるやうな女である。そして夕顔の散る如く果敢ない死に方をしてしまった。可憐な性格の女として、源氏物語に出て来る種々なる女性の中に一地位を占めるべき人物である。

六條御息所の事も始めて出て來た。此の女性も亦鮮明な輪廓を持つてゐる人物として、此の物語の主要なる役割をつとめてゐる。六條御息所と源氏君がどういふ徑路を経て戀仲となつたのか少しも説明してゐない。さういふわかり切つたいきさつは全く省いて、突然に此の女性を出した。そこに作者の賢明なる頭腦を窺ふべきである。然るにそれが物足りないといふので、本居宣長は「手枕」一篇を作つて、二人が、夫を失つた婦人への同情から戀に陥る平凡な戀愛事件を書き添へたのは、既に紫式部が夕霧と落葉宮との關係についても描いてゐる所、全く續

紹の訕を免かれぬ。なほ、夕顔といふ此の巻の女主人公を出す爲めに、始めに突然六條御息所の事を書き出し、此の一寸記された端役のやうな人物が、後に重要な位置を占めるのは、即ち作者の例の筆法である。又、頭中將と夕顔との間に出來た女の子は、更に後になつて重要な人物として現れて來る。

さて、此の巻には如何にもしんみりとした情調がたゞへられてゐる。市井にすむ可憐な少女との戀物語が主となつてゐるが、それが少しも感傷に墮さず、寧ろ平民から離れた貴族の高踏的な話の中に、かやうな中流社會の女を點出した所は、甚だ物懐しい感じを讀者に與へる。源氏君が夕顔の家に泊つて、隣家の人達が世間の不景氣な話を大聲でしてゐるのを聞く所など、當時の小説としては甚だ珍しい描寫である。

此の巻には象徴的氣分が豊かにただよつて、文章も亦その氣持にふさはしい名文である。一巻の首尾よく統一して、全篇中の名篇といふ事が出来る。

(一) 五條六條は京都の町筋。源氏君の住居は二條。

- (二) 坊とは皇太子の御事。前東宮は桐壺帝の御弟で薨去せられた方。
- (三) 女御更衣にして皇子をお生み申し上げた方を御息所と稱す。前坊と六條御息所との間には女の御子があつて、此の方が後に重要人物の一人となる。
- (四) 當時の女の名は父または夫の氏姓或ひは官職名によつて呼ばれるのが普通である。こゝも此の乳母は大宰大貳の妻であつたからかく云ふのであらう。
- (五) 病氣が重くなつた時には、病苦を免がれる最後の手段として、出家得道して佛の加護を祈るのが當時の習慣である。
- (六) 一定の身分の者に外出の時護衛として朝廷から賜はつた近衛府の武人。身分によつてその人数が違ふ。中將は四人の御隨身を賜はる。役目をやめた時には御隨身を返すのである。
- (七) 昔から此の物語の三大秘事中の随一として有名。名のみを國守で、國務を取らず、祿も得ず、たゞ名を揚げるだけといふ意味に解される。
- (八) 此の歌によつて巻の名と女の呼名が生じた。又、夕顔の事を頭中將が常夏に譬へて詠んだ歌が帯木の巻の、頭中將の話の所に出てゐるので、此の巻には此の女の事を常夏と作者が稱してゐる。
- (九) もとは宮中に仕へてゐた上級の女官を云つたが、後には一般の家で使つてゐる召使ひ、女中の類をもいふ。

- (一〇) からいふ場合の世とは今の世といふ意に同じ。
- (一一) 六條御息所の嫉妬の生霊であると古く云はれてゐるが、巻中には何とも説明はしてゐない。
- (一二) 此の當時他所へ文を遣はすには、梅や櫻や萩やその他季節の草花に文を結びつけて使の者に持たせてやるのを風流とした。歌も大抵その文を附ける草花に關係のある事を詠みこんだものが多い。
- (一三) 此の歌によつて空蟬の繼娘を軒端萩と稱す。
- (一四) 葵の巻に明瞭に人物が出てゐる。
- (一五) 寶曆十三年頃成り、寛政四年に刊行せられた源氏君十三歳の秋から十六歳の春までの事を補作した雅文小説。
- (一六) 夕霧の巻に出づ。

五 若 紫 (十八歳の三月より冬迄の事)

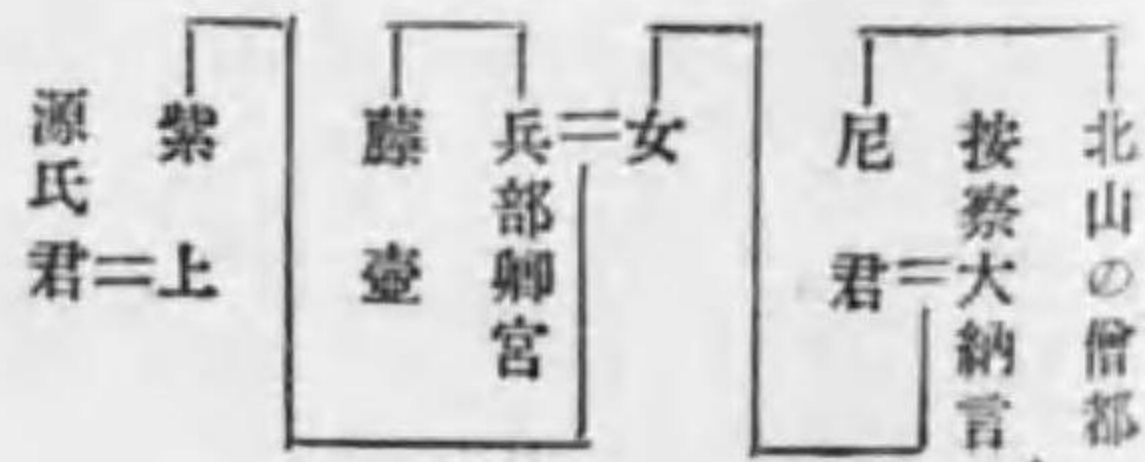
源氏君は夕顔に死に別れて後、心地がすぐれず、瘧病を患つたので、北山のある寺に、加持に験のある名僧を訪れた。折から彌生の晦日、春の長閑な景色を賞しながら種々の話をしてゐるうち、お供をしてゐた家來の良清は、播磨の明石に住む、以前國守をしてゐた變り者が美しい娘を持つてゐて、大變寵愛してゐると云ふやうな話をしたので、人々から氣があるのであらうとひやかされたりした。

やがて源氏君は山の中を散歩してゐると、此處より少し下の方の何某といふ僧都の庵室に、十許りの美しい女の子がゐるのを見付けて、源氏君の心は甚だ動いた。丁度その僧都も源氏君の所に入りしてゐる人なので、訪れて様子を尋ねると、此の子は、故按察大納言の姫君と兵部卿との間に出來た子供であると語つた。源氏君は、此の子がかの藤壺に似てゐるのに心がひかれたのであるが、兵部卿官の子ときいて、兵部卿官は藤壺の兄君に當られるから、その似て

ゐるのも無理はないと合點が行つた。丁度女の子の祖母なる尼君も病氣療養の爲めに來てゐるので、此の子を是非引き取りたいものだと思つた。尼君に頼みこんだが、尼君は何うしても承諾しなかつた。

北山から歸つて來た源氏君は、妻の墓上の所を訪れたが、いつもの通りに、部屋の中から、なか／＼出て來ないで、夫に顔も合はさず、父左大臣から叱られて漸く出て來ても、繪の中の人形のやうに端然としてゐて、取附場もないやうな様子でゐるのが源氏君には物足らなかつた。

その頃、藤壺が病氣でお里に歸つて居られるといふ話をきいて、源氏君は藤壺お附の女房王命婦の手引きで、そのお側に近づく事が出來たが、その後藤壺はたゞならぬ身となられ、やがて人々の注意をひく程にもなつたので、女房達は、かやうなめでたい事を今まで帝にお知らせしないとは何うした譯かと驚き怪しんだ。たゞ藤壺自身と、王命婦等だけには、まぬがれる事の出來なかつた運命が、はつきりと思ひ知られたのであつた。源氏君も異様な夢を見たので、夢判斷をする者に占はせると、源氏君の御子が、將來帝になられるやうな



事があるが、普通の事情とは違つてゐる所があるから、注意するがよろしいなどと意外な事をいふので、口留をしておいたが、藤壺懐胎の話をきいて、さてはと覺つた。

七月になつて、藤壺は宮中へ歸られた。帝は藤壺の懐胎したのを嬉しくお思ひになつて、一層御寵愛が増された。

秋の末つ方、源氏君は六條御息所の所へ行く途中に、かの北山の尼君の、京都の邸の前を通つたので、惟光に訪ねさせて見ると、かの尼君は孫娘を連れて、北山から京都の住居へ歸つて來たが、病氣が益々重くなつたといふ事なので、源氏君も親しく見舞ひに立ち寄つた。併し、姫君の顔は見る事が出来なかつたので、源氏君は思ひ餘つて、次のやうな歌をよんだ。

手に摘みて何時しかも見む紫の根に通ひける野邊の若草

(紫草をば藤壺に譬へた。自分の戀しく思つてゐる藤壺と血筋の通ふ此の女の子を、何時になつたら自分の手中の花とする事が出来るのであらうか。)

十月には朱雀院に賀の祝の行幸があるはずなので、その準備の爲めに源氏君も忙がしくて、

尼君の所を香く訪れなかつたが、久しぶりに見舞の手紙をやると、先月——九月——の廿日頃

に尼君も到頭なくなつてしまつたといふ返事を、北山の僧都から受け取つた。

やがて、源氏君が此の姫君の所を訪れて見ると、父上なる兵部卿官が、尼君の四十九日を過ぎた頃に、姫君を引き取られる事になつたといふ話であり、且つ兵部卿官の北方(ま)には多くの御子が生れてゐて、此の姫君の母君をひどく嫉み憎んでをられたから、あの邪見な繼母に苛められる事を恐れて、今まで尼上は姫君を兵部卿官の方へ渡さなかつたのだといふ乳母の少納言の話なので、明日父宮が迎へに來られるといふその前の晩に、源氏君は姫君——紫上をば、父宮よりも先きに、乳母の少納言と共に自分の邸へ連れて來た。後で宮は手をつくして姫君の行方を探されたが、遂にわからなかつた。

○

源氏物語全巻を通じて女主人公の位置に立つ紫上をこゝで始めて點出した。未だ十餘りの少女としての無邪氣な動作が甚だよく描き出されてゐる。藤壺と源氏君との所謂「物のまざれ」の件や、その結果、藤壺が懐胎されるといふやうな、全篇の構想の中心となる事件も此所で始めて述べられてゐる。此の巻は源氏物語一篇の主想の發端となつてゐると云つてもよい。

尤も、源氏君が藤壺に近づいた事は、此の巻で始めて出て来るが、本文の文章によると、それよりも前に、既に一度「浅ましかりし」事があつたらしい。それで藤壺は懲りてゐたので「さてだにやみなん」(もう此の後は源氏君を近づけまい)と思つたのに、また源氏君が近づいた事になつてゐる。とにかく源氏物語の内容的發展の契機が、此の巻に至つて始めて示される事になるのである。

源氏君が北山で人々の話をきいてゐる中に、明石の前國司の話が出たが、此の何でもない話の中の人物が、後に物語の發展に大關係を持つて来るのは、前にも述べた如く作者の常套手段である。

なほ、物語の前半では可成り重要な地位を占める葵上の性格も、よくこゝに描かれてゐる。此の人の事は葵の巻に詳しい。

更に、此の巻は、春の自然描寫にすぐれた所がある。作者の敘景の文章に巧みなるを見るのに適當してゐる巻で、作者が、此の物語に一貫してゐる抒情の文、乃至、心理描寫、性格描寫に巧みなる所とともに、敘景の文にもすぐれてゐて、表現、描寫の筆力に間然する所なきを思

はしめるものである。さうして、此の自然描寫と人物描寫との、いみじき調和が、此の作者の得意とする所である。

さて、成長後の紫上の性格について説明すると、此の女性は、おとなしく慎ましやかな、貞淑な性質であるが、併しそれは、單なる床の間の置物のやうな、人形のやうな、愛嬌に乏しい女性であるといふのではなく、勿論愛嬌もあれば、またかなり嫉妬したりする事もある、必ずしも、後代に典型的な女性として考へられるやうな、人間味に缺けた女なのではない。後世の良妻賢母型の女性とは違つて、理想的な女性である中にも、普通の女らしい血が通つてゐる。此所が、紫上のすぐれた所で、源氏君の心をひきつける所以であり、同時に、さういふ人物を作中に出した作者のすぐれた所でもある。此の紫上は、蜻蛉日記の著者と一脈類似するものがある。たゞ蜻蛉日記の著者には、幾分愛嬌に乏しい所があるが、紫上はなかなか愛嬌に富んでゐる。さうして、此の種の女が、最も物のあはれを解した、當代の理想の婦人であつたのであらう。

- (一) 病氣を癒す爲めに祈禱する事。
- (二) 按察使と大納言を兼官してゐる人。但し按察使は名のみで實際その役を勤めたのではない。
- (三) 此の歌によつて此の巻を若紫と名付け又女の子を紫上と稱す。實名ではない。但し總角の巻にも紫上と、その名が出てゐて、作者がさう呼んでゐるのである。
- (四) 此の事は紅葉賀の巻に詳しく記されてゐる。
- (五) 此の北方の性質等については、檣柱の巻に明かである。
- (六) 新しい小學校の國定教科書にも此の所を續案して出してゐる。

六 末摘花

(十八歳の春より十九歳の正月迄の事)

源氏君は、なほ、夕顔の事が戀しくてならないので、これに代る女は居ないものかと探し求めてゐるうち、大貳の尼君について、源氏君が慕つてゐた左衛門の乳母の娘で、宮中に仕へてゐる大輔(こたけ)の命婦といふ、若い女房が、故常陸宮の末子で、たゞ獨り寂しく暮して居られる姫君の事を源氏君に話して、その姫君の容貌性質などはよく知らないが、琴が非常にお上手だと語つたので、源氏君の心は甚だ動いた。それから後は、源氏君は此の姫君にのみ心を盡して、常陸宮の邸の垣根のもとに立ち隠れて、その琴の音に聞き入つてゐる時、あとをつけて來た頭中將に姿を見付けられて、ひやかされたやうな春の夕べもあつた。その後、頭中將も源氏君も競争で手紙を姫君に贈つたが、どちらも返事を貰ふ事は出来なかつた。

かくて夏も過ぎ、秋となつて、八月廿日過ぎに、夜更けて源氏君は姫君の所を訪れ、遂に命婦の計(はから)ひで、その晩姫君と慇懃を通じる事が出来たが、何うもその姿が美しい人のやうには思

はれなかつた。

十月となつて朱雀院行幸の折が近づき、（ヨシ）試樂などと云つて騒いでゐる頃、源氏君も常陸宮の姫君の所へ行く事が暫く途絶えたので、命婦は源氏君の邸へ来て、姫君に同情を求めたりした。かくて、或る雪の降つて寒い晩、常陸宮の女房達が、汚（カ）い着古しの着物を着て、寒さに震へながら、生活のつらさをかこつてゐる時、源氏君はその家を訪れた。そして、次の雪の朝、縁側に連れ出して、その姿をよく見ると、此の姫君の容貌の醜（みにく）さ、脊はひよる長くて、色は青白く、額はおでこで、しかも鼻と云へば高くつき出て、少し垂れ下つた端の方が赤く色づいてゐる様は、丁度普賢菩薩の乗物に似てゐた。源氏君は寧ろ此の有様を珍らしく思つて、その姿をしげしげと見守つた。古びた着物を着て、（五）黒貂の裘衣（カ）を羽織つてゐる様子を見ては、呆れて言葉も出なかつたが、源氏君は寧ろ可哀さうになつて、此んな人は、自分以外には誰も世話をしやるものもあるまいと思つて、いろいろ生活上の必需品を贈つたりした。

その年の暮に、姫君の所から贈り物として、新年の源氏の着料に、古びた直衣（カ）をよこしたので、源氏君はをかくしく思つて、次のやうな歌を姫君からの手紙の端に書きつけた。
懐かしき色ともなしに何に此の末摘花を袖に觸れけむ

（末摘花とは紅花の事で、花「鼻」の先が赤いといふ意味で姫君を譬へた。すぐれた容色でもないのに、此の姫君と、どうして關係を結ぶやうになつたのであらうか。）

新年となつて、七日に、初めて、常陸宮の姫君の所を訪ねて見ると、姫君が袖で口を覆ひ隠しながら笑ふ、その袖の下から、例の末摘花が、赤々と差し出てゐた。そして、二條院へ歸つて来た源氏君は、紫上と遊び戯れて、女の繪を書いてその鼻に紅を附けて見たり、自分の鼻の先に紅をぬつて、それが取れぬ困つた事になつたと云つたりして、笑ひ合つた。

○
作者は此處に又特異な一女性を出してゐる。容貌は醜（みにく）くてしかも時代遅れの氣のきかぬ姫君である。此の卷は全く滑稽な情調の中に終始してゐるのは、前の夕顔の卷が寂しい陰鬱な氣分で蔽はれてゐたのと正反對である。作者はよく氣分を書き分けて、讀者を飽かしめぬ手腕を持つてゐる。

初めさぞ美しい女であらうと思はせた姫君が、意外にも甚だ醜（みにく）かつた所に讀者の滑稽感をそそるのは、諧謔美の現し方の正道に就いてゐる。單なる語句の洒落や卑猥の動作による滑稽以

上に出てる。凡作家の及ばざる所で、又竹取物語や落窪物語の滑稽以上に評價せらるべき所以である。さうして、かういふ性格の女性も世間に往々ある型の人物として、此の物語に現れる多くの異つた性格の女性の中に加へられてゐる所が、更に作者の觀察力の非凡なるを思はせる。單なる滑稽的人物として、讀者の氣分を轉換させる爲めに挿入せられたのみではなくして、立派に一個の生きた性格をそなへてゐる所に、此の巻此の人物の價値があるのである。

殊に、滑稽の中に末摘花の淋しい貧乏な生活を描いて、讀者に憐憫の情を抱かせるのは、一層深味を増してゐる。末摘花の、氣がきかぬけれども、温和しい貞淑な所は讀者の同情をひくものがある。

(一) 左衛門の乳母と兵部の大輔といふ者との間に出来た娘で、左衛門の乳母は後に筑前守の妻となつて夫と一所に筑紫に下つた旨が巻中に記されてゐる。

(二) 燈火の薄暗い中であるから、互ひに手さぐりで相手の容貌を觸つて見るくらゐが圖の由で、美

醜などははつきりとわからぬ。

(三) 御賀、行幸等の際の音楽をその前に試みに奏し練習する事。

(四) 鼻の先の赤い象。

(五) てんの皮で作つた着物。當時は古臭い老人の着る物として若い者は着なかつた。

(六) 巻の名は此の歌より出づ。また姫君の名もこれによつて末摘花と呼ぶ。實名ではない。

(七) 竹取物語には言葉の洒落や卑猥な滑稽が多い。

(八) 落窪物語には糞の上に尻餅をついたとか、老人が着物に大便を洩らしたとかいふやうな汚ない滑稽が多い。

七 紅葉賀 (十八歳の冬より十九歳の秋迄の事)

十月十日餘りに、桐壺帝は朱雀院に行幸せられて、先帝の御爲めに賀の祝を催される事になつたので、その前に先づ内裏で試樂が行はれた。それは、藤壺が懐胎中で、此の行幸のお伴をする事が出来ぬのを帝が遺憾に思はれて、わざ／＼催されたのである。その日は、頭中將と共に舞つた源氏君の青海波の舞が出色の出来榮で、人々の感涙を催すほどであつたから、源氏君は藤壺に文を贈つて、どのやうに自分の舞を見給うたかと書いた。

いよ／＼御賀の當日になると、朱雀院の池には樂の船が浮べられ、紅葉の木蔭で奏する四十人許りの樂人の樂の音に合せて、青海波を舞つた源氏君の姿は、恐ろしいほどまでに輝いて見えた。その夜、源氏君は正三位に叙せられ、頭中將は正四位下に加階せられた。

その頃、藤壺はお里へ下がつてお産の用意をしてゐたが、生み月は少し遅れて、十二月も正月もその事なく、二月十日餘りに男御子が生れられた。四月に若宮は参内して、帝と御對面に

なつた。帝は大變お喜びになつて、そのお顔が源氏君によく似てゐるのは、美しい方の幼な顔は皆此のやうに似てゐるものなのであらうと仰せになつたりした。そして、此の上もなく若宮を御寵愛になつたが、それにつけても、藤壺も源氏君も一層心が苦しくてたまらなかつた。それをまぎらはず爲めに、源氏君は紫上のお部屋へ行つて、その無邪氣な姿を見ては心を慰めてゐた。そして、かういふ美しい人を見捨てては、葵上の所に行く氣もしないので、無沙汰に過ぎる日が多かつた。此の事を聞かれて御父君なる帝は、葵上の父左大臣が、これまでに、源氏君の世話をした心遣ひやら、つまらぬ戀をして、人を苦しませる事の不心得などを説きさとされたのであつたが、源氏君はたゞ黙つてゐるだけで、御返事も申し上げなかつた。

その頃、年六十に近い源典侍といふ老女が女官達の中にゐた。年は取つても色氣たつぶりの浮氣な女であつた。物好きな源氏君は、此の老女にも冗談を言つたりして、遂に近づきとなつた。これを知つた頭中將もまた、好色な心から、此の老女に云ひ寄つた。

或る夕立の上つて、涼しい夜、源氏君は、琵琶を弾いてゐる此の老女の所に遊びに来て、その夜は此所に泊つた。頭中將は、源氏君が、かね／＼眞面目さうな事ばかり言つてゐるのが少

し癢に觸つてゐたので、これを見附けてよい機會だと思ひ、太刀を抜いてその間に忍び込んで、昔此の老女と關係のあつた男が、嫉妬の刃を振ふかの如く装つて、二人を嚇したので、二人とも大いに驚いたが、二十ばかりの二人の青年の間に、五十七八の老女の挿まつてゐる様子といふものは、あまり見つともよい圖ではなかつた。併し源氏君は忽ち男の正體を見つけたので、結局大笑ひとなつて、源氏君と頭中將の二人は出て行つた。あとに残された源典侍一人だけが、此の狂言を淺ましくも怨めしくも思つた。

此のやうな戯れのうちに月日も過ぎて、七月になると、藤壺は皇后にお昇りになり、源氏君は宰相となつた。帝は近く位を退かれて、藤壺のお生みになつた若宮を東宮に立てようと思つて居られるので、その準備として、藤壺を動きなき位にお上げになつたのであつたが、それにつけても、弘徽殿女御の心は穩かではなかつた。世間の人々も、今の東宮の御母として、二十餘年も女御となつて居られる此の方をさしおいて、藤壺の立后は如何な事と噂しあつた。

○
若い源氏君の華やかな生活が描かれてゐる。前の末摘花の滑稽と言ひ、此の巻の源典侍の滑

稽と言ひ、華やかな生活にふさはしい挿話である。此の、老女と美男子との滑稽化された戀物語は、既に伊勢物語にもあり、溯つては萬葉集卷二なる石川女郎と大伴宿禰田主との話にもこれを求める事が出来る。石川女郎は亦大伴宿奈磨に

古りにし姫にしてやく許り戀に沈まん手童のごと

と言ふ歌を贈つてゐる浮氣な年増女である。思ふに、此の種の女も往々世間に見る所である以上、種々なる性格の女性を描き出さうとしてゐる作者は、此の種の女をも逸する事は出来まい。單に滑稽な挿話といふよりも、もつと深い所に作者の意圖はある事と思ふ。その間、源氏君と頭中將と二人のライバルは、様々の人物を相手として競争をする。前の末摘花と云ひ、此の源典侍と云ひ、若い二人が挑み争ふさまを描き出してゐるのであるが、それは大抵中將の方の敗北に終つてゐる。併し、勝つた源氏君といへども必ずしも威張る事は出来ない。相手は案外な婦人なのである。此所に笑の導かれる機縁があるが、源氏君の成功といふ事は、理想的人物として出してゐる以上、當然さう處置しなければならぬ作中の位置にあるのである。

藤壺の宿された御子も此の巻でお生れになつた。此の事は、若紫の巻の藤壺と源氏君との「物

のまぎれ」の件に直ちに接するのであつて、女性の種々相を描かんとする作者の大きな意圖の間を縫つて、物語の中心となる事件が脈々として隠顯起伏してゐる事が認められる。

(一) 三條朱雀に四町に作られた邸。代々上皇の隠棲あそばす所。

(二) 一院と稱す。此の巻だけに出づ。

(三) 四十以上十年毎に長壽の祝を子息達からするのを年賀といふ。巻の名はこゝから出た。春行はれるのを紅梅の賀といひ、夏は藤の賀、秋は紅葉の賀、冬は雪の賀といふ。ここは源氏君の御祖父君に當られる一院の御賀であるから、恐らく六十または七十の賀の祝であらう。

(四) 二人舞。青海は青海原の意、波は破で、樂曲を序破急の三段に分つその中間の部分。即ち海波の動くを型どつた舞と解せられてゐるが、一説に青海は西域の地名でそこから出た舞であらうと言はれる。服装の最も華美な舞で、美しいので當時大いに愛好せられた。この巻の他此の物語の中にもしばしば舞はれる。

(五) 池に龍頭鶴首の船を浮べ、中で音楽を奏するのは當時の園遊の習慣である。

(六) 後に冷泉院と申す。

(七) 參議。正四位相當官。但し源氏君は正三位で此の役目になつたのである。

(八) 第六十二段つくも髪の話。

(九) 田主は甚だ美男子で、石川女郎は賤しい軀に扮して田主の所に忍び込んだが目的を達しなかつたとある。

(一〇) 更に老人が美女に戀するといふ滑稽な挿話は、宇津保物語の太宰帥滋野真菅の貴宮に對する戀や、落窪物語の典藥助が落窪姫君に對する戀などの中に見える。これらも亦老人と青年との不似合な戀に笑を求めようとする同じ思想より生れたもので、當時流行した小説の構想といふ事が出来よう。

八花宴 (二十歳春の事)

二月廿日餘りに、宮中南殿で花見の宴が開かれ、人々は探韻を賜はつて詩を作り、春鶯轉の舞を舞ひ、東宮の御所望で源氏君も頭中將も一差し舞つた。その晚宴が終つてから、源氏君は酔心地に、此のやうな場合に藤壺にお逢ひする機会があるかも知れぬと思つて、その邊を親ひ歩いたが、少しも忍び込む隙間はなかつた。折から弘徽殿の細殿を、「朧月夜に似るものぞなき」と歌ひながらやつて来る若々しい女に出會つたので、源氏君はその袖を捉へて、三の口の開いてゐるのを幸ひ、錠も鎖してないので、此んな不用心な事から、世の中に女のあやまちも出来るのだと思ひながらも、そのまゝ女を許す事が出来ず、部屋の中に女を伴ひ入れて、遂に思はぬ契をかしたのであるが、相手の女が幾ら尋ねても名前を言はないので、源氏君は夜が明けて自分の部屋へ歸つてから、いろ／＼と考へ廻らして見ると、何うもそれは源氏君とあまり仲のよくない右大臣の姫君、弘徽殿女御の五番目か六番目の妹君のやうに思はれた。あの女が、

帥の宮の北方や、頭中將の妻君四の君であつたなら、かへつて此の秘密の關係も面白い。六の君は東宮へ参る筈になつてゐるから、若し其の人なら困つた事をしたと思ひつゝ、なほ家來の良清、惟光等に命じて様子を探らせて見ると、弘徽殿女御の一家の人々が退出して行つた、その中に、車の内の奥ゆかしく思はれる女車が三つあつたと報じたので、源氏君は胸をどきつかせた。併し、右大臣には大勢の女の子があるので、誰か見當がつかなかつた。

翌日、葵上の所を訪れたが、例によつて、重々しくして、急にも對面しないので、源氏君は、いつもの事とは云ひながら、面白くなく、昨夜の女の事が思ひ出された。此の女は源氏君の想像通り、右大臣の六の君で、四月に東宮に参る事になつてゐるのであるが、女も亦、源氏君の事が忘れられずに惱んでゐた。

三月廿日過ぎに、右大臣家で藤の花見の宴が開かれて、源氏君も招待せられたので出席した。夜更けてから、源氏君は、酔を醒すやうなふうをして、姫君達の居る部屋のあたりを、あの晩の女の心に思ひ當るやうな歌を歌ひながら、うろついてゐると、部屋の中では、それを聴いて

桐壺帝	弘徽殿	帥の宮	北の方	頭中將	四の君	朧月夜	源氏	東宮

右大臣

溜息をついてゐる氣配がするので、源氏君は大變嬉しくて、几帳越しにその女の手を捉へた。

○
源氏君の華やかな生活はなほ續く。櫻見に藤見に、酒と女と、あらゆる享樂の具が並べられてゐる。

作者は又こゝで一人の異つた性格の女性を點出した。即ち朧月夜の内侍である。如何にも若若しい、誘ふ水あらば強ひて拒みはせぬといふふうの女、夜更けにたゞ一人歌を歌ひながら外に遊びに出るといふ所にも、その性格の一端が知られる女、言はず無邪氣で快活で思慮の淺い、人の言ひなりになる女である。今の言葉で云へば、モダンガール式の女とも云はれよう。併し、このやうな女も亦、女性の一方を代表せしめるべき性格を備へてゐるといふ事が出来る。しかも、此の女との關係が源氏君の生涯に一大轉期を興へて、こゝに源氏君の闇黒時代が來るのであるが、此の卷には、さういふ暗い陰は少しもさしてゐないで、寧ろその華やかさを増すために出された女性であるかの如く思はれる。全く歡樂で満ちてゐる卷である。かやうな歡樂の中に活動してゐる女性が、意外にも悲哀の原因となり、しかもそれを全く豫想せしめずに、

讀者を艶かしい香氣にむせかへらせる所が、作者の手腕である。感能描寫のかなり突込んだ所まで書かれてゐる。

此の卷の最後は、女の聲を聽いた源氏の心持を、「いと嬉しきものから」(甚だ嬉しくはあるもの)といふ、無量の感概を含めた言葉で表現して終つてゐるが、此のくどくどしい説明のない簡単な結句は、古來甚だ有名で、如何にも面白い一巻の結び方であると思ふ。

(一) 紫宸殿の事。左近の櫻の花見。

(二) この櫻の宴の事によつて卷の名が出た。

(三) 當時盛んに行はれた遊戯、詩文の句を分つてその中の一字を探し取り、それを韻字として詩を作る。

(四) 春の鶯の鳴く音を模した音樂。舞もそれにふさはしい長閑な舞。一名天長賣壽樂と云つて目出度い舞とせられ、青海波と並んで當時最も愛好せられたので、しばしば奏せらる。

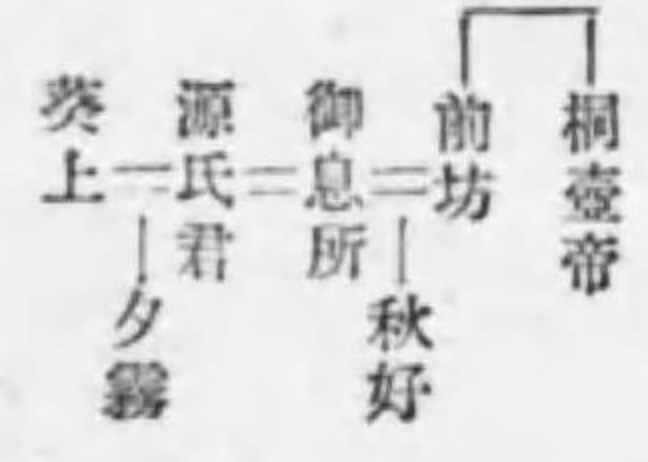
(五) 廊の一種で渡殿と同じ。弘徽殿と登華殿とを連絡する廊。一説には弘徽殿の西方に並んで建つてゐる廊をいふといふ。

- (六) 「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の臘月夜にしくものぞなき」(大江千里。新古今集)此の歌を歌つた事によつて此の女を臘月夜と名づける。卷中には有明の君とも出てゐる。源氏君は此の女と有明の月夜に逢つたので、さやうに稱した。
- (七) 北から三番目の格子。此所が出入口で遺戸となつてゐるのが、閉めてなかつたのである。
- (八) 帥の宮は後に養兵部卿官として出づ。その北の方は弘徽殿女御の妹で四の君の姉。

九 葵 (廿二歳の四月より廿三歳の正月迄の事)

桐壺帝が御讓位になつて、六條御息所と前坊との間にお生れになつた姫君が、今度齋宮になられたので、母御息所は、源氏の大将の心も頼みならず、年齢も源氏君とは似合はしくない仲だから、此の際、一層の事思ひ切つて、娘と伊勢へ下らうと心を定めた。

齋院も代つて、弘徽殿女御のお生みになつた女三の宮が、齋院とられた。
 四月の賀茂の葵祭の頃になると、新齋院の御禮の式が、例年よりは華やかに
 行はれる事になつたが、源氏君も祭の行列に加はるといふので、葵上は侍女達
 に勧められて、車を並べてその行列を見物に出かけた。一條の大路は見物の人



人で雑鬧を極め、六條御息所の車もその人々の中に交つてゐた。葵上の一行は下人達の車を押しつけて、よい場所に車を止めようとしたが、たゞ一つ何うしても動かうとしない車がある。葵上の供人達がよく見ると、それは御息所の車らしいので、かねがね、源氏君との御仲を知つ

てゐた供人達は、御息所の車を散々に破り散らして、押しつけてしまった。

やがて葵祭の當日となつた。前日の騒動に懲りて、今度は葵上は見物に出なかつた。源氏君は紫上と車に同乗して出かけると、立派な女車から、源氏君に歌を贈つたものがある。見ると、はかなしや人の挿せるあふひゆゑ神の驗の今日を待ちける

(葵を逢ふ日に云ひかけた。既に他の人のものとなつて居られるあなたでありましたのに、私はそれとも知らず、賀茂の神様の靈験で、あなたに逢へる事と思つて、今日を待つて居りましたが、つまらない事でした。源氏君が紫上と同車して居るのを妬んだ歌。)

と書いてあつた。それはまがふ方なくかの源典侍の手蹟である。源氏は面憎く思つて、かさしける心ぞあだに思ほゆる八十氏人になべてあふひを

(あなたは誰でも相手選ばずに男と逢ふ人ですから、葵を頭に挿して男戀しさうな顔をして居るあなたの心こそ、少しも頼もしくありません。)
と云つてやつた。

その後、源氏君は車争ひの話聞いて、御息所を氣の毒に思ひ、見舞ひに出かけたが、御息

所は憤恨遣る方なく、源氏君に對しても一向打ち解けなかつた。そして御息所の夢の中には、その怨めしい心が浮かれ出て、葵上につかみかゝると見えた事もあつた。

葵上は懐胎して、つはりの病が段々重くなつたので、祈禱させると、種々の生靈死靈が現れたが、その中に一つ何うしても退かない物怪がある。尊い修験者達の禱りに調伏せられて、その語る所をきけば、かの六條御息所の生靈なので、源氏君はたゞ呆れるばかりであつた。御息所も、自分の着物に護摩の香が染みかへり、幾ら着物を着代へても取れないので、自分の魂がかなたに通ふ事を覺つて、嘆かはしく思つてゐるのであつた。その中葵上は男の子を安産したので、お附の人々は安心して油断した。丁度秋の除目の行はれる日で、左大臣始め子息達も官中に出仕してゐた、その留守中に、又彼の生靈がついて、遂に葵上をとり殺してしまつた。あまり突然の事なので、人々も驚いて、若しや蘇生するかと思つて、二三日そのままにしておいたが、全く死相が現れて來たので、今は限りと、八月廿餘日の曉に、葬儀を行つて、鳥邊野になきがらを埋めた。源氏君も愛しなかつた夫人ではあるが、さすがに、あはれに思ひ、また御息所をうとましくも思つて、生靈の事をそれとなく御息所に書いてやると、御息所でも身に覺

えのある事なので、我ながら浅ましいとは思ひつゝも、自ら制する事の出来なかつたのを情なく思つた。

葵上の四十九日も終つたので、此の日まで此の邸に留まつてゐた源氏君は、若君を残しておいて、二條院へ歸る事になつたが、左大臣を始め、女房達は、此の後源氏君が此の家に来る事も多くあるまいと思つて、別れを惜しんで泣いた。

二條院では、久しぶりに紫上に逢ふと、大變大人らしく美しくなつてゐるので、源氏君は耐へ難くなつて、遂に紫上と新枕をかはした。その朝、いつになく、紫上は蒲團に顔を埋めたまま、起きもやらず、源氏君がほゝ笑みながら、三日の餅(二八)の用意をそれとなく惟光に誂へたので、はじめて、その事が人々にわかつた。かくて源氏君は、その後は、一夜を隔てる事も出来難いほどまでに、紫上が戀しく思はれ、内々紫上の御装束の準備をして、その式が済んだ後に、紫上の事をその父宮に告げ知らせようと思つてゐた。

翌年の正月には、源氏君は久しぶりに左大臣の所を訪れて、大宮にあひ、思ひ出話をしたりした。

○

此の卷に至つて、御息所と葵上がはつきりと出てゐる。御息所は嫉妬深い我執の強い強情な人である。葵上は前の卷にも度々出てゐたが、餘り身を持つ事が重々し過ぎて、愛嬌のない取り澄ました人である。若紫の卷にも繪に書いた女のやうなと出てゐた。人のする通りに動いて、自らは一動も苟くもせず端然と座してゐるといふふうである。そこが源氏君の氣に入らなかつた所らしい。源氏君を取り巻く二人の女性の葛藤を描いて、此の三角關係は遂に葵上の死に終つてゐる。女の執念の恐ろしさを作者はまさ／＼と描き出した。葵上も御息所もその性格がはつきりと出てゐる。此の物語に出て来る他の多くの女性とまぎれるべくもない。然もその性格は必ずしも特異なものではない。普通の人間の中に求められるものである。此所にも作者の意圖の成功してゐる事を見る。但し、生靈がとりついて殺すとか、御息所の夢に、自分が葵上に飛びかゝつて行くのを見た、目が覺めると身體に護摩の香がついてゐたとか書いてある當りは、聊か不自然の嫌ひがあるが、これは當時の人のかたく信じてゐた所なので、此の卷に記されてゐる程度くらゐまでは、當時の人々は、不自然の感を起さずに、寧ろ恐ろしさに襲は

れながらも、強い興味をひかれて讀んだ事であらう。今の我々もさほど不自然を感じないが、なほ夕顔の死に於けるやうな自然さは感じさせてくれない。夕顔の卷の方が、全卷の氣分が統一して、すつと優れてゐるやうに思ふ。葵上の死は、現代的に解釋すれば、産後の肥立が悪くて死んだとも言はれようが、作者は、無論そんな事を考へて書いたわけではない。

卷中の車争ひの一段は最も有名であるが、落窪物語の終の方にも車争ひの所が描かれてゐるので、作者はそれから暗示を得たものかも知れない。

前の卷まで華やかな生活を續けて來た源氏君は、こゝで一抔の黒雲に逢ふ。父桐壺帝の御退位、葵上の死、長い間の馴染なる御息所の伊勢行き、女の浅ましい葛藤、葵上の代りに紫上を得て源氏君の心は樂しかつたが、此の卷には、何か凄まじい暴風雨を豫感させる暗い陰が現れてゐる。これから源氏君は失意の境涯へ段々沈んで行くのである。

(一) 後に秋、好中宮といふ。

(二) 伊勢大神宮の齋主。帝が代られる度に齋宮も代つた。未婚の女宮が参る事になつてゐる。

(三) 此の卷で源氏君は中將から大將に昇進してゐる。多分前卷と此の卷との間にプラントとなつてゐる一ヶ年餘の間に昇進したのであらう。

(四) 源氏君廿二歳、御息所廿九歳。

(五) 加茂神社の齋主。御代毎に代る事伊勢齋宮と同じ。

(六) 加茂神社の祭禮。四月の中の酉の日に行はれた。此の日祭の儀式に参列する人は皆葵堂を衣冠につけたので葵祭と呼ばれた。

(七) 葵祭の行はれる前に齋院は鴨河の河原に出て身を潔める儀式を行ふ。その途中に華やかな行列を作つて練り歩くのである。

(八) 源氏君の正妻。此の卷に主として出てゐるのでかく呼ぶ。實名ではない。

(九) 此の一段は「車争ひ」と云つて物語中でも特に有名な所。

(一〇) 此の日祭見物に行つて頭に葵堂をつけてゐるとその戀がかなつて思ふ人に逢ふといふ俗信があつた。故にこの句は葵を挿して既にその戀の成就してゐる事を意味してゐるのである。

(一一) 此の歌と次の歌の葵といふ句によつて此の卷の名が出た。

(一二) 是を「挿頭(カザシ)争ひ」と作者が云つてゐる。それで此の段を一般にもしか稱してゐる。

(一三) 生霊死霊等の馮き物の事。

(一四)祈禱者が傍らの寄呪(ヨリマシ)といつて病人に馮いてゐる靈を受ける者に靈を移して、その寄呪の口から種々の不平等等を語らせるのである。

(一五)祈禱の時に焚く火。御息所の靈が葵上に馮いてゐるので、祈禱の際に焚く護摩の香が移つて、その香が御息所の着物に染む込むのである。

(一六)後に夕霧といふ。

(一七)此の當時墓地となつてゐた。徳川時代もやはりさうであつた。

(一八)當時の結婚の儀式は男女婚姻の當夜と翌夜との兩日は何の式もせず、三日に餅を食つて祝ふ。餅は大抵三切づゝを盛つて男女ともに食す。これを三日の餅といふ。

第二期 青年期——失意の生活

十 榊

(廿三歳の九月より廿五歳の夏迄の事)

一名 秋が浦島

六條御息所は、いよ／＼齋宮とともに伊勢へ行く事になつたので、葵上の事で御息所を疎ましく思つてゐた源氏君も、今更名残が惜しまれて、九月七日の夕暮に、その居所なる野宮を訪れた。併し御息所はなほ心が打ち解けずして、源氏君に會はうともせず、源氏君が折り取つて贈つてくれた榊の枝を見て、

神垣はしるしの杉もなきものを如何にまがへて折れる榊ぞ

(私はべつにあなたにお出で下さいとも申し上げませんが、何を間違へてお出でなすつたのですか。神垣とは野宮の事。しるしの杉は人の訪れて来る目標となる杉の木。こゝで

は本歌の訪らひ來ませの意を取る。歌の表面の意味は櫛を杉と間違へて折つた由につくつた。

と素氣ない挨拶をしたくらゐであつた。

此の御息所は、十六の年に前坊の御所に参り、二十の時、夫君に死別して、今年は三十になられる。その御娘の齋宮は十四の女盛りで、大變美しい方であつた。此の二人の母子も、九月十六日に、桂川で御禊を行ひ、宮中に参内して別れの御櫛を賜はり、遂にその夕方、都を出でて、伊勢へ行つてしまはれた。

十月になると、太上天皇なる桐壺帝の御病氣が重つて、十一月に崩御せられた。御臨終の際に、東宮の御事、殊にくれぐれも源氏君の身の上を頼むと、今の帝に言ひ遺されたのであつたが、源氏君の唯一の御保護者なる桐壺帝の崩後、世間の様子は一變した。帝の御外戚なる右大臣が太政大臣に任ぜられ、政權を掌握するに至つて、偏狹にして底意地の悪い、帝の御母弘徽殿女御が、今まで憎んでゐた藤壺、及び桐壺更衣の子なる源氏君に對して、如何なる態度に出るかは明かである。

故帝の御四十九日も過ぎて、十二月の二十六日には、女御達は皆暇を賜はつて散り／＼に歸つて行つた。藤壺もお里の三條宮へ引き取つた。今まで車馬絡繹として、訪問客の絶えなかつた源氏君の邸宅は、人影も稀にして急に寂しくなつた。

翌年の正月除目の日にも、誰も源氏邸を訪れる者はなかつた。二月には、臘月夜は尙侍となつて、弘徽殿に住まひ、華やかな生活をしてゐた。

その頃、賀茂の齋院は、桐壺帝の崩御によつて、代つて、權の姫君が齋院となつたので、此の姫君に心をよせてゐた源氏君は甚だ失望した。右大臣とは政敵にあたる左大臣も亦宮中に出仕せずして、引籠つて居るやうになつた。

かやうに源氏君は、世に入れられずして、失意の境遇に陥つたにも關はらず、源氏君の藤壺に對する戀はやまなかつた。そして、何ういふ機會でか、今は三條宮に住んで居られる藤壺の寢所近く忍び込んで、かき口説いた事があつたが、藤壺は驚きの餘り逆上したので、女房達が皆目を醒してうろたへる騒ぎに、源氏君も驚いて塗籠の中に逃げこみ、結局思を遂げずして歸つた。

此のやうな事のおつた後、藤壺はいよ／＼世の中が味氣なく思はれて、出家しようといふ意を固めた。源氏君の心も寂しかった。秋の野も見がてら、雲林院に詣つて、母桐壺更衣の爲めに、法文を讀誦させたり、たまに宮中に参つた時には、弘徽殿女御方の人々に悪口を言はれて、何も言ひ返す事が出来ずに、悄然と歸つて来るやうな事もあつた。

十一月の朔日頃、桐壺帝の御國忌の後に、十二月十日過ぎ、藤壺は、先帝の御爲めに法華八講を行ひ、その日に髪を下して、尼になつてしまつた。やがて年があけて正月となつたが、源氏君や藤壺には春は來なかつた。源氏君は藤壺の所に参つて、その變りはたお姿を眺めては、ほろ／＼と泣かれるのであつた。さうして、悲歎の涙にけれながら、次のやうな歌を、藤壺に申し上げた。

長布刈る海人の住處と見るからに先づ鹽垂るる松が浦島

(長布は、長い海藻の意で、鹽垂るも、松が浦島も、すべて海人の縁語。松が浦島は陸奥にある歌枕で、松島の事。海人に尼を云ひ懸けた。此の御邸も今は尼となられた藤壺の御住居かと思ふにつけても、私は涙に袖が濡れます。)

除目の頃となつても、藤壺や東宮一派の人々には官位をも賜はらず、左大臣は致仕の表を奉つて、此の方々には、まるで凋落の秋が來たやうであつた。

夏となつた。雨が降り續いて退屈な日、源氏君の所に三位中將、以前の——頭中將——が遊びに來たので、人々を呼び集め、互ひに詩集を出して、韻塞ぎの勝負を争つた。その結果、三位中將の方が負けたので、二日許りして、負けわざを行ひ、種々の御馳走があつて、中將の御子の、年八九歳の可愛い子が、催馬樂の「高砂」を歌つて興を添へ、はては酒宴に亂れて、一日を過したやうな事もあつた。

かの臘月夜の内侍は、宮中に参つて多くの女房にかしづかれて、花やかな生活をしながらも、源氏君の事が忘れられずに、二人はひそかに逢ふ瀬を重ねてゐたが、丁度その頃瘧病の爲め、お里の太政大臣邸に歸つてゐたので、それをさいはひとして、源氏君は毎夜のやうに忍んで行つた。

或る朝、夕立が降り出して雷が激しくなつたので、人々が皆起きて來て、源氏君は歸る事が出来なくなつた。父大臣が娘のお部屋に行つて見ると、御帳の中に怪しい男が居るので、よく

見ると、それはまぎれもなく源氏君である。大臣は大いに驚いて、此の事を弘徽殿女御に話して、善後策を講じたが、弘徽殿女御は、左大臣の姫君なる葵上を自分のお生み申し上げた今の帝、その頃の東宮にと希望してゐたのに、それは源氏君に取られてしまひ、今また、帝にと志した隼月夜の内侍が、源氏君に犯されたと知つて、激怒のあまり、これをよい機会として、かね／＼心よく思つてゐなかつた源氏君を陥れてやらうと、種々考へを廻らすのであつた。

○

源氏君の華やかな生活は葵の巻で終つた。既にひろがらうとしてゐた暗い影が、こゝに於いて源氏君の身の上を蔽ひ包む事となつた。前巻の葵上の死に續いて、源氏君はその御父君を失つたのである。源氏君が心をかけてゐた藤壺は出家して、その思を遂げようといふ願は永久に絶望となつたのである。さうして、源氏君を憎んでゐた右大臣一派が、政權を手中に占めるやうになつたのである。源氏君が事毎に志と違ひ、種々の迫害にあふ失意の生活が、此の一卷の中に描き出されてゐる。思ふに、作者は、源氏君を今までの華やかな生活から一度此の不幸の生涯に陥れ、更にそれから引き上げて、此の惨憺たる時代に對照する事によつて、その後代の

榮光に輝く榮華の生活を、一層光輝あらしめようとしたのである。作者は最初から此の意圖を抱いて、此の物語を書き續けて來たのである。此の構想を何處から得たか知らないが、確かにそれは成功してゐる。源氏君の生涯に波瀾あらしめ、讀者の情趣を咬る此の巻以下の數巻は、源氏物語全篇のやまとなつてゐる。

此の巻に出て來る主なる女性が三人ある。その中、御息所は伊勢へ下る事によつて、藤壺は出家する事によつて、各々その落ちつき場所を示して一段落となる。さうして、隼月夜の内侍に至つては、源氏君が後に左遷せられる直接の原因を説く爲めに出されてゐるのであつて、巻の最後の方に僅かに付け加へられたもの、即ち源氏君の流謫時代の緒口をこゝに開いて居るのである。さうして、流謫時代の源氏君の暗い生活に一道の光彩を添へるものは、明石上とのロマンスである。此の明石上はやがて物語全篇の主要人物の一人となる。源氏君の左遷はまた、此の佳人と出會させる爲めの、作者が操つた糸に過ぎぬとも解釋せられる。

思ふに、櫛の巻は源氏君の闇黒時代の最初に來るものであり、その中には、桐壺帝、六條御息所、藤壺等、重要人物の結末を告げるとともに、次の流謫時代の緒口を開いて居るのであ

る。此の後の部分は直ちに須磨及び明石の巻へ続く。さうして、此の流謫時代の女主人公の位置に立つものは、即ち明石上といふ一の佳人である。これによつて思へば、櫛の巻は亦明石上といふ女主人公を點出し來たる爲めに、その緒口を開いたとも言はれるのであつて、櫛の巻の最後の部分、及び須磨明石の兩巻を通じて、作者は明石上なる一の典型的佳人を出して、これを描かんとしてゐるのだと、女性の側から言へば、解釋する事も出来るのである。

なほ一言付け加へておきたいのは、此の巻には種々なる女性が登場したに關はらず、前巻に於いて婚儀をあげた、源氏物語全篇の女主人公紫上の事が、僅かに四五行しか出てゐないのは何故であらうか。作者は、源氏君の悲惨な境遇を描く餘りに、わざと此の樂しがるべき新婚の婦人を詳しくは描かなかつたのであらうか、不審である。

また、右大臣は左大臣に比して、輕卒な態度の早口の人だと記されてゐるのは、今も昔も、惡玉の型は、善玉に對して、その性格に一の軌範が設けられてゐるやうである。此の人物は少し流俗小説の型に墮してゐる。

(一) 齋宮が伊勢へ下る前約一年間お籠りして身を淨める所。毎回占トによつてその場所を定めて新築する。

(二) 「わが庵は三輪の山本戀しくば訪らひ來ませ杉立てる門」(古今集)。此の歌を本歌として作る。

(三) 卷名の出所。櫛は又賢木とも書く。

(四) 御禊を行つた後宮中に參り、帝御自ら宮の中より櫛を出して齋宮の額にさし京へ歸り給ふなど宜ふ。此の櫛を別の御櫛と云ひ、特に作物所つくもところで作らせた黄楊製長さ二寸くらゐのものといふ。かくて盛んな行列を作つて都を出發する。これを齋宮群行といふ。

(五) 表面桐壺帝の御子。實は源氏君と藤壺との間の御子。冷泉院の立場の事は本文に見えないが、花宴の巻と葵の巻との間の事であらう。

(六) 朱雀院と申す。

(七) 任官の儀式。春秋二度行はれる。春行はれるのは地方官を新しく任ずるのである。正月十一日より十三日まで行はれた。縣召(アガタメシ)とも春の除目ともいふ。此の時人々は希望の國國を書いた申文(マウシブミ)を有力者の手元に提出して就職運動をするのである。

(八) 内侍は天皇に供奉して奏請宣傳禁中の儀式を司る。臘月夜はその職掌の尙侍(ナイシノカミ)に任せられたのであるが、又帝の御寢にも侍した。

(九) 四方を壁で圍んで倉庫のやうに使ふ室。

(一〇) 京都の市外愛宕野に。紫野の西、船岡の東。もと淳和天皇の離宮で元慶八年僧正遍照が奏して寺となし元慶寺の別院とした。後荒廢す。當時は有名な寺。大鏡の發端も此の寺である。

(一一) 帝后等崩御の後一周年の忌日を申す。

(一二) 法華經八卷を八人の僧をして八座に分つて讀誦講義せしめ以て佛法の供養とする式。一日に二座即ち二卷づつ講じて四日を以つて終るのが普通である。

(一三) 卷の一名の出所。此の一名は、源氏秘義抄にも出てゐて、室町時代以前より行はれた名である。

(一四) 辭表。

(一五) 此の當時、偏續ぎなどとともに最も盛に行はれた遊戯。詩の韻字を隠して云ひ當てさせ多く當てた人を勝とする。韻塞みんみだきのついでに、偏續へんつづ(偏突へんつぎとも書く)の説明をする。これは、木偏とか人偏とかいふやうに偏つくりや冠かん、また時として旁つくりを題に出して、その偏つくりや冠かんまたは旁つくりを有する文字を最も多く案じ得た人が勝者となる遊戯である。碁だまと彈碁だまも此の物語の中に見える。碁だまは説明するまでもない。彈碁だまの方法は今日明かでないが、彈碁だまといふ盤があつて、その上で碁石などを弾き合ふやうな遊戯であつたのであらう。

(一六) 勝負に負けた人が勝つた人を自邸に招待して饗應する事。賭弓(ノリユミ)その他の賭勝負に

必ず行はれた。

(一七) 後に紅梅大納言として出てくる。母は四の君。

(一八) 當時の貴族間に行はれた歌謠。種々なる謠がある。その多くは民間の俗謠から出たものと思はれる。

(一九) 帳臺ともいふ。臺の四方に帳を張つたもの。貴族の婦人の寢臺とした。

(二〇) 出家は神聖なものと信じられてゐたので、尼を犯すやうな事は到底出来なかつたのである。

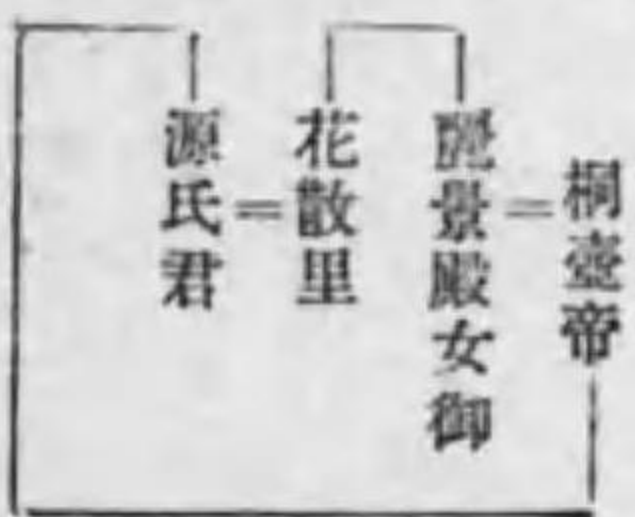
(二一) 河海抄以下諸抄には西宮左大臣高明が筑紫に左遷された事をモデルとしたと言ひ、湖月抄には在原行平の須磨謫居の事を思つたのだと言ひ、又藤原尹周が筑紫へ左遷された事を模したのだとも言はれて一定しない。思ふに源高明と尹周は筑紫へ流されたので源氏君の須磨流寓の事は縁が違ひ。行平の事は須磨の巻にも「行平の中納言の藻鹽垂れつつわびける家居近き邊なり」ともあつて最も信を措くに足るが、確かにそれと斷定する事は出来ない。

十一 花散里 (廿五歳五月の事)

五月廿日頃、源氏君は、物思はしい日が續くので、ふと麗景殿女御の妹なる三の君の事を思ひ出して、退屈さましに、その家を訪れて見ようと思つて、家を出かけた。三の君が嘗つて官中に仕へてゐた頃、源氏君とはかない假寝の夢を結んだ事もあつたのである。三の君は姉麗景殿女御とともに、源氏君から生活上の保護を受けて、佗しい生活をしてゐた。源氏君は途中で中川の邊に、一度泊つた事のある女(三)の家のあるのを思ひ出して、歌を贈つたり、また筑紫(三)の五節君にもよい所があつたと、懐かしく思つたりしながら、久しぶりに麗景殿女御の邸を訪れた。そして五月雨の空に郭公の鳴くのをきいて、麗景殿女御に次のやうな歌をさしあげた。

橋の香をなつかしみ郭公(三)花散里を尋ねてぞ訪ふ

(橋の香を慕つて、郭公はその花の散る里に尋ねて來るのですが、そのやうに、私も昔の



事が懐かしく思はれて、尋ねて参つたのです。

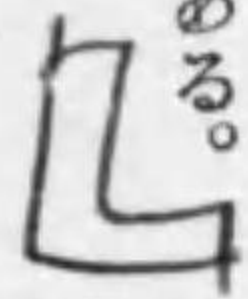
三の君も久しぶりに源氏君にあつて嬉しく思つた。

○

此の卷は源氏物語全篇の中、關屋の卷や篝火の卷と並んで最も短い卷である。櫛の卷の最後に於いて、作者は、今に如何なる凶運が源氏君の身を襲ふかと、讀者の心を咬るやうな言葉を以つて卷を終へたが、それから直ちに須磨の卷へは續かずに、此の短い卷を挿んで、源氏君が女の所へ通ふ一斷面を寫してゐる。凶運の豫想を興へて、直ちにその凶運を實現させるのは、却つて讀者の興味をつなぐ所ではない。作者が此の短い卷を挿んで、源氏君が嘗つて關係した女、中川の邊の某女、五節君、花散里、と今まで現れなかつた種々の女の名を出して、その間に凶運とは全く關係のない、寂しい併ししみくとして落付いた、源氏君の生活の斷面を描き出したのは、全く賢い書き方である。暗い緊張した氣持の中に、一寸のどかな平和な情景を挿んで讀者の心を弛める。しかもそれは長くてはいけない。だれてしまふ。緊張した氣持を失はせない程度に短くなければならない。此の意味で、此の卷は甚だ面白い卷であるといふ事が

出来る。短くはあるが、決して無意味な無効果な巻ではない。

此の巻に於いて、作者は又一人の重要な新しい女性を點出した。花散里がそれである。落ちついた物靜かな人を信ずる事の厚い温和な婦人である。輕佻な隴月夜とは反對の性格を持つ。此の物語中の一つの特徴ある性格をもつて、他の婦人とはまぎれる所のない、一の地位を占めるべき女性である。



(一) 此の女は此の巻に現れるだけで素性は分らぬ。

(二) 此の物語に五節君といふ女は數人現はれるが、此處の女は筑紫に居る太宰大貳の娘である。須磨の巻に出て来る。何れも五節の舞姫になつた事から名付けられた名である。

(三) 此の歌によつて巻の名が出で、三の君をも亦花散里と呼ぶ。實名ではない。

十二 須

唐

(廿六歳の三月より廿七歳の三月迄の事)

世状は益々源氏君の身に取つて不利となり、源氏君を遠國へ移すやうな形勢にもなつたので、流刑に處せられるよりは、寧ろ自ら身を引くにしかずと思ひ、終に須磨に流寓しようと思つた。紫上と別れるのはつらかつたが、もとより同行の出来る事ではないので、女を伴はずに出かけようと思つて、源氏君は、久々に左大臣を訪問して此の決心を語り、葵上の忘れ形見なる夕霧の事をくれぐれも頼んだ。その晩は、故葵上の女房で、源氏君の寵愛してゐた中納言の君と語り明かして歸つた。翌日は、紫上とも別れを惜しみ、紫上は、父の兵部卿官が世間體を憚かつて、自分達にうとくしい事を歎き悲しんでゐた。更に、花散里の所を訪れ、隴月夜の内侍にも手紙をやつた。又出發の前日には、藤壺にも別れを告げ、父桐壺帝の山陵に詣でては、夜一夜その前に額づいて、自らの苦境を訴へ、遂に別れ難い情を抑へて、紫上を都へ残し、三月廿日過ぎに、ただ一人、良清惟光等若干の腹心の家來を連れて、須磨へ出發

したのである。

今までとは違つて、むさくろしい家に、淋しい生活をしなければならなくなつた源氏君は、ただ都の事が戀しく思はれて、都からの便りのみが待たれた。紫上からはいふまでもなく、藤壺、朧月夜の内侍、花散里、伊勢なる御息所からさへも慰問の手紙が來た。源氏君はその手紙を読み、又返事を書く事だけを慰めとして、はかない月日が過ぎて行つた。藤壺には、五月雨の頃に次のやうな手紙を贈つた。

松島の海人の苦屋も如何ならむ須磨の浦人鹽垂るる頃

(海人に尼を懸けて藤壺を譬へた。須磨の浦人は自分の事。鹽垂るるは須磨の浦の縁語で涙に濡れる事。この須磨の浦に流寓してゐる私の袖を濡らす五月雨の頃には、あなたも同様に泣いていらつしやる事でせう。)

また、朧月夜の尙侍には、

懲りずまの浦の海松布もゆかしきを鹽焼く海人やいかゞ思はむ

(須磨の浦で取れる海藻の海松布を見る目に云ひかけ、鹽焼く海人に朧月夜の内侍を譬へ

た。私は今度の事にも懲りずになほあなたに會ひたいと慕つて居りますが、あなたは何う思つて居られるでせうか。さぞ御心變りをなすつた事でせう。)

やがて都では、身の不始末が露はれて謹慎してゐた朧月夜の内侍は勘氣を許されて、七月には宮中へ参り、又帝のお傍近くに仕へる事となつた。帝は、先帝の源氏君の身の上をよろしく頼むと云ひ残された御遺言を重んじて、源氏君を許したくはお思ひになつたが、それも自分の心一つでは何うにもならない事だと、ひそかに御心を痛めて居られた。

その年の八月頃、筑紫なる大貳の任期が満ちて上京する際、その娘の五節君を連れて須磨の浦を過ぎたので、圖らずも源氏君は、昔馴染の五節君と歌を取り交したやうな事もあつた。

その頃、良清は、隣國の明石に居る前國守の娘に手紙を贈つたが、返事は貰へなかつた。併し、明石の入道は、源氏君の流謫の噂を聞いて、源氏君は自分の叔父なる按察大納言の娘君の桐壺更衣が生んだ御子であり、自分とは親戚の間がらで都合もよいから、娘の婿に此の人を取りたいものだと思つてゐたが、娘の母君は、その考へに同意しなかつた。娘も、源氏君のやう

な高貴の人は、自分のやうな賤しい者を何とも思つてはくれまいから、父母に死に別れたら、尼になるか海の底にでも飛び込んでしまはうと思つてゐた。併し父の入道は、此の娘を出世させようと思つて、年に二度住吉へ詣らせて、その御加護を祈つてゐた。

かくて年もあけて、翌年の二月には、亡き墓上の兄三位中將——今は宰相中將になつた——が、はるく都からやつて来て、源氏君の心を慰めてくれた。

その年三月上旬巳の日に、源氏君は開運の祓をする爲め海岸へ出たが、儀式も未だ終らないうちに、俄然暴風雨が襲つて来て、源氏君達は辛うじて山際の屋敷へ逃げ歸る事が出来た。

源氏物語中でも、古來須磨と明石の兩卷は最も有名で、かの石山寺で、紫式部が月を見ながら初めて此の卷に染筆したといふ傳説までも生じた。此の傳説は無論信するに足りないが、如何にも情緒纏綿、憂愁裡にある源氏君及びその周囲の人々の暗い生活がしつとりと描き出されてゐる。描寫は詳しく、少しくどいと思はれる所さへあつて、終の方は稍々讀者を飽かしめる。此の單調にして、多少のだけ氣味さへ伴つてゐる最後に至つて、突如暴風雨を現出して、

緊張裡に卷を終へたのは、賢明な書き方である。

源氏君が須磨へ出發する以前、先帝の山陵に詣でて、幻にその御姿を見奉る一段は、かの上田秋成が雨月物語の、西行が白峯の陵に詣でる所と似た趣きがある。秋成の作の先蹤としては、撰集抄、保元物語、源平盛衰記、謡曲松山天狗等が認められるが、なほそのもとは、源氏物語の此の邊にも胚胎して居りはしないかと想像せられるのである。

此の卷には、須磨の海人等の賤しげな様子が描かれてゐるが、それは少しも、海人等の生活状態を眼に見える如く描寫したのではなく、他の物語小説等、例へば大和物語にも見える下層社會の人々の現れと、少しも變つてゐない。何の特色もなく、流俗的筆致に墮して、かの夕顔の卷のそれの如くでないのは、甚だ物足りない。

此の須磨の卷は古來有名で、須磨源氏、或は須磨明石源氏などと云はれて、此所までを讀めば、此の物語全體に通曉したやうな顔が出来たものであるが、勿論それは生半可な事で、源氏物語の眞の發展はこれ以下にあり、源氏物語の眞實の價値や意味も、これ以下にあるのである。又、此の須磨の卷は、一般にしんみりとした情調の漂つてゐる佳篇と云はれてゐるが、單調

で同様の事が(例へば手紙の事などが)重複して、あまりすぐれた巻であるとは思はれない。

なほ、若紫の巻で良清の話した明石の姫君の事が、此の巻では發展して、やがて次の巻にその明瞭な姿を見せる事になる。さうして、此所で、明石入道が住吉の神に祈願してゐる事が出てゐるが、それが、次の巻の住吉の神の靈夢の事や、落標の巻の明石入道の住吉詣の事に照應してゐるのであつて、これらは、物語の發展に脈絡を失はないやうに、關係の巧みな連帶を保たしめる、作者の一つの技巧である。江戸時代の讀本などでも、かうした技巧は見られるが、讀本などにおける如く、手のこんだあくどい執拗さがなく、その程度が、丁度適度な小説的構成となつてゐる。

(一) 此の歌や次の歌、なほその他にも三首須磨を詠み込んだ歌があり、又源氏君須磨流寓の事を主として書いたから、巻名を須磨と名付けた。

(二) 此の日に祓の儀式をするのは當時の習慣であつて、後世の雛の節句とて雛祭をするのも此の祓の日に人形に人間の穢を負はせて海へ流した行事が起原となつてゐる。こゝは次巻によつて察

すると三月十二日である。

(三) 河海抄に始めて出づ。後此の傳説によつて石山寺に色々な遺物までも作られたが無論信ずるに足りない。

(四) 雨月物語の先蹤に關する詳しい研究は鈴木敏也氏の雨月物語評釋の解説の中に出てる。

十三 明

石

(廿七歳の三月より廿八歳の八月迄の事)

一名 浦 傳

風雨はなほやまずに數日が過ぎた。頭を差し出す事も出来ないやうな暴風雨の中を、都の二條院からは、紫上の見舞の手紙を持つて、使がびしよ濡れになつて來た。その翌日は一層物凄く荒れやうで、小山のやうな浪が、陸地を一呑みにするやうな勢ひで押し寄せる。遂には源氏君の佗住居にも落雷して廊下が焼失するに至つた。その騒ぎに身心疲勞して、源氏君はうとうととうたゝ寝してゐる夢の中に、なき父帝の御姿が現れて、住吉の神の導きに從つて此の浦を去れと告げ給うた。その夜明け方、小さな船が須磨の海岸について、二三人の人が源氏君の屋敷にやつて來た。様子をきくと、此の一行は播磨(まろ)の前の守で、今は入道して、明石の浦に廣壯な邸宅を構へてゐる人と、その家來達である。明石入道は、かねく信心してゐた住吉の神のお示しに從つて、此の浦へ源氏君を迎へに來たのだと語つた。源氏君もかの夢中のお告に符合

する事なので、疑はず、遂に入道とともに明石の浦へ移つた。

明石の新居は今までの佗住居とは違つて、人々も澤山ゐて、甚だ華やかに、庭の様子、家の構へなど、都の邸宅にも劣らぬ立派さである。それに、明石入道が心をこめて歡待するので、源氏君の心も漸く落ち付いた。それとともに、また都の人々、殊に紫上の事が思ひ出されて、遙(はるか)にも思ひやるかな知らざりし海より遠(とほ)に浦傳(うら)ひして

○(知らぬ田舎の須磨の浦から、更に遠くの明石の浦に漂浪して來て、都のあなたの事が遙かに思ひ出されるのです。)

と手紙に書いてやつた。

明石入道が源氏君を迎へたのは、ただ一人の娘を貴顯のお傍に差し上げたいといふかねての希望通りに、源氏君を娘の婿に取りたいと考へたからである。四月になつて、或る日の夕方、入道は此の宿願を源氏君に打ち明けて、

獨り寝は君も知りぬやつれくと思ひあかしの浦淋しさを

(思ひ明かすに明石をかけ、明石の浦を心に云ひかけた 私の娘がたつた獨りで、つくづ

くと物を思ひつゝ一夜を明かす心の淋しさを、あなたも此の浦に来て獨り寝の淋しさを味はつて、よく御察しがお出来になる事と思ひます。」

と申し上げたので、源氏君もその熱心に動かされて、娘に逢ふ事を承諾した。併し、娘は父の勧めにも、源氏君の切なる手紙にも動かされずして、自ら持する事高く、

「いと口惜しき際の田舎人こそ、かりに下れる人の、打ち解け事につきて、さやうに軽らかに語らふわざもすれ。人数にも思されざらむもの故、我はいみじき物思ひをや添へむ。」(甚だ賤しい身分の田舎女ならば、一寸の間都から下つて来てゐる人の、かき口説くのに従つて、そのやうに軽々しく関係を結ぶ事もするであらう。そして、男からは女の數の中にも思はれないので、結局自分には心配を増す事になるであらう。)

自分はそのやうな一時の慰み物になるのは嫌だと思つて、父や源氏君の言にも従はないのであつたが、遂に源氏君自ら、八月の十三日、月華やかに照り渡つてゐる晩に、娘の住む岡邊の家を訪れて、こゝに慰勸を通じる事になつた。そして、その頃の生活を毎日繪日記に書き記しておいた。

その頃、都では、種々の怖ろしい事が起つた。かの暴風雨のあつた三月十三日の夜、帝の御夢の中に、先帝桐壺帝が現れ給うて、帝を恐ろしい御目で睨まれたと御覽になつたが、その後、帝は眼病をお患ひになつて、眼がお見えにならなくなつた。太政大臣も薨去した。また弘徽殿女御も重い病氣にかゝつた。年があけて、翌年になると、帝の御病氣が重くなられたので、これも皆源氏君を苦しめた咎であらうと思ひになつて、帝は源氏君を許さうとせられたが、弘徽殿女御はなほそれに同意申し上げなかつた。その中、帝と弘徽殿女御の御病氣は益々重られるばかりなので、遂に帝は、御母弘徽殿女御の意に背かれて、その年の七月廿日過ぎに、源氏君の歸還を許す旨の宣旨を賜はつた。且つまた、帝は早く位を退きたくお思ひになつたが、帝の御子としては、右大臣の御女承香殿女御との間に二つになられる御子があるばかりで、それはあまりに幼いから、やはり我が御弟なる東宮に御位をお譲りするのが順序だと思はれ、併し東宮には別に有力な補佐役の人も居ないから、東宮と特に親密な關係にある源氏君を後見役とさせるのがよいとお考へになつたので、旁々源氏君の歸京をお許しになつたのであつたが、その時には、明石上は六月頃からすでに源氏君の胤を宿してゐたので、源氏君は別れ

難い心を抱きながらも、間もなく明石上を都に引き取る事を約して、三年振りに歸京した。それとともに、員外の權大納言に任ぜられて、八月十五夜の晩に、参内して、久々に帝及び東宮に拜謁した。帝は、何うか自分の過失を許して怨を抱いてくれるなど懇切に源氏君に謝された。また源氏君は、藤壺や、かの大貳の娘の五節君や、花散里の所にも手紙をやつた。

○

此の卷は直ちに須磨の卷に續いて、兩卷は一體となるべきである。さうして須磨の卷の陰鬱な暗い氣持に對して、此の卷には明るい華やかな氣持が漂つてゐる。同じ流謫時代と云つても、前卷までの陰鬱な氣分は一轉して、此所には甚だ艶かしい情趣さへ漂つてゐる。さうしてそれは、最後に至つて、源氏君の歸還となり、再び明るい世界へと立返るのである。須磨明石と一口に呼ばれても、その中に含まれてゐる氣分は、兩卷で全く違ふ。その氣分の對比といふ事が、更に一層各々の面白味を増して、これを固く結びつけてゐると思ふ。又、地名を以つて名付けられた此の兩卷の氣分の相違は、その土地の眺望の相違、少くとも時人の考へた土地の氣分の相違でもあつたらう。五十四帖中、地名を以つて卷の名が名付けられたのは、此の兩卷

より他にはない、此の意味に於いても、一體にして、且つ好箇の對照を有する卷といふ事が出来る。

此の兩卷を通じて、中心となるべき女性は明石上である。その意味から云へば、須磨の卷は明石の卷へ移る準備、明石上とのロマンスを描き出す爲めに、特に陰鬱な暗い前景をその前に添へたものとも云ふ事が出来る。明石上の事は、既に若紫の卷で噂話として出てゐた。此の何でもない噂話がやがて作の中心になるのは、此の作者の一の書き方である。

明石上は紫上とともに、此の物語の中の理想的女性となつてゐる。此の二人ともが、一は明石の片田舎に、一は北山の庵室で見出されて、何れも元は貴顯の出自であるが、その當時の境遇は寧ろ成り下つて、中流階級に屬する位置の人々であつたといふ事情は等しい。蓋し、かういふ人々の中に、理想的女性を見出す事が出来るといふのが作者の意見らしく、その意見が此の物語の中心であり、兩夜の品定の議論の結着點もこゝにあつて、而してその實例としての一人物がこゝに點出されてゐるのである。併し、明石上と紫上との間には性質に稍々相違がある。何れもよく氣がきいてしかも慎しみ深く、典型的女性である事は等しいが、明石上は、六

條御息所に似て、甚だ上品な氣高い女性である。しかも、御息所は嫉妬深く執念の強いのが缺點であつたが、明石上には無論さうした缺點は全くない。紫上は、明石上に比して、寧ろ愛嬌があり無邪氣で人懐っこく、近づき易い女性である。此の點に於いて、寂しい夕顔よりも華やかな朧月夜の内侍に似た所があるが、朧月夜の内侍はあまりに無邪氣すぎて、人のいひなりになる志操のないのが缺點であるが、紫上には無論さうした缺點はない。かくて、兩方面を代表する典型的女性として、此の二人があげられるが、その一人を此の卷に於いて始めて描き出した所に重要な意味がある。

その他五節君といふ女性も出て来て、賑かに且つ派手やかな情緒を添へるのに役立つのである。卷中に繪日記を書く事が一寸見えるが、これが後の繪合の卷の伏線となる。作者は簡単な一句をも無駄には使はない。

明石入道の性格もよく描き出されてゐる。頑固一徹な變人、併しどこか愛情深い所があつて、口で叱りながら心で泣くと言つたふうの、昔氣質かたぎの人間がよく出てゐる。江戸時代の戯曲には、よくかうした人物が登場するが、此の時代の作品としては珍らしい。娘の幸福の爲めに

は、あらゆる事を犠牲にして願みず、到頭娘の出世を見て、山奥に入り行方不明になつてしまふ。此の人物は、いかつくて、しかもどこか優しい所がある。私の心のひかれる人物の一人である。此の明石入道と後の玉鬘の卷に出て来る肥後の太夫監たひのけんとが、端役の男性の中でも、特異な、しかも個性のよく出てゐる、讀者の注意のひかれる人物である。

(一) 明石入道といふ。須磨の卷の終の所の明石入道の話によると、源氏君の母桐壺更衣は入道の叔父に當る按察大納言の御娘であるといふから、源氏君の母とは従兄弟に當る。従つて源氏君とも親類關係になる。

(二) 卷の一名の出所。從來此の名を拾芥抄の源氏目錄の記載によつて明石の卷の井の卷の名、即ち此の續きにもう一卷「浦傳の卷」といふ卷があつたのだと言はれてゐたのは誤りであると思ふ。それは、拾芥抄には一名の積りで小さく記したのを井の卷の名と見誤つたのであらう。

(三) 此の歌、その他に明石の浦を詠み込んだ歌が二首あり、又明石の土地が主となつてゐるので卷名が出た。

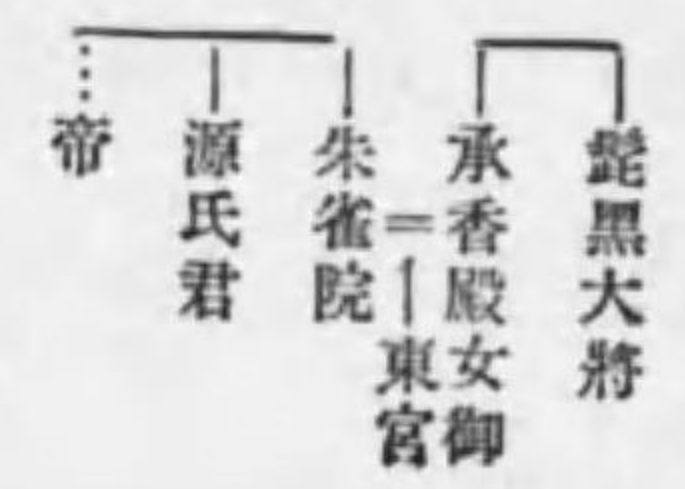
(四) 明石上と呼ぶ。實名でなくて此の物語を讀む上の便宜上の名なる事他の人物の名と同じ。

- (五) 須磨で源氏君の夢の中に桐壺帝が現はれ給うたのは十二日でその翌日。
- (六) 二條に邸宅があつたので二條太政大臣といふ。前右大臣。源氏君につらく當つたので悪大臣ともいふ。
- (七) 當時の現有大臣とは別人である前右大臣、系圖不明。その男子は髭黒といふ名で、後に出て来る。女子は即ち此の女御である。
- (八) 定員外。カズヨリホカといふ。既に定員に達してゐるのに臨時にその官に任ぜられる事。
- (九) 此所には太宰帥と記されてゐるが實際は大貳である。大貳の事をも俗には帥と稱した事もあるらしい。帥は實際は政務を取らず名ばかりで、大貳が政務の實權を取り行つたからである。
- (一〇) 源氏物語中の主要な女性には此の種の女が多い。空蟬、夕顔、玉鬘、花散里、浮舟等何れも出自はよいが、中流階級に成り下つた女ばかりである。
- (一一) 作者自ら此の巻の中に「伊勢の御息所にいとよう覺えたり」(覺えるは似るといふ意)と云つてゐる。

十四 澤 標

(廿八歳の十月より廿九歳の冬迄の事)

源氏君は歸京後、なき御父桐壺帝の御爲めに、十月に法華八講を行つた。帝は源氏君が歸京したので、退位しようとの御望みが切であらせられたが、遂に翌年二月、東宮が十一で元服あそばされたのを機會に、同じ月の廿日過ぎに、急に御位を譲られたので、御母の弘徽殿女御は甚だ驚かれたが、何とも致し方がなかつた。東宮には承香殿(二)ヒヤウキョウテンの御腹にお生れになつた皇子(三)が立たれた。同時に、源氏君は内大臣に、葵上の父なる致仕の左大臣は、年六十三にして太政大臣となり、その子息の宰相中將も權中納言に昇進した。かくて源氏君、左大臣、及びその派の人達には再び春が廻つて來た。流寓時代の源氏君に心を寄せてゐた人々は何れもその恩恵に浴した。すべてが源氏君の意のままになる時代となつたのである。また、源氏君は、二條院の東の院を、御父桐壺帝の御遺産として相続したので、これを立派に修繕させたりした。



三月朔日頃になると、明石上は丁度此の頃分娩する時期であると思つて、源氏君が使をやる
と、間もなく、歸つて来て、その月の十六日に女の子を安産したと報じた。それを聞くと、源
氏君はわざわざよい乳母を探して、明石へ遣はしたりして、いろ／＼と心配をしてゐた。紫上
はその様子をさとつて、少し怨むやうな氣色があるので、源氏君は此の機會に、今まで秘密に
してゐた明石上の事をすべて話した。五月五日には、今日が明石の姫君の五十日であるといふ
數へて、使をやつた。

その後源氏君は、のどかな日が續いた。五月雨の日に花散里の所を訪れたり、五節君の事を
思ひ出したりして、いつかは、想ひ通りの御殿を造つて、これらの女達を集めて見たいと思
つた。朧月夜の内侍の事さへ、懲りずに、また戀ひしく思ひ出された。

先帝朱雀院も、その頃はのどかな生活を送られ、藤壺は太上天皇に准へる位を賜はり、たゞ
弘徽殿大后のみが不平の日を過して居られた。紫上の父君なる兵部卿宮は、源氏君の流寓中、
世間の聞えを憚かつて、音信もしなかつたので、源氏君も兵部卿宮の心持をうとましく思ひ、
此の人の所だけには、情のない仕打の交る事もあつた。八月には、權中納言は、北方右大臣の

君のお腹に生れた姫君の、當年十二歳になる方を、かね／＼の希望通りに、女御として帝に奉
つた。

此の年の秋には、源氏君の歸京する事が出来たのも、全くかね／＼信仰してゐた住吉の神の
御加護であるといふので、陸路住吉神社にお禮詣りに出かけた。お供の人達も以前とは違つ
て、華やかに愉快さうな様子で、何れも一日の行樂を盡してゐる。折から明石入道は、娘と共
共、例年此の頃には住吉に詣でる事にしてゐるので、本年も船に乗つて出かけた。併し、源氏
君の、華やかな威勢を見ては、自らの賤しい身の上が卑下せられて、遂に住吉の濱にも上陸せ
ずして源氏君にも會はずに、そのまゝ船を引き返へして、難波の濱に泊つてゐる時、源氏君も
その事をきいて氣の毒に思ひ、一首の歌を書き認めて難波のほとりで、明石上にそれを贈つた。
みをつくし戀ふるしるしにこゝまでもめぐり逢ひける縁は深しな

(滯標とは、河海中の深き所に立てて船の通るべき道を示した棧である。難波の名物。そ
れを身を盡しに言ひかけた。身を盡して戀ひるかひあつて、此所で偶然廻り逢ふとは、さ
ても二人の間の縁は深いものである。)

源氏君は、都へ歸つてから、明石上の事が戀ひしく思はれ、是非都へ引き取らうと考へを廻らしてゐた。

帝が代られると、伊勢の齋宮も交代する例なので、六條御息所は姫君とともに上洛した。そして間もなく御息所は重病にかゝつて、尼になつてしまつたので、此の事を聞いた源氏君は、驚いて見舞つたが、既に重態に陥つてゐた御息所は、齋宮の身の上を源氏君に頼んで、七八日の後、遂に果敢なくあの世の人となつた。源氏君はその遺言のまゝに、齋宮を手元に引き取つて、女御にしようと思つてゐたが、此の事を聞かれた先の帝、朱雀院は、此の前、齋宮が母とともに伊勢へ下る時に、宮中に参内したので、その際、御手づから別れの御櫛を姫君の髪に挿して、告別の式を行はれたが、その時に、姫君の美しい容貌を御覽になつて、深く御心を懸けて居られたので、是非自分がその世話をしたいと希望あそばされた。併し、源氏君は、藤壺とも相談の上、齋宮をば帝にさし上げる事にきめて、いろ／＼とその準備に忙しかつた。

○

此の卷に於いて、源氏君は再び榮える事となつた。源氏君の暗黒時代は此所に過ぎ去つて、

榮華の生活が開かれる事となつた。源氏君は、住吉に参詣する事によつて、明石の流寓時代の大團圓を告げたのである。そして源氏君の運命は廻轉して、次卷以下の榮華時代となつた。此の卷は暗黒時代の終りである。

女性の側から云へば、明石上と源氏君とを、住吉に於いて他所よそながら會はせる事によつて、明石上に關する物語は此所に一段落を告げた。次卷以後の三卷には、明石上に關する事は全く出てゐない。暫く明石上は忘れられる事となつた。なほ六條御息所もなくなつて、此の女性も此所にその終を告げてゐる。朱雀院は退位せられて、幼帝が御位におつきになつた、時勢の廻轉は著しい。此の卷を一段落として、更に次卷より、新しい舞臺、新しい時代に移るのである。

(一) 朱雀院の女御。後に出て来る髭黒の大將の妹。

(二) 後に帝になられるので今上と申す。

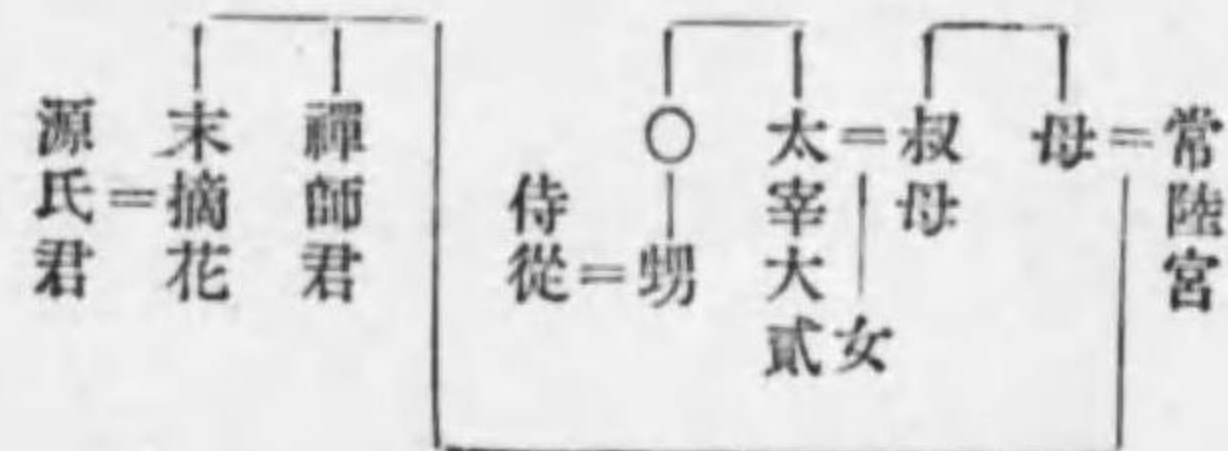
(三) 後に明石中宮といふ。

- (四) 赤兒の誕生後五十日には祝をする習慣(後註参照)。
- (五) 此の方は後宮の弘徽殿におかれたので弘徽殿女御といふ。繪合の巻に出て来る。桐壺帝の弘徽殿女御とは異なる。
- (六) 卷名の出所。

第三期 壯年期——榮華の生活

十五 蓬 生 (廿八歳の秋より廿九歳の四月迄の事)

源氏君が須磨へ流寓してゐる時、都には、悲歎の涙に暮れる人が多かつたが、常陸宮の姫君——末摘花もその一人であつた。源氏君の都に居る時はいろ／＼と生活上の世話をしてくれたが、須磨の方へ行つてからは、手紙一つもよこさずして、音信が全く絶えたのみならず、暮し向きも不如意となつて、貧苦はせまる、屋敷は荒れ果てる、誰も訪れる人はなくて、心細い生活を續けなければならなかつた。たゞ兄に當る禪師の君だけが、時々訪ねるばかりであつた。末摘花の母の妹に、今はおちぶれて受領(二)の奥方となつてゐる人がある。此の叔母の夫が今度太宰の大貳になつたので、任地へ赴任するについ



て、末摘花を自分の娘の召使ひにしようと思ひ、いろ／＼と勧めたが、末摘花は何うしてもきかないので、「お前がそんなに高慢な事を云つても、誰もお前なんか相手にする者はゐないよ。」などと憎まれ口を叩いたりした。實際その通りで、その頃源氏君は既に歸京してゐたが、末摘花の事は全く忘れ果てて、その脳中にはなかつた。そして十月に行はれる源氏君主催の法華八講の華やかな噂をきくにつけても、末摘花は淋しく悲しかつた。やがて此の叔母も九州へ下つて行つたが、それとともに、今まで末摘花のただ一人の頼もしい人であつた乳母子（こめのとこ）の侍従も、此の大貳の甥に當る人の妻となつて、共に九州へ行つてしまつた。かくて末摘花は一人取り残されて、一層寂しく心細くなつた。

翌年四月の或る日、源氏君はふと花散里の事を思ひ出して、そこを訪れようと思つて家を出かけた。途中源氏君には、確かに見覚えのある一軒の家が眼にとまつた。荒れ果ててはゐるが、それは常陸宮の邸に相違なかつた。さうして源氏君は末摘花の事を思ひ出した。それで從者の惟光に調べさせると、末摘花が叔母の勧めにも従はず貞節を守つてゐた事がわかつた。それを聞いて源氏君は

尋ねても我こそ訪はめ道もなく深き蓬（よもぎ）のもとを

此の破屋（やぶら）に住んでゐる末摘花の、昔に變らず自分を思つてゐたその心を、私は今これから尋ねて行つて慰めてやらう。

と思ひながら、末摘花に逢つて、その哀れな様子を見た時、そゞろに憐憫の情が催されたのであつた。かくて源氏君は、我が邸宅二條院（にじょういん）の東院に末摘花を移らせて、厚くその世話をしやつた。

○

此の卷から少女の卷までは、以前に點出した女性を更に引き出して來て、それ／＼の身の振り方をきめ、その落着き場所を示して、以つて一段落をつけようとするのである。葵上は既に死んでしまつた。六條御息所も死去したが、その子供の前齋宮の身の上は未だきまらない。夕顔の如く、一巻の中でその結末のついてゐるものは、勿論問題にはならない。かくて此の卷には末摘花を主として、その身の上の段落をつけた。

此の卷は前の末摘花の卷に連絡がある。併し前卷以下では單に滑稽な人物として、寧ろ作者

の筆は此の女性を幾分冷笑するやうな氣持で書いてゐたが、此の卷は反對に極めて寂しくしみりとした調子で書かれてゐる。それは鼻の先の赤い醜い氣のきかない滑稽な女性としてではなくて、心の優しい眞實な女性として描かれてゐる。しかも末摘花の物堅い落着いた、何處か昔風の人間らしい浮華な所のない風貌は、何れの卷にも變らずに描き出されてゐる。作者の書き方は違つても作中の女性の個性は變らない。そこに作者の手腕が見られる。殊に末摘花の卷の如きは、滑稽の中に或る寂しいしみくとした感じが漂つてゐて、此の相反した兩感情の對照が、實に快く出てゐたが、そのしみりとした情緒は此の卷にも續いて、末摘花を主とした此の二つの卷を奥底の深い感じのものとしてゐる。

醜い末摘花は初一念を持ち續けて、叔母の迫害にも屈せず、遂に幸福なる結末に終つてゐる。そこに作者の暖い同情に満ちた心持も窺はれる。召使の侍従が主人と別れる時に、貧しい暮しをしてゐる末摘花は、その多年の勞に報いたく思つたが、形身として贈るものが何んにもないので、自分の髪かみの脱毛ぬけを取り集めて、鬘かみづらに作つたのを贈つたりする場面は、讀者の涙をそそるものがある。

惣じて此の卷は、明治以後の家庭小説、新聞小説などに何度も描かれたのと同じ内容を持つてゐて、一寸陳腐の感じがするが、當時にあつては、すぐれた内容と描寫の仕方を持つものであると云つてよからう。

此の卷の最後は、末摘花が幸福になつて後、叔母が九州から上洛して、末摘花の様子を見て驚いた有様などを書きたいが、面倒くさいから又ついでがあつたら書かう、といふ意味の文章で終つてゐる。かやうな事を作者はよく書いてゐるが、その省略の場合は大抵效を奏してゐる。此所も叔母の豫期が外れての驚き、羨望などを書いては、餘りにハツピーエンドになりすぎて面白くなる。作者は、その書くべき事をほのめかして、面倒臭いからと云つて省略したのは賢明な仕方であるが、寧ろ此のやうな説明をも全く除いてしまつた方がより以上効果があるであらう。

(一) 地方長官をいふ。主として諸國の守であるが、時には權守や大介をも云ふ。

(二) 末摘花の乳母の子。

(三) 卷名の出所。

(四) 二條院の東院の完成は松風の巻に見えるから、これはそれよりも後の事をついでに此所に書き加へたのである。

(五) 入毛の事、かもじ。

(六) かやうな主観的な語で巻の終を結ぶのは此の作者の一つの書き方である。夕顔、末摘花、關屋等の巻々の結末の文章皆然りである。

十六 關 屋 (廿九歳九月の事)

かの空蟬の夫伊豫介は、桐壺帝崩御の翌年、常陸介となつて任國に下り、空蟬も東國で源氏君左遷の話を聞いて、ひそかに心を痛めてゐたが、今年夫の任期が満ちたので、上洛の途について、今日——九月晦日に、逢坂の關を越えようとする日、源氏君も亦石山寺に御禮参りの爲め、此の關にかゝつて、はからずも、兩方の一行が出會つた。關屋の蔭からさつと出外れた常陸介一行の旅姿が遠目には美しく見えた。源氏君はこれを空蟬と知つて、昔の事を思ひ出したので、空蟬の弟の、以前小君と云つた——今は右衛門佐となつてゐる——家來を使として、自分が未だ空蟬の事を忘れぬ心中をほめかしたので、空蟬も感慨無量であつた。

右衛門佐は、もと源氏君から寵愛せられてゐたに關はらず、源氏君が須磨に流寓した時には、源氏君を離れて、常陸へ行つたので、源氏君は不愉快に思つてゐたが、源氏君の歸京後は、やはり手元に召使つてゐて、源氏君が石山から歸京するのを迎へに來た。その右衛門佐に、源氏

君は手紙を持たせて、空蟬の所にやつて、しば／＼空蟬をかき口説いた事もあつた。

その中空蟬の夫は老病で死んで、息子達は繼母の世話もせず、たゞ河内守——先の紀伊守——だけは、下に好色の心を持つて云ひよつたが、空蟬は餘りの淺ましさに世をはかなんで、到頭尼になつてしまつた。

○

前の空蟬の卷に應じて、こゝに貞女空蟬の不幸な結末を描いてゐる。河内守は父の在世中から繼母に心を寄せてゐた。併し、源氏君にさへ従はなかつた空蟬は、何うしてさういふ醜行を許す事が出来ようか。未だ三十餘りの年頃で斷然出家してしまつたのは、如何にも空蟬らしい行爲である。源氏君はまた此の女をもそのまゝ知らぬ顔をしてゐる事は出来なかつたらしい。玉鬘の卷によると、空蟬の尼君は後に六條院の源氏君の所に引き取られて、此所で氣樂な餘生を送つたやうである。

なほ義子の繼母に對する戀は、源氏君の其とともに、此所にも出てゐるが、夫婦關係の亂れ、且つ早婚の風は行はれた當時にあつては、子供と後妻との年齢が殆ど同じであるといふ事は、しば／＼起つた現象と思はれるから、かういふ亂倫行爲が公然と行はれた事も、當時の世相としては、實際には多かつた事であらう。

なほ、此の所は、卷の順序に疑がある。「十六 關屋」と「十五 蓬生」とは、古い本には、前後が入れ代つて、「十五 關屋」「十六 蓬生」といふ順序になつてゐたものもあつたらしい。即ち、藤原定家の詠と云はれる源氏卷名和歌は、此の順序になつてをり、源氏秘義抄も亦、此の順序である。併し、これはどうしても誤りで、年代の順から云つても、明石の卷から續く書き出しの文章から云つても、今の流布本の通りの順序でなければならぬ。これは五十四帖が別々に綴じてあつたので、偶然に置き違へられて、かやうな順序になつたのであらう。

- (一) 地方官の任期は六年の事もあつて時々變改せられたが、此の當時は滿四年である。桐壺帝崩御の翌年は源氏君廿四歳の時で今年まで六ヶ年となるが、往復の旅等で歸京が遅れたのであらう。或は任期六年當時の事として此の物語を書いたのかも知れぬ。
- (二) 關所の番小屋。此の語が文中に使つてあるので卷名が出た。

十七 繪 合 (三十一歳春の事)

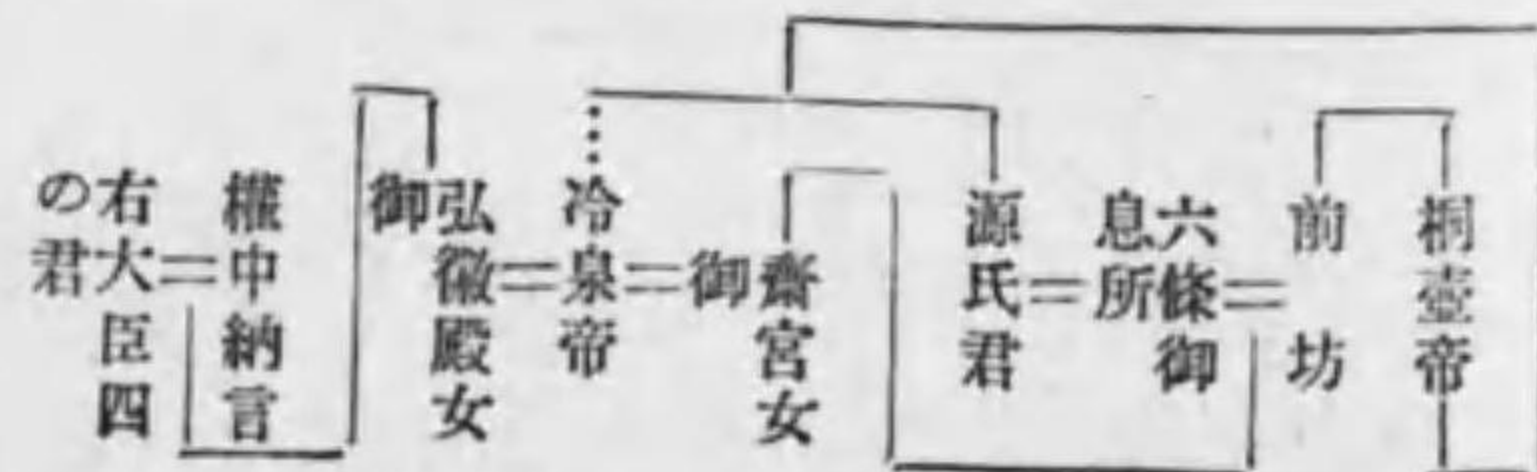
六條御息所の遺子^(二)前齋宮は、帝^(三)に参る事にきまつたので、源氏君はその準備に忙しかつた。此の事をきかれた先帝朱雀院は、須磨へ流されたその報復の爲めか何うか知らないが、源氏君が、前齋宮に深い愛着を抱いてゐる自分の志を遂げさせてくれない事をお怨みになり、甚しく失望せられたのであつた。

帝には既に弘徽殿女御が参つて居られた。これは源氏君の遊び友達で、かの亡き妻葵上の兄君、先に頭中將であり、今は權中納言になつた人の姫君である。源氏君と權中納言は、昔から遊び仇で、いろ／＼な事に競争をした。今亦、互ひに姫君や、その世話をされた女君を帝に差し上げて、その御寵愛を争ふかのやうである。

帝は繪を甚だお好みになつた。今度新しく参つた齋宮女御は繪がお上手である。それで帝は、此の女君に御心が傾かれて御寵愛あそばされた。權中納言の方でも、負けてはならぬと繪の巧

みな女房達を集めて、物語繪を面白く畫かせた。源氏君もそれをきいて、昔から傳はつて来た面白い繪卷や、またかの須磨の佗住居で、源氏君がその淋しい生活を慰める爲めに書いた繪日記などを、皆齋宮女御の所に差し上げた。

かくて三月の十日頃、長閑な春の景色に、人々の心も浮き立つて、弘徽殿女御の方と、齋宮女御の方と、両方の女房達が、それ／＼に優れた繪を出しあつて、繪合の會を開き、その優劣を争ふ事となつた。判者は藤壺入道の宮で、竹取の翁に宇津保の俊蔭、伊勢物語に正三位を合はせて、争つたが、此の時は優劣が決せず、更に廿日過ぎと日をきめて、第二回の繪合の會が催された。今度の判者は、帝の御兄、帥の宮で、此の時も、両方ともに立派な繪が多くて、勝負がわからなかつたが、最後に齋宮女御の方から、源氏君の書いたかの須磨の繪日記を出すに至つて、相手方の人々も感嘆して、遂に勝となつた。それから後は、敵味方一所になつて、徹宵の酒宴に歡を盡した。その席上で、判者なる帥の宮は、次の



やうに論じて、源氏君の才筆を賞した。

「何の才も心より放ちて習ふべき業ならねど、道々に物の師あり、學び所あらむは、事の深さ浅さは知らねど、自ら移さむに跡ありぬべし。筆執る道と碁打つ事とぞ、怪しう魂の程見ゆるを、深き勞なく見ゆる癡者もさるべきにして、書き打つたくひも出で來れど、家の子の中には、なほ人に抜ける人の、何事をも好み得けるとぞ見えたる。」（何の學問でも、自分の心を放れて、習ふ事の出来るものではありませんが、それ／＼の學科には教師があり、學ぶ方法がありませうから、その學問が深いか浅いかは知らないが、兎に角習ひ覚えさへすれば、何か残るものがあるでせう。併し繪を書く事と碁を打つ事だけは、不思議にも天才の程が見えるものでありますが、深く勉強したやうにも見えない愚か者でも、天才があつて、繪や碁をよくするやうな者も現れる事もあるけれども、上流の子弟の間では、やはり人よりも頭のすぐれてよい方が、何事にも趣味を以つて、會得するやうに思はれます。）

その後、源氏君は山間に閑居したい志があつて、洛外嵯峨野に御堂を造らせたが、出家隱遁の心は容易に遂げられさうにも思はれない。

此の卷では前齋宮の身の上に結末をつけた。六條御息所は、既に落標の卷で死んで、結末はついてゐるが、此所ではその遺孤の幸福なる團圓を讀者に示し、一面源氏君の温情に富む心を描いてゐる。六條御息所の事はこれで全くかたがついた。

源氏君が繪日記を書いた事は須磨の卷にも見えて、此所はそれと前後照應させて、小さい事でも無駄に使はずに、僅かな材料でも生かして使ふ作者の筆致を見る事が出来る。

殊に興味のあるのは、作者の藝術觀の窺はれる事で、藝術は天才の事業であるといふ意見は、同じく作者が帯木の卷に於いて、左馬頭の口を通して、空想的な繪は人の眼をごまかす事も出来るが、寫實の繪に至つては巧拙の差の著しく現れるものであると云つてゐる意見などとともに、注意すべきであらうと思ふ。さうして、ごまかす事の嫌ひな、何事も眞面目で着實な事を好む温厚な作者の性情と趣味性とは、これらの語の中にも現れてゐるのである。

なほ權中納言と源氏君とが競争するのは、かやうに二人の人物を對立させて書く事に作者が興味を持つてゐるのによる。これは作者の常套手段で、後の夕霧と柏木、薫君と匂宮もさうで

ある。

帥の宮は藝術趣味の豊かな人として描かれてゐる。後にも度々此の物語の中に出て来る。

- (一) 後に秋好中宮といふ。此の巻ではまだ梅壺に居られたので梅壺の御方と巻中に記してゐる。
- (二) 冷泉院と申し上げる。深標の巻で朱雀院に代つて位に即かれた。
- (三) 物語小説の場面を繪に畫いたもの。當時の小説には此の物語繪に書かれたものが多かつた。
- (四) 巻名の出所。
- (五) 竹取物語。宇津保物語俊蔭の巻。正三位物語は現在傳はつて居らぬ。鎌倉時代に出来たと思はれる岩清水物語も一名正三位物語と云はれてゐるがこれは古い時代のもとの違ふ。(古物語類字抄参照)。
- (六) 後に養兵部卿宮として出づ。此の時太宰帥をしてゐたので帥の宮と云ふ。桐壺帝の御子である。
- (七) 巻の終に此のやうな事を付け加へたのは、次の巻に嵯峨の御堂の事が出るからそれに連絡させる爲めである。是も作者の常套手段。

十八 松 風 (三十一歳秋の事)

二條院の東院の造營が出来上つたので、花散里をその西の對に住まはせた。東の對には明石上を置かうと思つたりした。それで明石上に都へ上つて来るやうに勧めたが、思慮の深い明石上は、なほいろ／＼と將來の事を考へて、上洛を躊躇した。併し、また考へ直して見ると、此のやうな田舎で成長する姫君の身の上を思ふと、源氏君の言葉に背く事も出来ないで、明石上の母君の祖父の代から傳はつてゐる、洛外大井河畔の別荘を修理して、母の尼君とともにひそかに上洛して、そこに移り住む事になつた。尼君は、住みなれた土地を離れ、夫に別れて、さすがに寂しく、松風の音をきいては

身を變へて獨り歸れる山里に聞きしに似たる松風ぞ吹く

(今は尼の姿に身を變へて、夫に別れ獨り淋しく、もとの都の、郊外に歸つて來たのであるが、あの須磨で聞いたのと同じ松風の音がこゝでも吹き過ぎて行く。)

と歌つたりした。

明石上上洛の知らせを受けとつた源氏君は、矢も楯もたまらず、紫上には、桂の院の修繕の用事もあり、嵯峨の御堂にも御籠りしたいから、二三日留守をあけると云ひ残して、大井の山莊に明石上を訪れて、久しぶりに舊情を温め、我が子の顔をも初めて見て、積る話に時の移るのも知らなかつた。その翌日は桂の院で酒宴を催して、親しい人達ばかりで一日を面白く過し、その晩も亦大井の山莊に泊つて、翌朝二條院へ急いで歸つた。

その晩、夜深けて、明石上から源氏君に手紙を持つて來たので、傍に座つてゐる紫上にそれを隠す事も出來ず、かへつてこれをよい機會として、明石上が大井の山莊に來て居る事を紫上に打ち明けて、その女の子を引き取つて、こゝで育てたいと思つてゐると話した。子供のすきな、しかも子供の出來ない紫上はそれをきいて、却つて心が打ち解けて、大變喜んで、早く引き取りたいものだと思つたりした。かくて源氏君は、その後月に二度くらゐ大井の山莊を訪れては、明石上に逢つてゐた。

○

此の卷では明石上の事が主として描かれてゐて、落標の卷に直ちに接するのである。敘述は詳しく事件に變化があつて、面白い卷である。明石の親子夫婦の別れ、大井山莊の淋しい住居、源氏との再會の喜び、紫上の軽い嫉妬等がよく描かれてゐる。

(一) 東院とは二條院の東隣に一つの町があつてそこに建造せられた別宅であるからかく稱するのであらう。

(二) 當時の寢殿造では中央に寢殿があり、兩側に對屋があり、是を西の對東の對といふ。又後方に北の對がある。寢殿は主人夫婦の居る所。對屋は妾や子供達の居る所である。

(三) 卷名の出所。

(四) 源氏君の別莊であらう。桂川の畔にある邸らしい。大井の山莊、桂の院、嵯峨の御堂、皆近くにあらう。

十九 薄雲 (三十一歳の冬より三十二歳の秋迄の事)

冬になるとともに、大井河邊の住居は益々淋しくなつたので、源氏君は、明石上に、二條院へ移るやうに勧めたが、明石上は、源氏君の自分に對する愛が薄くなる事をおそれて、その言葉に従はないので、それでは、姫君だけでもせめて引き取りたいと望んだ。姫君と別れるのは、明石上に取つては最もつらい事であつたが、母の尼君が、姫君の將來の爲めにと、いろ／＼勸めるので、遂に源氏君に愛子を渡す事に決心をした。十二月の雪がかきくらし降り積る朝、源氏君は大井に姫君の迎へに行つた。そして、源氏君に伴はれて二條院へ連れて來られた姫君は、暫くは母を求めて泣いてゐたが、間もなく紫上になつてその後を慕ふやうになつた。年が明けて春となつた。

その頃、源氏君の妻なる故葵上の父君太政大臣が薨去せられたので、人々が悲嘆の涙に暮れて未だ乾く間もないのに、また帝の御母薄雲女院の御病氣が重つて、三月頃にはかなく死んでしまはれた。御年三十七。未だ若い盛りであるのに惜しい事であつた。臨終の枕元に座つてゐた源氏君の心の中には、萬感交々に湧いて、自分の邸に歸つてからも、一室に閉ぢこもつて、過去の事を思ひ出しては、日一日を泣きくらしした。そして、胸中の悲懷を一首の歌に托した。入日さす峯にたなびく薄雲は物思ふ袖に色やまがへる

(あの夕日のさしてゐる山の端にたなびく雲の、薄黒い色は、自分の、物思ひの餘り涙にぬれる、此の喪服の薄黒い色とよく似通つてゐるやうだ。)

御母にお別れになつた帝の御心中も亦淋しく心細いものでおありになつた。薄雲女院のなくなつた翌日には、また式部卿官も薨じられた由を奏上したので、帝は甚だ心細く思はれた。その頃、薄雲女院が后であらせられた時代から御祈禱の師としてお仕へしてゐた、七十ばかりの老僧が官中に召されて、帝の御祈禱を申し上げてゐた。此の僧の口から、源氏君と薄雲女院との秘密が帝に告げられたのであつた。帝は、實は、桐壺帝の御子ではなくして、源氏君の御庶子であるとお話し申し上げた。此の秘密を知り給うた帝の御嘆き惱みは一層まさられて、遂には御位を退いて、源氏君を位につけようとさへ御決心になつたのであつた。そして、秋の

司召には、源氏君は太政大臣に敍せられるはずであつたが、それも、源氏君は辭退申し上げて、たゞ牛車(ぎま)の許しだけをお受けしたので、帝は此の上もなく残念に思はれ、せめては親王にでもしたいものだと思せになつて居られた。權中納言は此の時に、大納言兼右大將に昇進したので、源氏君は、此の人が今一階位が上つて、大臣となつた時に、政治上の實權は、すべて此の人に譲つて、自分は早く隱退したいものだと思つた。且つ、源氏君は、帝の仰せ言に合點の行かない節があるので、つくづく考へを廻らして見ると、帝は自分達の祕密を知つて居られるに違ひないと覺つて、誰か此の祕密を明かし申上げた者があらうと、王命婦(みことめ)に問ひ尋ねて、調べて見たが、遂にわからなかつた。

その年の秋の頃、齋宮女御は二條院へ暫く歸つてゐた。源氏君は此の女御に前から思慕の情をよせてゐたのであるが、女御の母六條御息所の遺言を重んじて、自分が親代りの世話をしたのであつた。今女御と打ち解けて話をしてゐると、更に情念が起つて、それとなく、心中の思ひを打ち明けたが、それも直ぐに他の事にまぎらはして、昔(むかし)から春と秋との優劣を争つた事が多かつたが、そなたは何ちらがお好きかと尋ねた。女御の答へは、秋の方に心をよせてゐると

の事であつた。それにつけても、源氏君は、秋の衰れを知るならば、私の心をも察して下さいと、衷情を語らずには居られなかつた。かやりに親らしくない仕打が時々あるので、女御も内心甚だ不安に思つたが、その後、源氏君は思ひ返して、強ひてあきらめたのであつた。さうして紫上に、女御は秋が好きだと申されたが、あなたは春を好むといふ事だから、四季折々の草花を植ゑて、お前方の心を慰めたいものだと言したりした。又大井なる明石上にも慰めの手紙をやつたりした。

○

此の巻に於いて薄雲女院はなくなられ、葵上の父太政大臣も歿し、今まで登場した人物の中の主要な人々は、こゝで大方その結末がついて、更に一轉して、新しい人物を展出して、新しい舞臺に入らうとする心持が見える。さうして、源氏君の華やかな青春期も過ぎ去つて、まさに中年の時期に入りつゝあるのだ。

帝は源氏君と薄雲女院との間の祕密を知り給うた。過去の暗い陰はこゝに打ち明けられた。此の祕密を中心としてうごめいてゐた人々も大抵こゝにその終りを告げて、さうして源氏君の

若き時代も過ぎた。齋宮女御を戀しつゝも、それを強ひて抑へて、親らしい顔をして世話をやくだけの思慮分別がつく年配に達した。これも、もう十年も若い源氏君なら、到底そのまゝでおくわけはないであらう。空蟬や朧月夜の内侍に對するが如く、理性も癡痺して、卑しい慾望がそれに打ち勝つたであらう。そして戀の歡樂に酔つた事であらう。今は最早さういふ時期も過ぎた。いやに分別臭くなつた。家でも造つて、若い時から關係した女達をその家に集めて、呑氣な生活を送らうなどと考へるやうになつた。時代は過ぎた。舞臺が一轉しようといふ氣持が此所に現はれてゐる。

かくて、此の卷は此の物語全體の筋を運ぶ上には重要な卷である。

(一) 女院とは帝の御母にして出家せられて門院號を贈られた方に對する敬稱。

(二) 卷名の出所。藤壺出家後の名を薄雲女院といふのもこれより出た。但し是は此の物語をよむ便宜上につけた名で、作者がつけたのではない。

(三) 桃園式部御宮と呼ぶ。權齋院の父君。桐壺帝の御子。

(四) 秋行はれる任官式。在京官吏を新しく任ずる式で、これを司召(ツカサメシ)とも秋の除目と

もいふ。

(五) 牛車に乗つて宮中の建禮門まで入る事を許される事。親王攝政關白に對する特別の恩惠である。これを牛車の宣旨といふ。

(六) 源氏君と藤壺との間を手引した女房。若紫の卷に出づ。

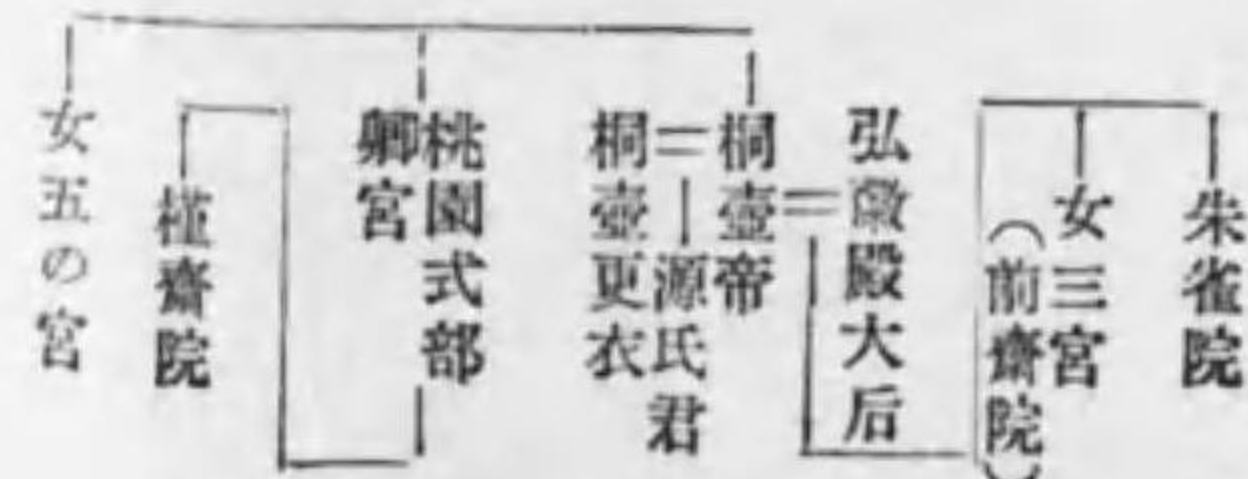
(七) 萬葉集卷一に、天智天皇が内大臣藤原鎌足に詔して春の花と秋の紅葉の優劣を争はしめられた際、額田王の作られた歌が出でたのを始めとして、拾遺集その他に春秋の優劣を判じた歌が出てゐる。

(八) これによつて此の女御の名を秋好中宮と名付ける。

(九) 此の言葉は、少女卷で六條院を造るに至る動機を示す爲めに、此の卷の終につけ加へたのである。

二十朝 顔 (三十二歳の九月より冬迄の事)

その頃、賀茂の権齋院は、御父式部卿宮が薨じたので、喪に服して齋院をやめ、九月にはお里なる桃園の宮に歸つて、此所に住まふ事となつた。源氏君はかね／＼此の姫君に心をよせてゐたのであるが、神聖な齋院には、さすがの源氏君も手を出す事が出来ず、時折手紙の取り遣りをしては心を慰めてゐた。そして今、権がそのお里なる桃園の宮に歸つて來たのを見ては、食指の動くのをとめる事が出来ずして、その邸を訪れたのであつた。権の叔母君、女五の宮は、又源氏君にも叔母に當るので、同じ桃園の宮に居られる此の女五の宮を訪問して、懷舊談に時を過して後、権の部屋をも見舞つた。併し、あくまでも物堅い権は、侍女をして取次がせたのみで、源氏君には顔も會はさないで、空しく我が家へ歸つて來た。翌朝朝顔の花を折り取つて、



見し折のつゆ忘れぬ朝顔の花の盛りは過ぎやしぬらむ

(昔見た時の美しさが少しも忘れられないあの朝顔の、花の盛りはもう過ぎてしまつたのでせうか。)

と書いた手紙を添へて、権の所に持たしてやつたが、その返事は、たゞ素気なく簡単に書いてあるばかりであつた。併し女五の宮は、二人の間を似合はしい間がらと思つて、好意を寄せてゐるので、源氏君の權に對する思慕の情は一層増して、それから後は、毎日のやうに權に手紙を書くのを仕事とした。

冬の十一月頃の、或る淋しい夕暮に、源氏君は思ひあまつて、紫上の不機嫌なのも顧みずに、女五の宮の病氣を見舞ふといふ口實を作つて、桃園の宮を訪れた。併し、年老いた女五の宮と昔話をして、源氏君には一向面白くもなく、女五の宮もあくびをして、ねむたいから失禮すると云つて、すぐに寢込んでしまつたので、源氏君もこれ幸ひと、権のお部屋の方へ行かうとすると、一人の老女が咳をしながら出て來た。それはかの源典侍である。此の老女が尼となつて、女五の宮の御弟子になつたといふ事は、かね／＼聞いてゐたが、今まで生き永らへて

居ようとは思はなかつたので、意外の邂逅に驚き呆れた。やがて、源氏君は権の部屋に来て、眞面目に怨みかこつてかき口説き、女房達も、権が源氏君の心に従へばよいのにと望んでゐたが、結局、源氏君の希望は容れられずして、きつぱりと、私の心は昔に變りませんと斷られたので、失望して歸つて來た。

それから後は、源氏君の心は一層思ひ亂れて、自暴自棄のやうに、二條院へも歸らずに浮かれ歩いて、夜も外で泊る日が多く重なつた。紫上は源氏君の此の様子を見て、源氏君の態度を憎くも妬ましくも思ひ、それからは源氏君に愛想もなく、物も言はないので、源氏君はまた紫上の機嫌を取るのに骨を折つたりした。

或る雪の深く積つた日、源氏君は紫上に、薄雲女院が在世中、そのお部屋の前に雪の山を作らせて遊ばれた事があつたが、あの薄雲女院といふ方は何事にも優れた立派な方であつた。私をも深く頼みにして居られたなどと話して、昔の事を思ひ出でつゝ横になつて寝た。その夜の夢に、薄雲女院が現はれて、そなたの爲めに私の浮名がたつたのだと怨みの言葉を云はれたので、驚いて眼が覺めた源氏君は、女院の成佛を祈つて佛の名號を念じた。

〇

此の巻で、初めて権齋院が主として描かれてゐる。物堅い冷い理性的の女性、飽くまで源氏君の言に従はずに、獨身を立て通した婦人である。併しかういふ性格の婦人も、女性の種々相を描く上には、點出すべき必要がある。夕顔とは反對の性格を持つ女で、朝顔の花と夕顔の花とでもつて此の二人の女性を象徴したのは、今の私達にははつきりと感じられないが、此の二つの花から作者の受ける感じが相違してゐたのによるのであらう。併し、あの夜明にすつきり咲いてしぼむ朝顔と、弱々しい夕顔の花とは、可成り二人の性格をうまく現はしてゐるやうにも思はれる。

もう中年に達して、思慮分別のあつた源氏君も、かつて戀した女、しかもその戀の遂に遂げられなかつた唯一人の女である権に對しては、再び強い愛着の念に捕はれて、戀の奴隸とならざるを得なかつた。しかもそれは單なる戀ではなくて、多少意地づくでもといふやうな氣持も含められてゐるやうである。源氏君が朝顔の歌を式部卿官の姫君に差し上げたとは、既に帚木の巻にも出てゐた。榊の巻でも源氏君は権齋院に歌を贈つた。かくて十五年來の戀である。源

氏君も意地づくにならざるを得ない。併し結局権の強情な心には打ち勝ちがたく、紫上には怨まれ、薄雲女院の夢を見ては、その心も折れざるを得なかつた。かくてその戀は遂に遂げられなかつた。こゝに中年の根強い戀が描かれてゐる所が一寸興味があるが、大した發展もなく、飽氣なく終つた。権齋院と源氏君との關係はこれで結末がついたと見てよい。前卷まで時見えてゐた権の事もこゝで段落がついて、以下は、次の卷の始めに、権が源氏君に斷乎として拒絶する事と、若菜下の卷にその落飾した事がわづかに見えるだけである。源典侍もこゝに一寸現はれて、これ以後間もなく死んでしまつたのであらう、以後には全く姿を見せない。ここで此の滑稽な老女も結末がついた。

かくて前卷以來、源氏君の青春時代に關係のあつた多くの女は、大抵一段落がついた。さうして、須磨明石等の源氏君の失意時代の數卷を除いては、作者は大抵各卷に一人づつの女性を點出して活動せしめ、一人一巻の割合で女性を描き、今またそれらの女性の落ち着き場所をそれ／＼描いて來て、此所に源氏君の生涯の前半を終らうとしてゐるのである。

なほ前の六條御息所の事と云ひ、権の事と云ひ、源典侍と云ひ、または近江君と云ひ、五節

君と云ひ、何れも物語の所々に現はれて、巧みにその間を縫うてその存在を示してゐる。或る者は始めが確かではないが、いつの間にかはつきりと姿が見られるやうになる。或る者は始も終も定かでなくて、いつの間にか舞臺に登りいつの間にか姿を消してゐる。しかもその人物の印象だけは讀者の腦中に深く印せられて忘れられぬ、かういふ不思議な書き方をしばしば作者は登場人物に行つてゐるのである。

終の方にある雪の山の事は、枕草子に出てゐる雪の山の話の思ひ起させる。當時宮中では、かういふ雪の山を作つて遊ぶ事が、冬の行事として行はれたのであらう。此の物語でも枕草子でも、それが後宮での御遊び事である點において共通してゐるのである。同じ時代の宮廷生活の断面が、一は假作小説の中に、一は現實描寫に現はされてゐるものとして興味深い。

(1) 権の姫君が賀茂齋院となつた事は神の卷に出てゐた。前齋院は桐壺帝の后のお腹に生れられた女三の宮がなされたが、桐壺帝の崩御によつて齋院を下りて権が代りに齋院となられたのである。権の御父君は桐壺帝の御弟である。

- (二) 桃園宮に居られたので桃園式部卿宮と稱す。その薨じられた事は薄雲の巻に出てゐる。
(三) 卷名の出所。なほ權の齊院の名は、帯木の巻にも榊の巻にも亦こゝにも、此の姫君を朝顔の花にたとへて源氏君が朝顔の花を贈つた事が出てゐるからである。

二十一 少女 (三十三歳の四月より三十五歳の十月迄の事)

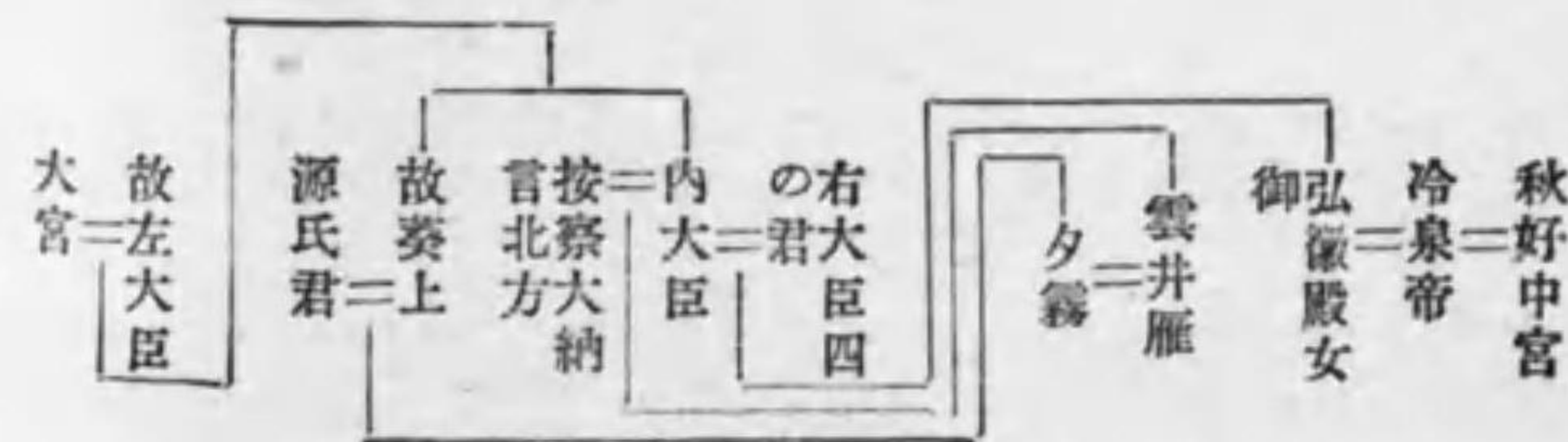
年があけて翌年の初夏の頃、源氏君はなほ權の事が忘れられないので、手紙を贈り、叔母なる女五の宮も源氏君の意に従ふ事を勧めたが、權は斷乎としてその言に従はなかつた。

かの葵上の忘れ形見夕霧は、今年十二になつたので元服の式をあげた。そして直ちに四位に敘せられる筈の所、源氏君は、すべての事が自分の思ふ通りになる今、幼い者をさやうに縦まゝに昇進させるのは、世間の手前に對しても出來難い事と思つて、六位に敘し、大學に入れて勉強させる事にした。それは、

「高き家の子として、官爵ついでに心にかなひ、世の中盛りに驕りにならひぬれば、學問などに身を苦しめむことは、いと遠くなむ覺ゆべかめる。さるは戲遊たはぶれびを好みて、心のまゝなる官爵くわんさくに上りぬれば、時に隨ふ世の人、下には鼻まじろきをしつゝ追從おっさうし氣色とりつゝ、相隨ふほどは、おのづから人と覺えてやむごとなきやうなれど、時移り、さるべき人に立ちおくれ

て、世衰ふる末には、人に輕め侮らるゝに、かゝり所なき事になむ侍る。なほ才を本としてこそ、大和魂の世に用ひらるゝ方も強う侍らめ(高い身分の家の子として、官位も思ふ通りに昇進し、家富み榮えて驕奢な事が習慣となると、學問などに身を苦しめるのは、随分ばかりしいやうな氣がするであらう。そのくせ遊び廻ることを好んで、望み通りの官位に昇進すると、權勢のある人に隨ふのが世の常で、心の中では鼻の先で嘲笑ひながら、表面は追従し御機嫌を取つてお取巻となつてゐるので、自然と立派な人のやうに思はれ、貴いやうには見えるが、時勢が移つて力となつてくれる人にも死に別れ、權勢が衰へる末の世になると、人から輕蔑せられるので、頼り所もない事になるのです。だからやはり學問を根本として、はじめて日本的な精神も、世の中に働くことが強くなるのでせう。)

といふ、學問を重んじる源氏君の意見からであつた。



その字附くる式は、二條院の東院で行はれ、大學の儒者達の、貧乏で頑愚な、世ばなれのしたさまが、貴族達の笑ひを招いた。かくて入學後間もなく、その學業は進んで、僅か四五ヶ月にして史記にも通じるやうになつた。

その頃、かの以前兵部卿宮であつて、今は式部卿宮となつた方の姫君が冷泉帝の女御として宮中に参り、齋宮女御は中宮となり、源氏君は太政大臣に任ぜられ、權中納言は大納言兼右大將より、更にまた内大臣に出世した。此の方には、弘徽殿女御の他に今一人の妹の姫君があつて、その母君は、内大臣と別れて按察大納言の北方となつたので、姫君を内大臣が引き取つて、祖母大宮の手で養育してゐるのである。それで、同じく大宮の所で成長した夕霧とは、幼い時からの遊び友達で、末は共に暮さうと、子供心にも互ひに期する所があつた。此の姫君は今年十四になる。内大臣は此の人を東宮の女御に差し上げようと思つてゐたが、源氏君の姫君なる明石姫君といふ競争者があつて、到底その人と東宮の御寵愛を争つても勝てさうにないで、内大臣も大宮も、此の事によつてひどく源氏君を怨めしく腹立たしく思つてゐた。

或る日、内大臣は、母大宮の所で、姫君を相手にして遊んでゐる時、ふと女房達が、夕霧と

姫君とが相思の仲になつてゐると噂話をしてゐるのを聞いた。内大臣は、若しやそんな事でもありはしないかと氣遣つてゐたが、大宮がそれをとめてくれるだらうと思つて安心してゐたのに、かういふ噂をきいたので、大宮は夕霧を寵愛するあまり、二人の仲を見て見ぬふりをして、姫君に疵をつけようとなさるのかとひどく腹を立てて歸つた。そして、此のまゝでおいては、二人の間に過ちが出来ると思つたので、また二日ほどして、やつて来て、大宮の孫の愛に溺れる事を怨み、乳母達には監督の不行届を叱つて、近い中に自分の邸宅に姫君を引き取る事にした。大宮は、姫君が此のやうに立派に育ち、東宮へ差し上げようと内大臣が思ふやうになつたのも、皆自分が、此の姫君を養育した爲めではないか。内大臣が、二人の仲を腹立ち、自分に怨み言をいふわけは少しもないと、内大臣の處置を怨めしく思つたのも、大宮は深く夕霧を愛してゐたからであらう。此の事を聞いた姫君も夕霧も共に別れを悲しんで、姫君は空に雁の鳴き渡るのを見ては、「あの雲井(雲)の雁も自分のやうに悲しく思つて居るのであらう」と溜息を洩らした。

それから間もなく、内大臣は弘徽殿女御をお里に退出させ、その遊び相手にと云つて姫君を

迎へに来たので、大宮もしぶ／＼姫君を渡す事にきめた。夕霧も別れを惜しんで、一間で涙に濡れながら二人がひそ／＼話をしてゐると、先日内大臣からひどく叱られた乳母は、これを見て、不安に感じて、「六位のやうな身分の低い人に、大臣様の姫君が縁付くのは似合はぬ事だ」とつぶやいた。これをきいて夕霧も姫君も口惜しく思つたが、やがて内大臣に伴はれて姫君はその邸に連れて行かれた。それから後の夕霧は、六位の身の上が卑下せられてならなかつた。その中、例年の通り新嘗會の五節(五)が行はれる時となつた。源氏君の家來なる良清も、惟光も、自分の娘を五節の舞姫として出した。源氏君はその舞姫の姿を見て、昔自分と關係があつた五節君(五)の事を思ひ出して、手紙を遣はした。

少女(八)も神さびぬらし天つ袖古き世の友齡(老)經ぬれば

(昔からのお友達である私も年を取つたのですから、あの頃は美しい少女であつたあなたも、さぞお年寄になられた事でせう。天つ袖は天人の羽衣の袖で、それを五節の舞姫の振る袖に譬へて云つた。また、袖を振るを古(古)に言ひかけた。)

此の舞姫の一人惟光の娘に、夕霧はふと想を懸けて、手紙をやつたので、それを父の惟光が

見つけて、「いや、美しい御戯れをなさるものだ」と感じてゐた。

その後、夕霧は源氏君の邸へ引取られる事になつて、おとなしい花散里がそのお世話をしたが、二人の孫を奪はれた大宮は、ほろ／＼と泣きながら愚痴をこぼしてゐた。併し年の暮には、此の祖母が夕霧の爲めに春の晴着をつくつてやつた。夕霧は六位の身分の低さが卑下せられて、正月にも宮中へ参内する心にはなれなかつた。

翌年二月の廿日餘り、朱雀院で花見の宴が開かれた際、源氏君は久々に、先の弘徽殿女御、今の太后に會つたが、源氏君の立派な態度を見ては、昔自分が、源氏君に種々の迫害を加へた事が、恥かしく後悔されたのであつた。かの帥の宮と申し上げた方も、今は兵部卿宮となつて、此の宴に列してゐた。

その秋の司召に夕霧は侍從に任ぜられた。

源氏君は廣い邸宅を造つて、昔馴染の女達を集めようと考へてゐたので、六條京極邊に六條院の建築に取りかゝつたが、明年は、紫上の父君式部卿宮の五十の賀も催されるので、その爲めにも工事を急いで、漸く翌年の八月に出来上つた。六條院は四町より成り、西南の方の町

は、六條御息所の居られた所なので、御息所の御娘の秋好中宮の住居として庭に秋の景を作り、東南には源氏君が紫上とともに住んで、春の景を模し、東北の方は花散里の居所で夏の景を移し、西北方には明石上を入れる事にして、雪遊びの便りよきやうに、冬の景を作り、それぞれ移轉がすんだが、明石上は一人遅れて、十月に此所に移つて來た。その他、夏の方には、馬場(二三)、既舎(二四)も設けられ、明石上の町の北側には御藏町(二五)も建てられて、こゝに、源氏君の理想は實現せられたのであつた。

○

初めに一寸槿の事が見えるのは、前卷に直ちに續いてゐるので、寧ろ前卷に入れるべきもの、権齋院と源氏君との關係はこゝに結末をつけた。かやうに、此の作者は一卷にまとめればよい事を、わざ／＼二卷にまたがらせて書き加へるやうな事を時々する。帯木の卷と空蟬の卷との連絡、梅枝の卷と裏末葉の卷との關係などは、その顯著な例である。

此の卷は夕霧と雲井雁(二六)との幼友達の戀物語が主となつてゐる。此の子供の戀物語は甚だよく描かれてゐる。無邪氣な氣分がよく出てゐる。それに大宮の孫に對する愛着、内大臣が二人の

仲を裂かうとする障害などが加はつて、又一篇まとまつた好個の家庭小説ともいふ事が出来る。

源氏君が自分の子供の夕霧に對して、特別き取扱ひもせず、賤しい位置に置き、また大學に入れて教育させるのは、寧ろ作者の考へが出てゐる所で、作者は不公平を嫌つて公明につき、且つ高い教育を理想としてゐるのであらう。これは、此の物語の中で、作者の教育觀、學問論として見るべき箇所である。「大和魂」といふ語も、此所に出てゐるのが、わが國における最初の文献である事なども注意すべきである。さういふ意味で、江戸時代の學者も、特に、此の箇所だけを抜き出して、記したり註を加へたりしてゐて、古來注意せられてゐた所なのである。初めに夕霧の字附くる式の時に、大學の學者の愚かしい様を描いてゐるのは、當時頑愚の標本として、儒者を嘲笑的に觀てゐたからで、此の事は物語類にしばしば出て来る。今も昔も變らぬ學者らしい、非社會的で偏屈な、一面から見れば滑稽な氣質を當時の儒者も持つてゐたのであらうが、女の目にはそれが此の上もなくをかく見えたのであらう。物語には、極めて誇張してその貧弱愚鈍な様が描かれてゐる。

六條院の完成を以つて巻を終へたのは、即ち薄雲の巻の最後に、六條院を作らうとする動機を示したのと關係があるので、繪合の巻の終に嵯峨の御堂を作らうとした事を一寸述べて、松風の巻でその嵯峨の御堂を生かして來たのと同巧の書き方である。その他前に述べた繪日記もさうであり、住吉詣の事も亦さうであり、或は、滯標、蓬生、松風の諸巻に見える二條院の東院の事も亦同じ筆法である。こゝに、作者が一點一劃もゆるがせにせず、首尾相應じ、前後照應するの筆致を窺ふ事が出来る。

さて、此の巻に初めて夕霧の事を出し、また雲井雁との戀によつて、次巻以下、今は源氏君も青年の時期が過ぎて、後から生れて來た若者、新しい青年が更にそれ／＼の戀を得る、その次巻よりの新しい舞臺に入る緒口をこゝに開いてゐるのである。此所に至つて源氏君の時代も過ぎたと云はざるを得ない。

最後に六條院完成の事が出てゐるのは、即ち、源氏君の從來關係した女達を一堂に集めて、源氏君の戀愛物語の總集としたかの如き觀がある。但し、六條院には源氏君の最も寵愛した典型的女性が集められ、二條院とその東院には、末摘花や空蟬の尼君の如き、源氏君の憐憫を

豪つてゐる二流以下の女が置かれた。源氏君の若い時からの戀物語はこゝに全く安定を見た。終を告げた。次巻以下は新しい登場人物を出し、舞臺の轉換法、その他の氣分も今までの巻とは甚だ違つて、いろ／＼の點で新しい場面が開けたやうな心持がする。かの源氏君が前半生に於ける波瀾の原因たる、弘徽殿女御の源氏君に對する憎惡も薄らぎ、今は過去の罪惡をすら後悔して、源氏君に謝してゐるのである。それで源氏君の前半生の終りを、源氏君が卅五歳になつた此の巻におき、次巻以下はその後半生——晩年に移つたものと見てよからう。即ちこゝに一段落をつける事とする。

なほ六條院の四町の事や、そこに、多くの女を一所に集めるといふ構想は、既に宇津保物語にもあつて、即ち、此の町を春夏秋冬に分つ事は、既に宇津保物語の吹上の巻にも神南備種松の邸の庭園が四面八町あつて、東は春の山南は夏の蔭西は秋の林北は松の林と出で、その他數箇所に見えてゐるので、當時の富豪の邸宅はかやうな趣向をこらしたものが多かつたのであらう。又、多くの女を一所に集めるといふ事について、仲忠が父の思ひ人達を三條殿に集める事が藏閣下の巻に描かれてゐる。故にこれらの構想は必ずしも作者の獨創ではなく、寧ろ宇津保

物語にヒントを得る所があつたのであらう。

(一) 人の實名を呼ぶ事を不敬なりとして別に平生の呼名をつけた。これを字(アザナ)といふ。これは支那の習慣が漢學の輸入に伴つて我が國でも行はれたもので、大學の新入學生はその字を文章院の堂監なる役人によつて名簿に記入せられた。その記入の式である。文人學者などは元服式の時に字を附けるのが慣例である。

(二) 紫上の父君。桃園式部卿宮が薄雲の巻で薨じた後を受けて式部卿となる。その姫君は紫上の腹違ひの妹である。

(三) 雲井雁と名付ける。今年十四歳で夕霧より二つ上。

(四) 大宮の住んで居る邸の名を三條宮といふ。京都の三條通りにあつたからであらう。内大臣は北方の四の君とともに本宅に住んでゐるのである。

(五) 「霧深き雲井の雁も我がごとや晴せず物の悲しかるらむ」(河海抄に出でたる引歌、出所不明)。此の言葉によつて此の姫君を雲井雁と名付ける。又後に夕霧の北方として三條宮に同棲してゐたので、三條の上とも稱す。

(六) 新嘗會の時には行はれる女舞。舞姫は公卿諸國司の娘の中より四人選抜せられる。十一月の中の丑の日より辰の日の豊明の節會まで四日間に亘つて舞が行はれる。

(七) 須磨の巻に出た女。

(八) 卷名の出所。少女はまた未通女とも書く。

(九) 螢兵部卿官と云ふ。桐壺帝の御子で朱雀院や源氏君の御弟。前に帥の宮として出た。紫上の父官が兵部卿から式部卿に轉じた後を受けて兵部卿となつた。

(一〇) 帝の御傍に侍つて補佐する役。従五位相當官。

(一一) 六條御息所の舊宅。

(一二) 町とは一區劃をなして同じやうな建物の建ち並んで居る所。

(一三) 五月には騎射の會が催されるから夏の町に馬場が置かれた。

(一四) 藏の並び建てられてゐる區劃。

後期 源氏君の後半生——六條院時代

第四期 中年期——幸福な生活

二十二 玉 鬘

鬘

(三十四歳より三十五歳の十二月迄の事)

年月が立つても、源氏君はなほ夕顔の事が忘れられなかつた。夕顔の使つてゐた女房右近は、今は源氏君に引き取られて紫上に仕へ、平和な生活を送つてゐる。かくて話は十七年の昔に返る。

夕顔の所へ毎晩のやうに忍んで通つて來た美しい男に連れられて、夕顔が右近とともに行方不明になつて後、一人残された女の子——玉鬘の君は母を戀ひ慕つて泣くので、夕顔の乳母が心當りの所を捜して歩いたが、杳として何の手懸りもなかつた。そのうち、此の乳母の夫が太宰少貳になつたので、乳母は玉鬘を連れて、夫とともに筑紫へ下つた。時に、玉鬘は四歳であ

つた。年月は過ぎて、玉鬘が十歳になつた時、少貳は筑紫で重い病氣に懸つて客死した。少貳には三人の男の子があつたが、少貳の生前仲の悪かつた人が國內に大勢居るので、都へ急に出立する事も出来ず、心細い月日を送つてゐるうち、玉鬘は二十の女盛りとなつて、その美しさは遠近の評判となつた。

玉鬘の住んでゐる肥前の隣國肥後の國に、大夫の監と云つて年三十くらゐの、勢威並びなき武士があつた。これが玉鬘の美貌に想を懸けて、その年の三月頃に結婚を申し込んで來たので、若しこれを拒絶したなら、どのやうな憂き目にあふかも知れぬと思つて、少貳の三人の子のうち二人は、その言葉に同意したが、中兄の豊後介だけは、「此の君を都へ連れて上る事が自分に對する第一の孝行だ」と云つた父の遺言を重んじて、大夫の監には、四月の廿日頃に結婚式をあげようと云つて、安心をさせ、直ちに玉鬘及び母を伴つて、夜に紛れて住みなれた肥前の土地を逃げ出した。途中も、追手がかかるかと思つて、安き心もなかつたが、舟に乗つて漸くの事で都へ到着した。

併し、都に來ても、別になすべき方法もなかつた。九條の邊に知人を訪ねて泊めては貰つた

ものの、今後何うしてよいかわからなかつた。此のやうな時には神佛を念ずるより外はないといふので、秋の頃、長谷の觀音に參詣した。道中四日を費して、勞れ果てた足を留めた長谷の宿で、玉鬘一行の人達と泊り合はせた身分のよささうな女は、意外にも右近であつた。互ひにその行方を捜し合つてゐた時なので、何れも此の意外の邂逅を喜んで話は盡きなかつた。翌日は一所に觀音に參詣して、此の「藤原の瑠璃君」の爲めに祈願をこめ、やがて互ひの住所を問ひかはして別れを告げた。

右近は歸京すると直ぐに、源氏君がかねて捜し求めてゐた夕顔の忘れ形見玉鬘を見付け出した事を、源氏君に話した。源氏君は大いに喜んで、紫上——今年廿七八になる——にも事情を明かして、玉鬘の實父内大臣には何も知らせずに、自分の手元に引き取る事にした。内大臣には子供が大勢居るから、今更その實子を見付け出したからと云つても、大して喜ばれはすまい。それに引きかへて、

「我はかう淋々しきに、覚えぬ所より尋ね出したるとも云はむかし。好色者どもの、心盡くさする材料には、いといたうもてなさむ。」(自分がかやうに子供がなくて淋しいので、意外

の所から隠し子を探し出して連れて来たのだとも吹聴しよう。色好み達の心を奪つてやる爲めに、その女を甚だ美しくつくりたててやらう。

と云ふので、九月には、玉鬘を右近の里なる五條の家に引き取つて、諸種の準備をととのへ、十月頃、六條院の丑寅の町なる、花散里の住んでゐる西の對に玉鬘を移らせた。田舎育ちの事ゆゑ、さぞ見苦しい事であらうと危んでゐた源氏は、玉鬘に會つて、その美しさ、しとやかさを見て非常な満足を感じた。そして

戀ひ渡る身はそれなれど玉鬘如何なる筋を尋ね來つらむ

(夕顔を戀ひ慕つてゐる此の身は昔の通りで變りはないが、此の女の子とは何の由縁もない自分の所に、何ういふ縁故を辿つてやつて來たのであらうか。)

と紙に書き記した。かくて豊後介は源氏君の家司として玉鬘に仕へ、昔日の苦心に報いられる所があつた。

その年の暮には、新年の用意に、源氏は女達に、それ／＼の容姿に似合つた色や柄を選んで晴着を配つた。空蟬の尼君もこゝに引き取られてゐて、尼にふさはしい青鈍色の着物を賜は

つた。

○

話は昔に返つて、こゝに夕顔の遺子玉鬘の事が書き出された。夕顔の巻で、母の夕顔は死に、此の女の子の事は、長い間讀者の記憶から忘れられてゐたが、此所に巻中の主要人物として甦つて來た。此の巻は夕顔の巻から直ちに續くのである。此の女の事は僅に帯木の巻で、雨夜の品定の時の頭中將の話の中、及び夕顔の巻で、右近が源氏へ語つた話の中に、一寸出たばかりであるが、それがこゝに突然主要人物として現はれた。此の書き方は前にも云つた如く作者の常套手段である。

此の巻は、一篇の獨立した物語としても讀んで面白く、筋に變化があり、場面の轉換も多く、興味の深い巻である。

筑紫の國の描寫には地方色はよく出てゐない。一體此の作者に限らず、他の物語作者でも、伊勢物語の東國、大和物語の檜垣姫の話の筑紫、同じく濱松中納言物語の筑紫の事等、遠隔の土地を出しても、地方色は全く出てゐない。まして宇津保物語の波斯國、濱松中納言物語や松

浦宮物語の唐土等には、異國情調が少しもない。

併し此の物語では、無骨無作法な肥後の太夫の監の言行に、稍々その土地の人らしい様子が描き出されてゐる。思ふに、作者は、かういふ特異な人物の描寫に、勝れた才能を持つてゐるやうである。前の末摘花、源典侍、朧月夜の内侍、後の近江君、髭黒大將及びその北方等、何れも人物がはつきりと出てゐる。然るに、紫上や明石上の如き典型的人物に至つては、寧ろその輪廓が不明瞭で、その人物を腦中に把握する事が難かしい。理想的人物の性格を紙面に生々躍動させる事は、此の天才作家にもなほ多少缺けてゐる所があるやうに思はれる。私は、此の物語の主人公源氏君の人物描寫についても、此の極みを感じざるを得ない。尤もそれは、紫上や明石上に比べると、甚だよく描けてはゐるけれども。(源氏君の性格に關しては、帚木の卷の評参照)

此の卷は源氏君の中年期を描き出す發端である。今まで作者は、大抵一卷に一人づゝの女性を出して、これをその卷においての女主人公とし、源氏君との交渉を描いた。それは若い源氏君の華やかな生活を寫すにはふさはしい書き方であるが、此の卷からは、從來の一人一卷の書

き方を捨てて、女性の性格よりは、寧ろ源氏君の落ち付いた且つ華やかな中年の生活を中心として描き、加ふるに内面描寫と家庭悲劇に筆を向けて、物語の内容の深刻味は前よりも深くなつてゐる。前のやうにあわたましい變化はなくなつて、それに代つて落ちついた深味が加はつて來た。作としても此の後の部分の方が勝れてゐるやうに思ふ。これは單に、作者が中年以後の源氏君を取扱ふ必要上、かやうな描出の態度を取つた爲めではなくして、寧ろ作者自身創作に熟練して、筆意に餘裕を生じたが爲めであらう。それとともに、作者が初めて此の物語を書き出してから、こゝに若干の年數の經てゐる事も考へなければなるまい。此の後半の落ち付いた味、深味はまた最後の宇治十帖にも續いてゐるのである。

此の卷から横柱の卷まで十卷は玉鬘が女主人公となり、此の女性を中心として、六條院に於ける四季折々の源氏君の生活と、多くの男性の玉鬘に對する戀情とを描いたものである。そして源氏君の云つた「大勢の色好み達の心を奪つてやらう」といふ心持が、その中心となつてゐる。此の一人の女性を多くの男性が取り巻くといふのは、竹取物語や、宇津保物語の主要なる内容でもあつて、古くは記紀時代の神話口碑に現はれてゐる妻争ひ傳説からその系統を引いて

ゐるもの。その物語に伝統的な内容を此所に取り入れたのだと思ふ。

初め長谷の宿で玉鬘の一行が右近に會ふ所は、如何にも偶然の出會で、説話の進行上必然さを示してはゐないが、併し此の作者の此の場合の描き方は、讀者に決して餘りに唐突な感じや不自然な感じを與へない。

此の巻の最後の部分は「衣配り」の段として有名である。源氏君が六條院に集めた多くの女達に似合はしい衣服を選ぶ。此の衣服の色合や柄等も詳しく描かれてゐて、今の我等にははつきりとその模様を眼の前に再現する事は難しいが、當時にあつては必ずやそれ／＼の女性の性格にしつくりとあつたもので、此の趣向は確かに當時の讀者の喝采を博した所であらう。

此の衣を貰つた女達は、紫上、明石姫君、花散里、玉鬘、末摘花、明石上、空蟬の尼君までも居て、今までの人物が一堂に會したかの觀がある。作者が従來の繁多な女性の點出を廢して、寧ろ單一人物關係を以つて、内容の深味を増さうとした作意が、こゝに見える。従來活躍した女性は何れもこゝに團圓を告げたものといふ事が出来る。

新しく舞臺に登場した玉鬘の性格については、衣配りの條に作者が、玉鬘はその父内大臣に

似て、華やかな所があり、清らかな美しさはあるが、なまめかしい所はないと云つてゐるのに従ふべきであらう。百合の如く美しいが仇つぽくはない、愛嬌も何ちらかと云へばないやうな女性らしい。併しその描き出された所は、紫上や明石上などと同様に不明瞭で、はつきりとした性格はよくわからぬ。單に優れた美しい女性といふにとどまるやうである。

(一) 大夫は五位の人の總稱、監は太宰府の大監の役を云ふ。六位相當の役であるが、此の男は六位から五位に一階上つても役目は元の儘大監であつたので大夫の監と云つたのである。實名は出てゐない。

(二) 此の當時大和の長谷寺は最も尊崇せられて、京から詣る者が多かつた。

(三) 玉鬘の幼名。藤原氏は頭中將の家である。

(四) 丑寅は東北。東北の方にあたる一區劃内に建てられてゐる寢殿造。

(五) 此の歌によつて卷名が出で、此の女の名前もかく呼ばれるやうになつた。實名ではない。玉鬘は正しくは玉葛と書くべきで、玉は美稱、葛は蔓草(ツルクサ)の類である。此の歌は後撰集卷十八源善朝臣の「いづくとて尋ね來つらむ玉葛我は昔の我ならなくに」を本歌として詠んだ。

玉葛は葛の蔓の這ひ廻つてからみあつてゐるのを「筋を尋ね來つらん」の語に言ひかけた修飾詞である。

(六) 三位以上の貴族の家に仕へて家事を司る家令家扶の如きもの。

(七) 此の一段を「衣配り」といふ。

(八) 鈍色は濃き鼠で喪服に用ひ、青鈍色は縹(花田)色に青みあるもの、尼などの衣。凶事にも用ひる。

(九) 我が國の妻争ひ傳説については藤澤衛彦氏の「日本傳説研究」第一卷に詳しい解説が出てゐる。

二十三 初音 (三十六歳正月の事)

年立ち返る朝の景色は麗かに晴れて、空は霞み、木の芽は烟り、人の心も長閑であつた。春の景色を好む紫上の住居には、梅の香も高く匂つて、極樂のやうに思はれた。朝の年賀の人々が來て騒がしいので、夕方になつて源氏君は方々の女達の所を訪れた。明石の姫君の所には母の明石上からの贈物も來てゐた。そしてそれには、次のやうな歌を書いた紙がついてゐた。

年月を松に引かれて經る人に今日鶯の初音聞かせよ

(松に待つを兼ね、鶯を姫君に譬へた。そなたが紫上のお所に引き取られてから長い間會はないので、此の年月そなたに會ふ事を頼みとして生きてゐる自分に、今日そなたのお聲だけでもよいから聞かせて下さい。返事の手紙を下さいといふ意。)

此の歌を見て、源氏君も明石上の心持に同情した。花散里の方は極めて物靜かである。同じ所に居る玉鬘をも見舞つて、紫上の所に少しは遊びに行きなさいと云つたりした。夕暮に明石

上を訪れて、その晩は此所に泊つた。

二日には臨時客の催があり、集まつて来た貴族達は、玉鬘といふ美しい姫君を源氏君の見出された事を知つて、それとなく心遣ひをしてゐた。

やがて騒がしい日が過ぎて源氏君は舊邸二條院に行き、末摘花や空蟬の尼君を訪れた。男踏歌の日になると、踏歌を行ふ人々が源氏君の邸にも来て、賑かに夜明けまで歌ひ舞ひつゝ一夜を明かしたのは、面白い見物であつた。

○

正月らしい華やかな気分を描かうとして、齒固の祝、臨時客、男踏歌等、當時の新年の行事を出してゐる。その間源氏君は方々の女を見舞つて歩いた。今までのやうに一人一人の女との戀愛關係を描くとは違つて、此所に集められた多くの女に取り巻かれて、源氏君の榮華な得意な生活が、これから以下の數卷に展開せられるのである。

(一) 卷名の出所。

(二) 正月二日三日に攝關家で催す宴會を云ふ。定まつた公事ではないので臨時と稱する。

(三) 正月十四日又は十五日に行はれた。四位以下の青年が大勢集まつて宮中から大臣家まで廻つて歌つたり舞つたりして見せる。古への歌垣の遺風だと云ふ。これに對して女踏歌は正月十六日に行はれた。

(四) 元日に長壽を祝つて大根、押鮎、鹿肉等をたべる事。

「や」

二十四 胡蝶 (三十六歳三月四月の事)

三月の廿日餘り、紫上の方では、池に舟を浮べ、雅樂寮の樂手を召して音楽を奏させた。秋好中宮も、宮中からお里に歸つて居られる時分なので、そのおつきの女房をも舟に載せて遊ばせた。その晩は庭先に篝火を焚いて遊び明かした。此の宴樂に參會した螢兵部卿官は、三年前に北方を失つたので、玉鬘を妻に貰ひたいと望んで居り、内大臣の御子柏木中將の君も、玉鬘を實妹と知らないで、心をかけてゐるのである。

今日は秋好中宮の催される御讀經が始まつたので、人々はこれに出席した。紫上からは、美しい花の咲き亂れた花瓶が、鳥と蝶の装ひをした美しい八人の子供の手で贈られて式場を飾り、且つ中宮に次のやうな歌を差し上げた。

花園の胡蝶をさへや下草に秋待つ虫は疎く見るらむ

(秋待つ虫は中宮を譬へた。秋のお好きな中宮様は、花園に舞ふ胡蝶をすらもお嫌ひで)

さいませう。花瓶を持ち運ぶ稚兒に胡蝶の扮装をさせたのでかく歌つた。

月があけて、初夏更衣の時節となつた。その後、玉鬘に心を寄せて、懸想の手紙を贈る人が多いので、時々源氏君は玉鬘の所へ行つて、その手紙を開いて見ても興じてゐた。柏木からの手紙には

思ふとも君は知らじな浦き返り岩漏る水に色し見えねば

(私の心中は、あなたを思ふ心で浦き返つて居るのですが、その岩から漏れる水に色がないうやうに、私の心にも色が見えないので、あなたは私がこれほどまでにあなたを思つてゐるとは御存じない事でせう。)

と書いてあつた。

かやうに他の人達が想を懸けてゐるばかりではなく、實は源氏君もひそかに心を悩ましてゐる一人であつたのだ。玉鬘の美しい肌、丸く太つた腕の肉を見ては、さすがに惱ましい心持になつて、親らしくない言葉、仕打のまじる事もあるので、玉鬘はひそかに心を痛めた。併しさすがに源氏君は若い時のやうに情慾に捕はれる事もなく、直ぐに心を取り直して、さあらぬ顔

で玉鬘を慰めて、自分の臥床ふしどに歸つて行つた。

○

春らしい華やかな長閑な遊びが描かれてゐる。源氏君が玉鬘を見て惱ましい心持になるのも、春の夜らしい情緒がある。併しその心を思ひ返す所は、さすがに中年に達して、人間が出来上つたからである。入内の前から秋好中宮に對しても源氏君は同じ心持を持つてゐた。これが若い時なら、源氏君はその情慾の爲めに負けてしまつた事であらう。こゝに作者は、青年時代の源氏君と中年時代の源氏君との心持を、十分に描き分けてゐるのである。

柏木中將は前にも少女の巻に内大臣の令息として一寸名前が見えるが、此の巻で始めて讀者の注意にのぼつて来る。此の人物は後に物語の重要な役目を勤めるのである。意志薄弱な神經質の青年で、女のやうな所のある人物のやうに描かれてゐる。

(一) 此の北方は右大臣の姫君なる事が花宴の巻に出てゐた。

(二) 季(キ又はトシと訓む)の御讀經と云つて春秋の二季に行はれる、大般若經を轉讀する式。春は二月又は三月に行はれ四ヶ日續く。秋は八月に行はれる。

(三) 卷名の出所。

(四) 此の詞によつて柏木の事をまた岩瀧の中將とも此の作者は云つてゐる。

二十五 螢 (三十六歳の五月の事)

源氏君は玉鬘を戀しく思つて、その後、暇さへあればその部屋に行つて、顔を見ては心を慰めてゐた。そして時々人は人から疑はれるやうな事も交つたが、さすがに源氏君は思ひ返して、無法な仕業をするやうな事はなかつた。

五月雨の頃の或る夜、玉鬘を懸想してゐる兵部卿官は、源氏君の許しを得て玉鬘の部屋に行き、御几帳を隔てて玉鬘に逢つて、その心中の悶々の情を語つてゐた。折から源氏君は、突然二人の間を隔ててゐた御几帳の帷子をさつと上げるとともに、かねて隠しておいた多くの螢を玉鬘の顔の邊に放つた。螢の光に照らし出された玉鬘の世にも美しい顔を始めて見た兵部卿官は、心に泌みてその面影が忘れられなかつた。かやうにして源氏君は、兵部卿官を弄んでは楽しんでゐた。

五月五日には花散里の方の馬場で騎射の競技があつた。その晩は花散里の所に泊つて、兵部

卿官やその御弟なる帥の官の事を話したりした。

五月雨が長く降り續いて退屈の餘り、玉鬘は小説を読んで日を暮らしたが、小説の中にも、自分のやうな薄幸な身の上の女は出て來ないやうに思はれた。源氏君は相變らず玉鬘の所を訪れては、冗談とも本心ともつかないやうな事を云つて、悶々の情を玉鬘に訴へたりした。その際源氏君は玉鬘に語つて、

「其の人の上とて、ありのまゝに言ひ出づる事こそなけれ、善きも悪しきも、世に經る人の有様の、見るにも飽かず、聞くにも餘る事を、後の世にも言ひ傳へさせまほしき節々を、心に籠め難くて、言ひ置き始めたるなり。善きやうに言ふとては善き事の限りを選り出でて、人に隨はんとては、また悪しき事の珍らしき事を取り集めたる、皆方々につけたる、此の世の外の事ならずかし。人の御門の才作様變れる、同じ倭の國の事なれど、昔今のに變るべし。深き事淺き事のけぢめこそ有らぬ、ひたぶるに虚言と言ひ果てむも、事の心違ひてなむ有りける。」(何の某と云ふ人の身の上話だと云つて、實際の名前を小説の上に顯はしたりするやうな事はしないが、善惡ともに、世間の人々の行爲の、ひとり見聞くに忍びず、後世に

言ひ傳へさせたい事を、心一つに籠めておく事が出来ずして、小説に書き現はすやうになつたのである。立派な人物を描く爲めには善い所ばかりを選び出して書き、讀者の好みに随ふ爲めには、時には見苦しくはあるが、珍らしい話を書き集めたりして、それ／＼趣向は違ふが、皆世間に實際ありはしない話はないのである。支那の小説が我が國の小説と内容文體を異にしてゐる如く、同じ我が國の小説でも、昔の小説と今の小説とでは違ひがあるであらうし、又内容に深味のあるのと浅いとの差別もあらうが、とにかく小説は全く作り事ばかりだと言つてしまふのも、文藝の本質には違つた考へ方である。

などと論じたりした。又、紫上も、自分の育ててゐる明石の姫君が好きだからと云つて、自分も小説を愛讀してゐたので、源氏君は、紫上に、幼い明石の姫君には、戀愛小説などを讀ませぬやうに注意したがよい。年はも行かぬものが、世間にさういふ事もあるのかと知るのにはよくない事だから、と教へたりした。

その頃、柏木も玉鬘に言ひ寄らうと思つて、親友なる夕霧にその取持を頼んだが、夕霧は都合はなかつた。

内大臣には大勢子供があつたが、女の子は少いので、かの夕顔の生んだ子供の事が今もなほ心にかゝつて、それとなく捜してゐたが、行方がわからなかつた。それで、自分の娘と名告るものがあつたら、氣を付けておいてくれ、と子息達にも言ひ付けておいた。

○

五月雨の夜美女の姿を螢の光に映して見る圖。それは浮世繪にでも描かれさうな艶麗な場面である。但し此の趣向は既に宇津保物語初秋の巻にもあり、又早く伊勢物語源の至の條にも似た事が出てゐて、必ずしも此の作者の獨創ではない。玉鬘によつて、男の心を弄ばうとは、玉鬘の巻にも記してあつた。兵部卿官がその的に當つたのは、温厚で趣味の深い人物であるだけに、氣の毒な感じがするが、それによつて或る快感を味はうとする源氏君の心持は變態心理的である。併しかういふサチスツクな傾向は誰にもあるので、此の間の描寫も興味深く讀める。

五月五日に行はれる騎射は年中行事の一であるが、春の御讀經と云ひこれと云ひ、作者は季節の催し物を取り入れて、その時々を感じを出さうとする用意を忘れない。そして、此所に此の騎射の事を書く爲めに、少女の巻の終に、馬場の設けられた事を記して、前後照應させてゐ

るのは、例の作者の周到なる用意が見られる。

さて此の巻で特に注意すべきは、作者の小説論の窺はれる事である。此の巻の終の方、源氏君が玉鬘を訪れた時に、源氏君は、日本紀の如き史書には、本當の世相と云ふものは現はれてゐない。寧ろ小説の中に眞の人間生活が見えるのであると云つて、本文に引いたやうな意見を述べて居るが、これは作者の小説論とも見る事が出来るのであつて、小説の内容論に立ち入り、文藝の寫實主義を結論として、高調してゐる事は、以つて作者の識見の程を見るに足る。此の點に於いて他の巻（繪合や若菜下）に見えた繪畫論や音樂論とともに、作者の藝術觀を窺ふ上に重要な巻である。繪合の巻で、空想的な竹取物語は寫實味の勝つた宇津保物語に敗れた。伊勢物語よりも正三位物語の、近頃の宮中生活を始め、世相を描寫した作品の方が優れてゐるとせられた。これらと相俟つて、作者の文藝觀を知るべきである。此の物語に、^(七)作中の人物がしばしば「自分の身の上を昔物語の人物に比して嘆じてゐるのも、後の人が、「まるで小説のやうな身の上だ」などと云ふのは違つて、より深い意味があるのであらう。とにかく作者が寫實味を重んじ、描寫論、文體論にまで及んで考へてゐた事は、當時としては甚だ進歩した

考へ方である。其の他此の巻には、住吉物語、宇津保物語の古物語についても述べてあつて、作者の文藝觀が見られるのは甚だ興味が深い。

- (一) 貴婦人の座側に置いて人からその姿を見られぬやうにしたもの。高さ三尺乃至四尺の丁字形の木に帷子を下げた。
- (二) 几帳に下つてゐる布。當時の婦人はこれでその姿を隠して人と話をした。
- (三) 卷名の出所。
- (四) これによつて此の宮を發兵部卿宮と呼ぶ。實名ではない。
- (五) 五月五日には宮中でも騎射の儀式が行はれた。馬上よりの弓を射當てる競技である。
- (六) 此の人が繪合の判者となつて趣味深い話をした事は繪合の巻に出てゐた。
- (七) 胡蝶、楨柱、夕霧、又此の卷等に見える。本居宣長の「源氏物語玉の小櫛」卷一にこれらの箇所が採萃せられてゐるので、その箇所を見るのに便利である。
- (八) 今傳はつてゐる住吉物語は鎌倉時代の偽作。平安時代當時のものは傳はつてゐないが、筋は大體同じものであらうと思はれる。

大變暑い日、内大臣の子息達が遊びに来たので、源氏君は東の釣殿に出て氷を一所に食つたりした。そして、近頃内大臣が引き取つた愚かな姫君の噂話をしたので、内大臣の子息達は恥かしく思つた。

夕方皆が歸つてから、源氏君は玉鬘の所へ遊びに行つた。和琴を弾いて聞かせると、感心して聞き入つてゐる玉鬘の顔が、火影に映つて美しかつたので、源氏君は

撫子(三)のそこ懐かしき色を見ばもとの垣根を人や尋ねむ

(撫子を一に常夏(とこなつ)とも云ふので永久懐(とこな)に云ひかけた。撫子を玉鬘に、元の垣根を夕顔に譬へた。自分の所に居る此の玉鬘の何時も美しい姿を、實父の内大臣が見つけたならば、さぞ昔の夕顔と自分との關係まで内大臣は怪しく思つて調べる事であらう。)

と歌つた。玉鬘は、源氏君が時々妙な素振りをするのも今は見馴れて、さほど氣味悪くも思は

なくなつた。

内大臣の家では、子息達が歸つて来て、源氏君の邸での事を話すと、内大臣は、源氏君が引き取つた玉鬘でも、實はさう大した女でもあるまいなどと悪口を云つた。そして姫君の雲井雁の部屋をのぞいて見ると、雲井雁が肌も露はにうたゝ寝をしてゐるので、女の身にあるまじき事と誠めた。それからまた、内大臣が此の頃外妾の腹に出来た女の子を捜し出して引き取つたが、その性質の愚かしいのに困つてゐる、今姫君の部屋の方に廻つて見ると、丁度女房の五節君と雙六(六)をしてゐる所であつたが、さても此の姫君の無作法さ、雙六の勝負を争ふのに手を打つて大聲にわめき立てる、小便壺の事まで遠慮なく口にする、それに早口でべらべらとしやべるのが癖で、慎しみ深い所が少しもないのには、父親の内大臣も呆れてしまつたが、さすがに愛嬌があつて親しみ易く、滑稽な所にかへつてよい所もあるやうに思はれた。たゞ田舎に育つたので、言葉が下品であるが、近頃は歌の稽古をして、怪しげな手付で手紙を書いて、姉なる弘徽殿女御の所にやつたりした。

こゝに近江君なる新人物を出した。玉鬘が源氏君に見付け出されたのに對して、内大臣は此の娘を捜し出したのであるが、その滑稽な性格は、玉鬘のしとやかなのと正反對である。かやうに滑稽な人物を出して物語の單調さを破るとともに、それに對比して玉鬘を益々光輝あらしめるのは、蓋し作意の存する所であらう。物語中の滑稽なる三女性は、上品すぎて現代離れのした末摘花と、年を取つても色氣の抜けない源典侍と、そして下品で騒々しい此の近江君の三人であるが、それ／＼違つた性格を持ち、従つて、その滑稽味の内容にも異つた感情が含まれて、千篇一律にならない所が作者の手腕である。

此の近江君を出す爲めに、前巻の終に内大臣をして「自分の子供と名告るものがあつたら注意しておいてくれ」と子息達に云はせてゐる。かやうにちよつとした暗示（暗示）を前の巻に與へて、次に意外な人物を意外な所から出して來るといふ書き方は、度々云つた如く此の作者の常套手段である。

なほ、若い時から、いろいろな意味での競争相手である内大臣は、源氏君が玉鬘を得たのに對し、此所でも競争的な意味で、やはり一人の娘を探し出して來るのであるが、それが玉鬘と

は比較にならない粗野な女であるのは、常に源氏君の方が勝ち、成功してゐるのに對し、内大臣の方を負けさせ不成功に終らせる、これも此の物語の中の、一つの構想の手法である。

(一) 寢殿造に於いて、對屋より長い廊下を通じて中庭の池の上に建てられてゐる小さい家。

(二) 和琴は輸入樂器なる琴（きん）や箏（そう）と違つて、我が國固有の樂器である。絃の数が六絃で琴、箏よりも少い。

(三) 卷名の出所。

(四) 近江の君といふ。作者が付けた名であるが、名のいはれは明かでない。但し、近江君の口早なるは妙法寺別當の大徳が此の君の産所に侍つたから、それにあやかつたのだと、作者は此の巻で近江君に云はせてゐる。妙法寺は近江國神崎高屋郷（今の山上村字妙法寺）の寺故、此の君は近江で生れ、そこで育つた女なのである。今姫君とは新しく見出された姫君といふ意。

(五) 此の巻だけに侍女として出て來る人物で、筑紫の五節君とは違つた人。

(六) 碁とともに廣く行はれた勝負事。今の繪雙六は徳川時代になつて出來たもので、此の時代のは盤雙六なる事は云ふまでもない。二つの碁を振つて出た目の数だけ盤の駒を進めるから雙六と書く。六は碁の面の数である。